

千葉県八千代市

栗谷遺跡 役山東遺跡
雷南遺跡 雷遺跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

— 第3分冊 —



2004

大成建設株式会社
八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は千葉県北西部に位置し、東京への通勤圏内として様々な住宅団地が造られてまいりました。特に昭和20年代末からの八千代台団地の計画・造成・建設と30年代初頭の入居開始は、今となっては小規模な住宅団地となってしまいましたが、全国に先駆けて造られた「団地」として「住宅団地発祥の地」の記念碑的なものとなっております。その後、昭和40年代にはいと、数多くの住宅団地が造成され、人口の増加はめざましいものがありました。これに伴い八千代市の姿は、純農業地帯から住宅都市へとその趣を変えてまいりました。

一方、住宅としての発展に伴う宅地開発などによって失われていく埋蔵文化財を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そして八千代市の大地には、およそ3万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできたことが、これらの発掘調査によって次第に分かってきております。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは数多くの墨書土器が出土しており、全国的にみても八千代市はその出土数において有数の地となっております。

このようななかで、八千代市の北東部の保品・神野・米本地区にわたる地区に「(仮称)八千代カルチャータウン」の開発が計画されたのは、昭和40年代のことと聞いております。しかしこの開発事業予定区域内には、多くの遺跡の所在が知られておりました。そして、これら埋蔵文化財の保護のために、その取り扱いについて、関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存の困難な地区についてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により、昭和63年3月から平成11年3月にかけて行われました。この長い期間に調査を行った遺跡は9遺跡34地点に及び、旧石器時代から中世・近世に至る貴重な成果を得ることができました。そして平成11年度は整理作業の準備期間にあて、平成12年4月より順次、本整理作業を進めておるところです。

本書はこの9遺跡のうち、栗谷遺跡・役山東遺跡等の発掘調査の成果の一部をまとめたものです。栗谷遺跡では主に旧石器時代から縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の人々の暮らしの跡が残されており、その調査の成果を3地区に分け、3分冊によって報告することとなっております。今回、ここに報告いたします。栗谷遺跡Ⅲ地区で、印旛沼南岸でも有数というべき弥生時代後期のムラの跡等も調査されており、当時の人々の暮らしの一端が明らかとなっております。この成果をまとめた本書が、学術資料としてはもとより、文化財保護に広く地域の歴史に興味を持たれる方々によって活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長い期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、数々のご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関並びに関係諸氏に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査及び整理作業に従事された方々に深く感謝いたします。

平成16年8月

八千代市遺跡調査会
会 長 三浦 幸子

例 言

1. 本書は、「千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」である。
 2. 栗谷遺跡を3つの地区に分割し、各地区ごとに報告する予定である。報告書は、栗谷遺跡で3分冊となる予定である。
 3. 本書は、栗谷遺跡全3分冊のうちの第3分冊である。本書で報告する地区は、栗谷遺跡のⅢ地区である。
 4. 栗谷遺跡は、千葉県八千代市保品字中台谷1909-1外に所在する。
 5. 栗谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
 6. 発掘調査の実施期間、調査面積等については、第1章に記載した。
 7. 整理作業及び報告書刊行作業は、宮澤久史・朝比奈竹男が担当し、平成14年11月1日～平成15年8月31日までの期間実施した。
 8. 本書の執筆・編集は宮澤久史が行った。縄文土器の観察については、一部、常松成人が行った。
 9. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ(株式会社東京航業研究所)が担当した。
 10. 発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
 11. 整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
 12. 遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
 13. 栗谷遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
 14. 発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
 15. 出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授いただいた。
 16. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)
- 千葉県教育庁文化財課・(財)印旛郡文市化財センター・(財)千葉県文化財センター・(財)千葉県市教育振興財団埋蔵文化財センター・八千代市教育委員会・八千代市郷土博物館
青沼道文・阿部寿彦・安藤広道・大沢孝・小川和博・小笠原永隆・小倉淳一・柿沼修平・川端弘士・菊池健一・黒沢浩・郷堀英司・佐藤順一・関口達彦・山形孝一・高花宏行・田川良・田中英世・中村俊夫・平川南・深谷昇・藤岡孝司・峰村篤・村松篤・山岸良二

凡 例

1. 遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通番号を新たに付与し直した。この遺構番号については、第1章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図1 国土地理院発行 1/25,000地形図 「小林」「佐倉」「白井」「習志野」(平成12年発行)

図2 大成建設株式会社発行 1/4,000 Y, K, プロジェクト 空中写真測量図(昭和63年発行)

3. 本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4. 本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡 1/80 掘立柱建物 1/80 方形周溝墓 1/100 土坑 1/50 溝 1/50 炉穴 1/50

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。



(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5. 本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/3 石器・石製品 1/2 1/3 1/4

鉄器・鉄製品 1/4 銅製品 1/2 支脚 1/4



(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗り、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は線取りを行った。なお、推定復元部分は破線で示した。



6. 本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。

- (1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。
- (2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。
7. 墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、一部コンピュータによって画像処理を行い、読みやすくしたものがある。
8. 本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「匏（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたものを「線刻」として区分している。
9. 鉄製品及び銅製品については、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第1編 序 説	
第1章 栗谷遺跡Ⅲ地区・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡の調査経過と調査方法	1
第1節 栗谷遺跡Ⅲ地区の調査の経緯	1
第2節 役山東遺跡の調査の経緯	3
第3節 雷南遺跡の調査の経緯	3
第4節 雷遺跡の調査の経緯	3
第2編 栗谷遺跡	
第1章 栗谷遺跡Ⅲ地区の調査の概要	4
第1節 栗谷遺跡Ⅲ地区の概要	4
第2章 遺構と遺物	9
第1節 縄文時代	9
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 炉穴	15
(3) 遺構	26
(4) 土坑	34
(5) 遺物包含層	43
第2節 弥生時代・古墳時代	
第1項 弥生時代後期	53
(1) 竪穴住居跡	56
(2) 方形周溝墓	109
(3) 遺構	114
(4) 土坑	119
第2項 古墳時代中期	123
第3項 古墳時代後期	125
第3節 奈良・平安時代	129
(1) 竪穴住居跡	132
(2) 掘立柱建物跡	189
(3) 遺構	198
(4) 土坑	208
第4節 中世以降及び時期不明	217
(1) 栗谷塚	217
(2) 土坑	226
(3) 溝	238
(4) その他遺構	247
第3章 考 察	249
第1節 縄文時代	249
第1項 遺構	249
(1) 竪穴住居跡	249
(2) 炉穴	249
(3) 陥穴	250
第2項 遺物及び包含層	251
第3項 まとめ	252
第2節 弥生・古墳時代	253
第1項 弥生時代中期	253
第2項 弥生時代後期	256
(1) 弥生時代後期の 出土物について	256
1 研究略史	256
2 分類の視点	260
3 編年案の提示と問題点	261
4 まとめ	264
(2) 集落について	273
1 形態分類と群構成について	273
2 まとめ	281
第3項 古墳時代前期	283
(1) 方形周溝墓	283
(2) 時期的検討	284
(3) まとめ	285
第3節 奈良・平安時代	289
(1) 集落について	289
(2) まとめ	293
第3編 役山東遺跡	
第1章 役山東遺跡の調査の概要	297
第1節 役山東遺跡の概要	297
第2章 遺跡と遺物	299
第1節 縄文時代	299
(1) 炉穴	300

(2) その他の遺構	302
第2節 弥生時代	304
(1) 竪穴住居跡	304
第3節 奈良・平安時代	311
(1) 竪穴住居跡	311
(2) 土坑	312
第4節 中世以降	316
(1) 土坑	316
第5節 遺構外出土遺物	319
第3章 考察	321
第1節 縄文時代	321
第2節 弥生時代	321
第3節 奈良・平安時代	321
第4編 雷南遺跡	
第1章 雷南遺跡の調査の概要	322
第1節 雷南遺跡の概要	322
第2章 遺構と遺物	323
第1節 本調査区域	323
第2節 確認調査区域	328
第3章 考察	329
第5編 雷遺跡	
第1章 雷遺跡の調査の概要	330
第1節 雷遺跡の概要	330
第2節 出土遺物	331
第3節 調査のまとめ	331

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

図 1	栗谷遺跡・雷遺跡・雷南遺跡・役山東遺跡位置図 (1/50,000)	1	図 36	D079.D080.D081	39
図 2	栗谷遺跡周辺地形図およびグリッド配置図	2	図 37	D082.D083.D084	40
図 3	栗谷遺跡本調査地区割図	2	図 38	早期遺物出土状況	43
図 4	役山東調査地区	3	図 39	縄文時代早期前半	44
図 5	雷南調査地区	3	図 40	縄文時代早期後半	45
図 6	栗谷遺跡遺跡基本土層図	4	図 41	縄文時代早期後半 (2)	46
図 7	栗谷遺跡遺構配置図 栗谷Ⅲ地区 (今回報告地区)	5	図 42	縄文時代前期	47
図 8	縄文時代遺構配置図	9	図 43	縄文時代中期	48
図 9	縄文時代遺構配置図 (2)	9	図 44	縄文時代後期	49
図 10	縄文時代遺構配置図 (3)	10	図 45	縄文時代後期 (2)	50
図 11	A048	11	図 46	弥生時代遺構配置図	53
図 12	A049	12	図 47	弥生時代遺構配置図 (2)	54
図 13	A128	13	図 48	弥生時代遺構配置図 (3)	54
図 14	F026	15	図 49	弥生時代遺構配置図 (4)	55
図 15	F027	16	図 50	A129	56
図 16	F028	17	図 51	A129 (2)	57
図 17	F029.F030.F031	18	図 52	A130	58
図 18	F032.F033	19	図 53	A131	59
図 19	F034.F035	20	図 54	A132	61
図 20	F036	21	図 55	A132 (2)	62
図 21	F036 (2)	22	図 56	A133	63
図 22	F037.F038	23	図 57	A134	64
図 23	F039.F040	24	図 58	A134 (2)	65
図 24	I002	26	図 59	A135	66
図 25	I003	26	図 60	A136	67
図 26	I004	28	図 61	A137	68
図 27	I005	29	図 62	A137 (2)	69
図 28	I006	30	図 63	A138	70
図 29	I024	31	図 64	A139	71
図 30	I007	33	図 65	A140	72
図 31	D071.D072	34	図 66	A141	73
図 32	D073	35	図 67	A142	74
図 33	D074.D075.D076	36	図 68	A142 (2)	75
図 34	D077	37	図 69	A143	76
図 35	D078	38	図 70	A144	77
			図 71	A145	78
			図 72	A146	79
			図 73	A147	80

図74	A148	81	図114	奈良・平安時代遺構配置図 (A群)	129
図75	A149	82	図115	奈良・平安時代遺構配置図 (D群)	130
図76	A149 (2)	83	図116	奈良・平安時代遺構配置図 (B群)	131
図77	A150	84	図117	A165	132
図78	A151	85	図118	A166	134
図79	A151 (2)	86	図119	A167	135
図80	A152	88	図120	A168	136
図81	A153	89	図121	A169	137
図82	A154	91	図122	A169 (2)	138
図83	A155	92	図123	A170	139
図84	A155 (2)	93	図124	A171	139
図85	A155 (3)	94	図125	A171 (2)	140
図86	A156	96	図126	A172	141
図87	A156 (2)	97	図127	A173	143
図88	A157	98	図128	A173 (2)	144
図89	A157 (2)	99	図129	A174	144
図90	A158	99	図130	A174 (2)	145
図91	A158 (2)	100	図131	A175	146
図92	A159	101	図132	A175 (2)	147
図93	A160	102	図133	A176	148
図94	A160 (2)	103	図134	A176 (2)	149
図95	A161	104	図135	A177	151
図96	C015	109	図136	A177 (2)	152
図97	C015 (2)	111	図137	A178	154
図98	C016	112	図138	A178 (2)	155
図99	I008	114	図139	A178 (3)	156
図100	I009	115	図140	A179	159
図101	I010	116	図141	A179 (2)	160
図102	I011	117	図142	A179 (3)	161
図103	I012	118	図143	A180	166
図104	D085	119	図144	A180 (2)	167
図105	D086.D087	120	図145	A181	168
図106	D088	121	図146	A181 (2)	169
図107	D089	121	図147	A182	170
図108	D090	122	図148	A183	172
図109	中期・後期遺構配置図	123	図149	A184	174
図110	A162	123	図150	A184 (2)	175
図111	A162 (2)	124	図151	A185	177
図112	A163	125	図152	A185 (2)	178
図113	A164	127	図153	A186	179

図154 A187	180	図194 D138.D139.D140.D141.D142.D143.D144	231
図155 A187 (2)	181	図195 D145.D146.D147.D148.D149.D150	232
図156 A188	182	図196 D151.D152.D153.D154	233
図157 A188 (2)	183	図197 溝位置図	238
図158 A189	185	図198 E002	239
図159 B007	189	図199 E003	241
図160 B008	190	図200 E004	242
図161 B009	191	図201 E004 (2)	243
図162 B010	192	図202 E005	245
図163 B011	193	図203 I021.I022	247
図164 B011 (2)	194	図204 I023	248
図165 B012	195	図205 F010.F020	250
図166 B013	196	図206 大崎台遺跡・栗谷遺跡出土遺跡	253
図167 B013 (2)	197	図207 逆水遺跡遺構配置図	254
図168 I013	198	図208 栗谷遺跡・大崎台遺跡・逆水遺跡出土遺物	254
図169 I014	199	図209 弥生中期遺跡分布図	255
図170 I015	200	図210 栗谷遺跡弥生後期土器の類別と類例	261
図171 I016	201	図211 A043.A080.A081.A155主要出土遺物	263
図172 I017	202	図212 栗谷遺跡弥生後期における各類型土器変遷	265
図173 I018	203	図213 栗谷遺跡弥生後期主軸方位と規模	273
図174 I019	204	図214 A016.A017.A046	274
図175 D091	208	図215 A013.A033	275
図176 D092	208	図216 栗谷遺跡弥生後期YA群・YB群 遺構配置と主軸方位と規模	276
図177 D093	209	図217 栗谷遺跡弥生後期YD群 遺構配置と主軸方位と規模	277
図178 D094.D095.D096	210	図218 栗谷遺跡弥生後期YC群 遺構配置と主軸方位と規模	278
図179 D097.D098.D099	211	図219 栗谷遺跡弥生後期YE群・YF群 遺構配置と主軸方位と規模	279
図180 D100.D101.D102	212	図220 栗谷遺跡弥生後期YG群 遺構配置と主軸方位と規模	280
図181 D103.D104.D105	213	図221 栗谷遺跡弥生後期遺跡分布図	282
図182 D106.D107.D108	214	図222 C001.C015	283
図183 栗谷塚位置図	217	図223 栗谷遺跡弥生後期～古墳時代における土器変遷	286
図184 I020	218		
図185 I020 (2)	220		
図186 I020 (3)	222		
図187 I020 (4)	224		
図188 I020P1	225		
図189 D109.D110.D111.D112.D113.D114	226		
図190 D115.D116.D117.D118.D119	227		
図191 D120.D121.D122.D123.D124	228		
図192 D125.D126.D127.D128.D129.D130	229		
図193 D131.D132.D133.D134.D135.D136	230		

図224	栗谷遺跡 奈良・平安時代A群 遺構配置と主軸方位と規模	289	図260	グリット別出土遺物	328
図225	栗谷遺跡 奈良・平安時代B群 遺構配置と主軸方位と規模	290	図261	雷遺跡遺構検出状況図	330
図226	栗谷遺跡 奈良・平安時代C群 遺構配置と主軸方位と規模	291	図262	確認面出土遺物	331
図227	栗谷遺跡 奈良・平安時代D群 遺構配置と主軸方位と規模	292			
図228	役山東遺跡の基本土層図	297			
図229	役山東遺跡遺構検出状況図	298			
図230	縄文時代遺構配置図	299			
図231	F001	300			
図232	F002	300			
図233	F003.F004.F005	301			
図234	F006.F007	302			
図235	I001	302			
図236	弥生・古墳時代遺構配置図	304			
図237	A001	304			
図238	A001 (2)	305			
図239	A001 (3)	306			
図240	A002	307			
図241	A002 (2)	308			
図242	A003	309			
図243	奈良・平安時代遺構配置図	311			
図244	A004	312			
図245	D001	312			
図246	D002.D003	313			
図247	D004	314			
図248	中世以降遺構配置図	316			
図249	D005	316			
図250	D006	317			
図251	D007	317			
図252	D008	318			
図253	遺構外出土遺物	319			
図254	雷南遺跡の基本土層図	322			
図255	雷南遺跡遺構検出状況図	323			
図256	A001	324			
図257	D001	325			
図258	E001	326			
図259	E002.E003	327			

表 目 次

表1	栗谷遺跡新旧遺構番号对照表	7	表39	A144遺物觀察表	77
表2	A048遺物觀察表	11	表40	A145遺物觀察表	78
表3	A049遺物觀察表	12	表41	A146遺物觀察表	80
表4	A128遺物觀察表	13	表42	A147遺物觀察表	81
表5	縄文時代竪穴住居跡一覽表	14	表43	A148遺物觀察表	82
表6	F026遺物觀察表	16	表44	A149遺物觀察表	83
表7	F028遺物觀察表	17	表45	A150遺物觀察表	84
表8	F036遺物觀察表	22	表46	A151遺物觀察表	86
表9	縄文時代炉穴一覽表	24	表47	A152遺物觀察表	88
表10	I002遺物觀察表	26	表48	A153遺物觀察表	89
表11	I003遺物觀察表	27	表49	A154遺物觀察表	91
表12	I005遺物觀察表	29	表50	A155遺物觀察表	94
表13	I006遺物觀察表	30	表51	A156遺物觀察表	98
表14	I024遺物觀察表	32	表52	A157遺物觀察表	99
表15	I007遺物觀察表	33	表53	A158遺物觀察表	100
表16	D073遺物觀察表	35	表54	A159遺物觀察表	102
表17	D076遺物觀察表	36	表55	A160遺物觀察表	103
表18	D077遺物觀察表	37	表56	A161遺物觀察表	105
表19	D078遺物觀察表	38	表57	弥生・古墳時代竪穴住居跡一覽表	105
表20	縄文時代土坑一覽表	41	表58	C015遺物觀察表	111
表21	包含層縄文時代前期	47	表59	弥生・古墳時代方形周溝墓	113
表22	包含層縄文時代中期	48	表60	I008遺物觀察表	114
表23	包含層縄文時代後期	50	表61	I009遺物觀察表	115
表24	A129遺物觀察表	57	表62	I010遺物觀察表	116
表25	A130遺物觀察表	58	表63	I011遺物觀察表	117
表26	A131遺物觀察表	60	表64	弥生・古墳時代遺構一覽表	118
表27	A132遺物觀察表	62	表65	D085遺物觀察表	119
表28	A133遺物觀察表	63	表66	D087遺物觀察表	120
表29	A134遺物觀察表	65	表67	D088遺物觀察表	121
表30	A135遺物觀察表	66	表68	弥生・古墳時代土坑一覽表	122
表31	A136遺物觀察表	68	表69	A162遺物觀察表	124
表32	A137遺物觀察表	69	表70	A163遺物觀察表	126
表33	A138遺物觀察表	70	表71	A164遺物觀察表	127
表34	A139遺物觀察表	71	表72	古墳時代竪穴住居跡一覽	128
表35	A140遺物觀察表	72	表73	A165遺物觀察表	133
表36	A141遺物觀察表	73	表74	A166遺物觀察表	135
表37	A142遺物觀察表	75	表75	A167遺物觀察表	136
表38	A143遺物觀察表	76	表76	A168遺物觀察表	137

表 77	A169遺物觀察表	138			
表 78	A171遺物觀察表	140			
表 79	A172遺物觀察表	142			
表 80	A173遺物觀察表	144			
表 81	A174遺物觀察表	145			
表 82	A175遺物觀察表	147			
表 83	A176遺物觀察表	150			
表 84	A177遺物觀察表	152			
表 85	A178遺物觀察表	156			
表 86	A179遺物觀察表	162			
表 87	A180遺物觀察表	167			
表 88	A181遺物觀察表	169			
表 89	A182遺物觀察表	171			
表 90	A183遺物觀察表	172			
表 91	A184遺物觀察表	175			
表 92	A185遺物觀察表	178			
表 93	A186遺物觀察表	179			
表 94	A187遺物觀察表	181			
表 95	A188遺物觀察表	183			
表 96	A189遺物觀察表	185			
表 97	奈良・平安時代堅穴住居跡一覽表	186			
表 98	B009遺物觀察表	192			
表 99	B011遺物觀察表	193			
表 100	B013遺物觀察表	197			
表 101	奈良・平安時代掘立柱建物跡一覽表	197			
表 102	I014遺物觀察表	198			
表 103	奈良・平安時代遺構一覽表	205			
表 104	D091遺物觀察表	208			
表 105	D092遺物觀察表	209			
表 106	奈良・平安時代土坑一覽表	215			
表 107	I020遺物觀察表	218			
表 108	I020P1遺物觀察表	225			
表 109	土坑一覽表	234			
表 110	E002遺物觀察表	240			
表 111	E004遺物觀察表	243			
表 112	E005遺物觀察表	245			
表 113	I023遺物觀察表	248			
表 114	遺構一覽表	248			
表 115	印手系土器研究略史	257			
表 116	栗谷遺跡 弥生後期土器分布表 (抜粋)				262
表 117	栗谷遺跡 弥生後期土器分析表				267
表 118	弥生後期群別一覽表				275
表 119	栗谷遺跡出土文字資料一覽表				293
表 120	役山東遺跡新旧遺構番号対照表				298
表 121	F001遺物觀察表				300
表 122	I001遺物觀察表				303
表 123	縄文時代遺構一覽表				303
表 124	A001遺物觀察表				305
表 125	A002遺物觀察表				308
表 126	A003遺物觀察表				309
表 127	弥生時代遺構一覽表				310
表 128	A004遺物觀察表				312
表 129	D003遺物觀察表				313
表 130	奈良・平安時代遺構一覽表				315
表 131	D006遺物觀察表				317
表 132	中世以降土坑一覽表				318
表 133	遺構外出土遺物一覽表				320
表 134	雷南遺跡新旧遺構番号対照表				322
表 135	A001遺物觀察表				324
表 136	D001遺物觀察表				325
表 137	雷南遺跡遺構一覽表				326
表 138	グリッド別出土遺物觀察表				328
表 139	確認面出土遺物觀察表				331

第1編 序 説

第1章

栗谷遺跡Ⅲ地区・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡の調査経過と調査方法

第1節 栗谷遺跡Ⅲ地区の調査の経緯



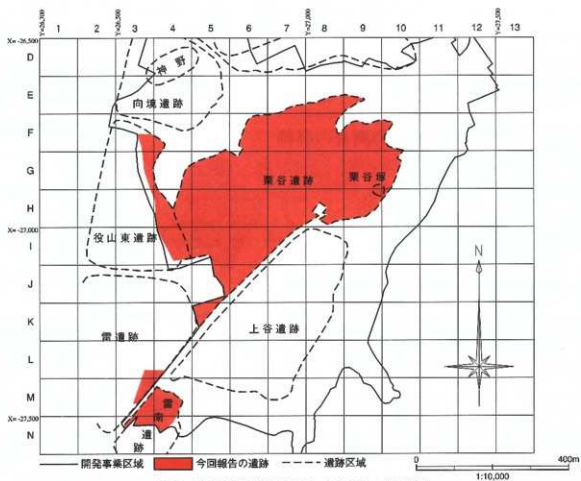
図1 栗谷遺跡・雷遺跡・雷南遺跡・役山東遺跡位置図(1/50,000)

1.栗谷遺跡 2.雷遺跡 3.雷南遺跡 4.役山東遺跡

栗谷遺跡の発掘調査は（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として、昭和63年3月から開始された。事業全体に係わる経緯、経過及び遺跡の立地、歴史的環境等の詳細については、既刊の「栗谷遺跡-第1分冊-」を参照して頂きたい。ここでは、栗谷遺跡Ⅲ地区の調査の経緯について簡単に触れておきたい。

栗谷遺跡は、（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連区域内の最初の発掘調査として、確認調査段階から起算すると、昭和63年3月から開始され平成6年7月までの間、断続的に実施された。栗谷遺跡Ⅲ地区にあたる地区は、第1次本調査地区（昭和63年7月～平成元年8月）、第3次本調査地区（平成3年1月～平成3年12月）、第4次本調査地区（平成3年7月～平成4年6月）の一部が該当し、面積の合計は、約27,000㎡である。

調査の方法としては、第1分冊・第2分冊でも触れたとおり、公共座標に沿ってグリッドを設定し、100mを大グリッド、10mを中グリッド、5mを小グリッドとして調査を進めた。調査対象区域の1～2%程度を包含層検出の為に人力による表土除去作業を行い、包含層が検出されない区域については、重機による表土除去作業を行った。遺構検出作業は基本的にソフトローム上面で行い、検出された遺構については、写真撮影等の記録を取りながら遺構覆土の除去を実施する。撮影はブローニー判モノクロフィルムを基本としながら35mmモノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。測量については通常の遺り方実測に加え、光波測距機による測量、航空写真による測量を適宜用いて行った。



： 図2 栗谷遺跡周辺地形図およびグリッド配置図

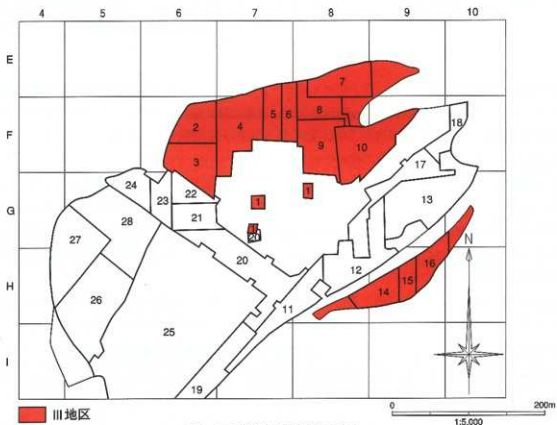


図3 栗谷遺跡本調査地区割図

第2節 役山東遺跡の調査の経緯

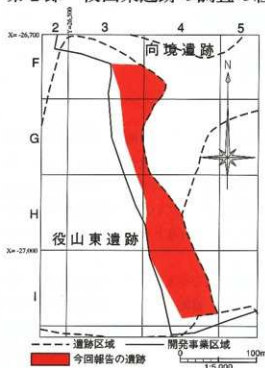


図4 役山東調査地区

役山東遺跡は、栗谷遺跡の北側に東西に伸びる谷津を隔てた対岸の台地に位置している。北側の谷津により、さらに向境遺跡とも区分されている。標高は約18～23mで水田面との比高は約6mである。

調査は、確認調査を含めると、平成5年8月に開始され、平成7年2月までの間、断続的に実施された。今回、報告する区域は、確認調査の結果を踏まえた本調査対象区域全域で、平成6年9月～平成7年2月の間、第1次本調査として実施された区域にあたり、面積は約3,300㎡である。

調査の方法は、栗谷遺跡と同様に公共座標に沿ってグリッドを設定し調査を進めた。調査対象区域の1～2%程度を遺物包含層検出の為に人力による表土除去作業を行い、結果、包含層は検出されなかった為、本調査対象区域について重機による表土除去作業を行った。遺構検出作業は基本的にソフトローム上面で行い、検出された遺構については、写真撮影等の記録を取りながら遺構覆土の除去を実施する。撮影及び測量方法は栗谷遺跡に準拠した。

第3節 雷南遺跡の調査の経緯

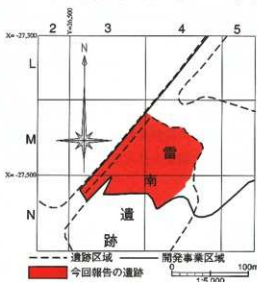


図5 雷南調査地区

雷南遺跡は、(仮称)八千代カルチャータウン開発事業区域の南端に位置し北側の谷津によって上谷遺跡と区分される。標高は約23～24mで水田面との比高は約10mである。

調査は、本調査を実施した地区と確認調査まで行い保存措置を講じた地区がある。本調査を実施した地区は、平成4年4月から平成4年10月の間に実施された上谷遺跡第1次確認本調査と同時に進められ、調査時には、上谷遺跡の一部として調査された。面積は約3,300㎡である。確認調査部分は、平成7年7月に実施され、調査対象面積は約8,500㎡で、その内の750㎡について確認調査を実施した。

調査の方法等については確認調査・本調査とも栗谷遺跡・役山東遺跡と同様で、写真撮影方法・測量方法ともに両遺跡に準拠している。

第4節 雷遺跡の調査の経緯

雷遺跡は、事業区域の南端に位置し、栗谷遺跡及び上谷遺跡の所在する舌状台地の基部にあたる地点に位置し、栗谷遺跡・上谷遺跡・役山東遺跡及び雷南遺跡と接している。標高は約23～24mで水田面との比高は約10mである。

(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連区域の調査として、平成5年4月に確認調査を実施した。調査対象面積は、約8,500㎡でその内の720㎡について確認調査を実施した。

調査の方法等については栗谷遺跡その他の遺跡と同様で、写真撮影・測量方法ともに準拠している。

第2編 栗谷遺跡

第1章 栗谷遺跡Ⅲ地区の調査の概要

第1節 栗谷遺跡Ⅲ地区の概要

栗谷遺跡は千葉県八千代市字保品に所在し、地形的には下総台地の北西部に立地し、印旛沼南岸に位置する。印旛沼周辺の台地は印旛沼に注ぐ小河川と印旛沼の氾濫によって樹枝状に開析され、そうした台地の縁辺部に多くの遺跡が形成されている。栗谷遺跡はそうした遺跡の一つで、八千代市域中央を流れる新川と佐倉市との市境を流れる小竹川に挟まれた台地の北端に位置している。栗谷遺跡が所在する地点の標高は、約21m～24mで周囲には谷津が回り込み、独立した舌状台地となっている。また、谷津に展開する水田面との比高は約12mである。

栗谷遺跡の周辺遺跡として同一の台地ではあるが、中央に東西に入る小支谷を隔てた台地南側に上谷遺跡、舌状台地基部にあたる南西側に雷遺跡及び雷南遺跡が展開し、遺跡北側に入る谷津を隔てた別の台地に役山東遺跡が所在する。役山東遺跡の北方にはそれぞれ小支谷を隔て向境遺跡・境堀遺跡等が展開し、更には開発事業範囲外にはなるが、縄文時代中期から後期の神野貝塚等が所在する。これらの遺跡は今回の開発事業範囲を越え、隣接しながら大きく広がり、印旛沼南岸西端における遺跡群を形成している。

栗谷遺跡は、このような遺跡群における一つの遺跡であり、開発事業区域内に遺跡の全域が含まれ結果としては、遺跡全域を調査することになった。遺跡の性格としては弥生時代及び奈良・平安時代を中心とした集落遺跡としての位置づけができる。なお、雷遺跡・雷南遺跡及び役山東遺跡については本報告書第3編・第4編において記述するのでここでは割愛する。また、栗谷遺跡及び上谷遺跡については、既刊の栗谷遺跡第1分冊・第2分冊及び、上谷遺跡第1分冊・第2分冊それぞれの該当する部分も併せて参照されたい。

今回報告する栗谷遺跡Ⅲ地区は遺跡が所在する台地の北側縁辺部と南側縁辺部の2カ所となる。両地点とも遺跡内で遺構が比較的密集している地点である。このことは遺跡の展開を考える上で教科書的な遺跡展開をしていると言え、そうした状況を検証し得たのは台地全体に調査が及んだ成果の一つであろう。

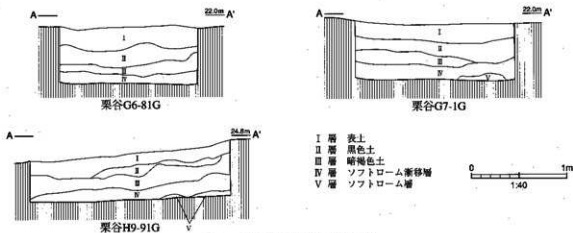


図6 栗谷遺跡遺跡基本土層図

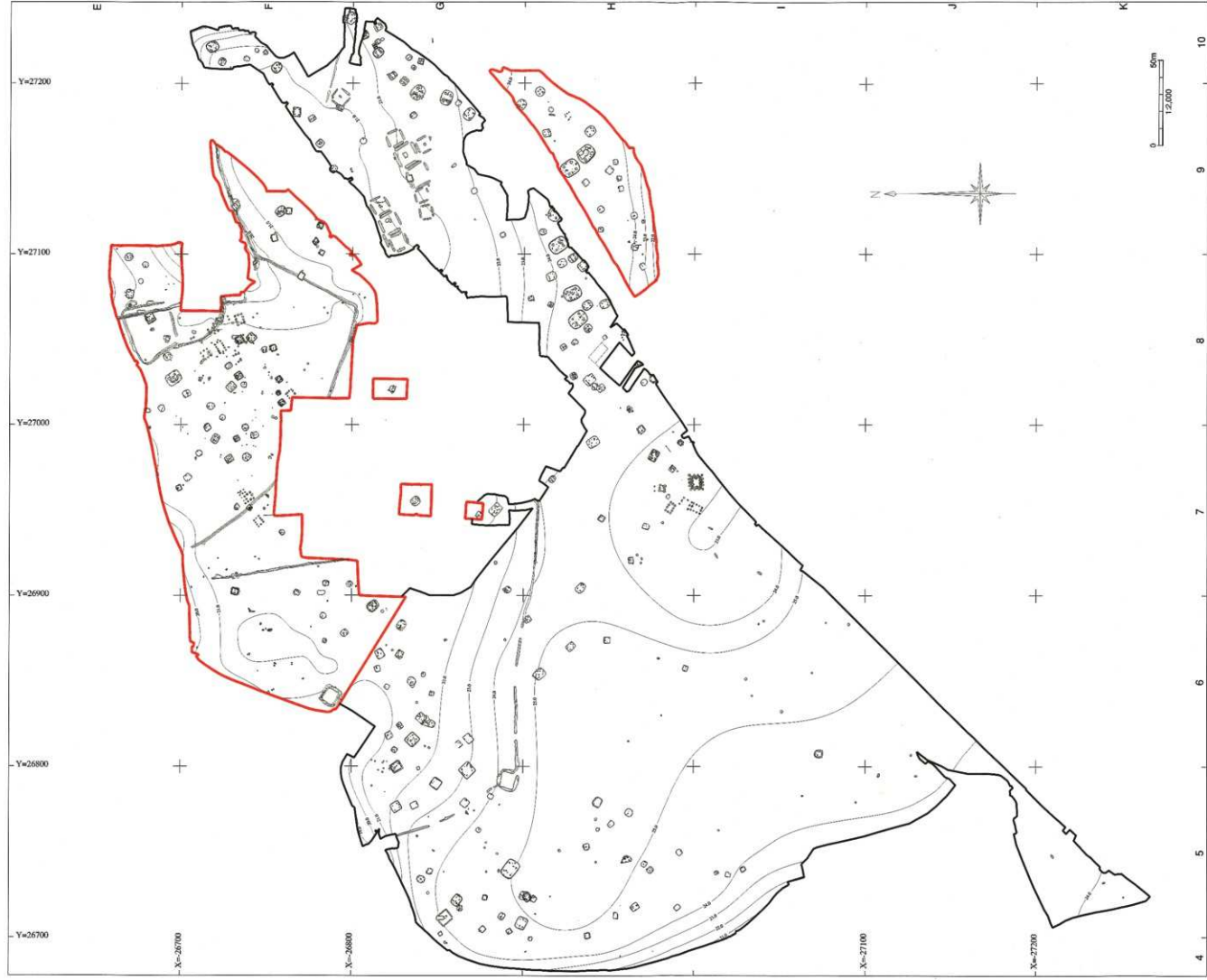


图7 栗谷里地区 (今回報告地区) 栗谷里地区 (今回報告地区)

検出された遺構は次の通りである。縄文時代の遺構については、竪穴住居跡3軒（前期3）・早期の炉穴が15基・陥穴1基が検出された。また、同じく縄文時代の土坑14基、その他の遺構6基が検出されている。土坑・遺構については概ね、中期から後期の時期が与えられるかと思われる。弥生時代・古墳時代については、竪穴住居跡37軒・方形周溝墓2基・土坑4基・その他の遺構5基が検出された。奈良・平安時代に至ると、竪穴住居跡25軒・掘立柱建物跡7棟・土坑が25基が検出され、それらの遺構に伴い多数の墨書土器の出土が注目される。中世以降及び時期不明の遺構としては、塚1基・土坑65基・溝4条・その他の遺構3基が検出されている。

遺構外からの出土遺物としては、遺跡北側の台地縁辺部一角（野外調査時におけるF6グリッド一帯）に縄文時代早期を中心とした包含層を検出している。

遺跡の基本層序であるが第1分冊・第2分冊と同様となり、第1層が表土層・第2層が黒色土層・第3層が暗褐色土層・第4層がソフトローム漸移層・第5層がソフトローム層となる。遺構検出作業にあたっては第4層下面あるいは第5層上面で行った。

以上、栗谷遺跡Ⅲ地区の概要について検出された遺構数を中心に述べてきたが、個別の遺構における詳細な報告及び考察等については次章以降で触れることとする。ここでは、栗谷遺跡Ⅲ地区における野外調査時の遺構番号（旧番号）と本書掲載の遺構番号（新番号）の新旧番号対照表を載せて本章を終わりたい。

表1 栗谷遺跡新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
竪穴住居跡		A147	7-008	A170	4-006	B010	8-007
縄文時代		A148	8-003	A171	4-007	B011	8-015
A048	14-001	A149	8-005	A172	6-005B	B012	9-014
A049	14-003	A150	8-006	A173	7-004	B013	9-028
A128	3-003	A151	10-004	A174	9-001	方形周溝墓	
弥生・古墳時代		A152	14-002	A175	9-002	C015	3-005
A129	1-002	A153	14-004	A176	9-004	C016	4-001B
A130	1-003	A154	14-005	A177	9-005	土坑	
A131	3-002	A155	15-002	A178	9-006	縄文時代	
A132	3-004	A156	15-003A	A179	9-025	D071	7-016
A133	5-002	A157	15-004	A180	9-026	D072	8-040B
A134	5-003	A158	16-001	A181	9-027	D073	8-008
A135	5-004	A159	16-002	A182	10-001	D074	2-011
A136	6-001	A160	16-003	A183	10-002	D075	5-010
A137	6-002	A161	16-004	A184	10-003	D076	2-014
A138	6-003	A162	4-001A	A185	10-005	D077	3-006
A139	6-004	A163	5-001	A186	14-006	D078	3-010
A140	6-005A	A164	14-007	A187	15-001	D079	4-018
A141	6-006	奈良・平安時代		A188	15-003B	D080	2-012
A142	7-001	A165	1-001	A189	15-005	D081	3-009B
A143	7-002	A166	3-001	掘立柱建物跡		D082	5-006
A144	7-005	A167	4-002	B007	4-008	D083	9-013
A145	7-006	A168	4-003	B008	4-009	D084	9-038
A146	7-007	A169	4-005	B009	4-012		

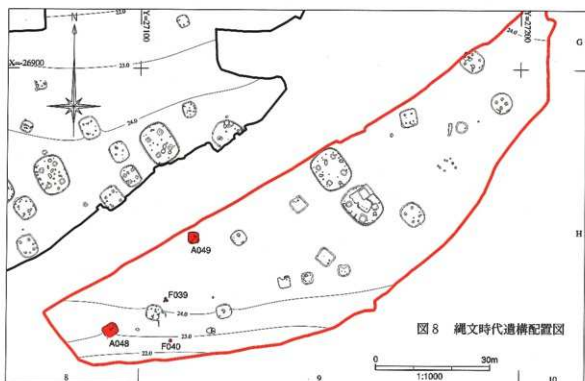
新番号	旧番号
土坑	
弥生・古墳時代	
D085	8-039
D086	14-008
D087	14-011
D088	14-012
D089	16-010
D090	16-012
奈良・平安時代	
D091	4-013
D092	4-014
D093	4-017
D094	4-023
D095	5-011
D096	5-013
D097	6-011
D098	7-018
D099	8-017
D100	9-019
D101	9-022
D102	9-023
D103	9-039
D104	10-012
D105	10-016
D106	10-019
D107	10-020
D108	16-013
中世以降及び時期不明	
D109	1-005
D110	3-008
D111	4-015
D112	5-007
D113	6-007
D114	6-008
D115	6-009
D116	6-010
D117	6-012
D118	6-013
D119	6-016
D120	6-017
D121	6-018
D122	6-019
D123	7-011
D124	7-012
D125	7-013
D126	7-014
D127	7-015

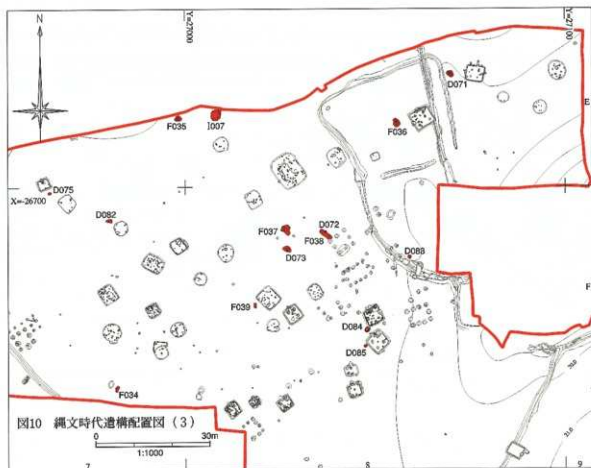
新番号	旧番号
D128	7-019
D129	8-009
D130	8-011
D131	8-012
D132	8-016
D133	9-007
D134	9-008
D135	9-009
D136	9-010
D137	9-011
D138	9-017
D139	9-018
D140	9-020
D141	9-021
D142	9-024
D143	10-013
D144	10-014
D145	10-015
D146	10-017
D147	10-018
D148	16-006
D149	16-007
D150	16-008
D151	16-009
D152	16-011
D153	16-014
D154	16-016
溝	
E002	4-011
E003	4-010
E004	7-010・8-010
E005	9-016
	10-007
	10-010
	10-011
塚穴	
F026	2-002
F027	2-007
F028	2-009
F029	3-009A
F030	4-001C
F031	4-019
F032	4-020
F033	4-021
F034	5-009
F035	7-017
F036	8-013
F037	8-040A

新番号	旧番号
F038	9-012
F039	14-009
F040	14-010
遺構	
縄文時代	
I002	2-006,010
I003	2-008,013
I004	4-016,022
I005	4-024,025
I006	2-001
I007	8-001
I024	2-003
弥生・古墳時代	
I008	5-005
I009	7-009
I010	8-002
I011	8-004
I012	9-003
奈良・平安時代	
I013	6-014,015
I014	8-014,023
	8-024,025
I015	8-018,019
	8-020,021
I016	8-029,031,034
I017	8-036,037
I018	9-029,030,034
	9-035,036,037
I019	9-031,032,033
中世以降及び時期不明	
I020	栗谷塚16-005
I021	10-006
I022	10-008
I023	10-009

第2章 遺構と遺物

第1節 縄文時代





栗谷遺跡Ⅲ地区における縄文時代の遺構は、堅穴住居跡3軒・炉穴15基・陥穴1基・土坑14基・その他の遺構6基が検出されている。また、遺物包含層が1カ所検出されている。今回、報告するⅢ地区は栗谷遺跡が所在する台地の南側縁辺部と北側縁辺部に分かれているが、それぞれの台地縁辺に沿って縄文時代の遺構が立地している。

堅穴住居跡については第Ⅰ分冊において縄文時代中期・加曾利E期の住居跡3軒を報告したが、今回報告する住居跡の整理の結果は前期の堅穴住居跡と判明した。第Ⅰ分冊・第Ⅱ分冊の段階では、栗谷遺跡の縄文時代について前期が一つの空白の時期であったが、今回の整理で前期をその所見に加える事ができた。また、台地北西部で検出された遺物包含層についても早期を主体とするものの、前期の土器が少量ながら混在する事が判ったのも今回の成果と言えるだろう。

土坑については、第Ⅰ分冊・第Ⅱ分冊で触れたとおり、極端な集中地区は無く時期的には中期から後期にかけてが中心的である。その他の遺構6基について基本的には土坑であるが、用途がある程度想定されるもの、あるいは数基の土坑をセットとして考えた方が適当と判断されたものについて遺構として取り上げた。時期的にはやはり中期から後期にかけてが中心的である。

炉穴についても土坑と同様で、台地縁辺に点在する状況で早期の所産と考えられる。

陥穴については新たに1基を報告するが、栗谷遺跡全体としては合計6基で、広範囲にかけての調査には検出数が少ないと言える。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表を参照されたい。

(1) 竪穴住居跡

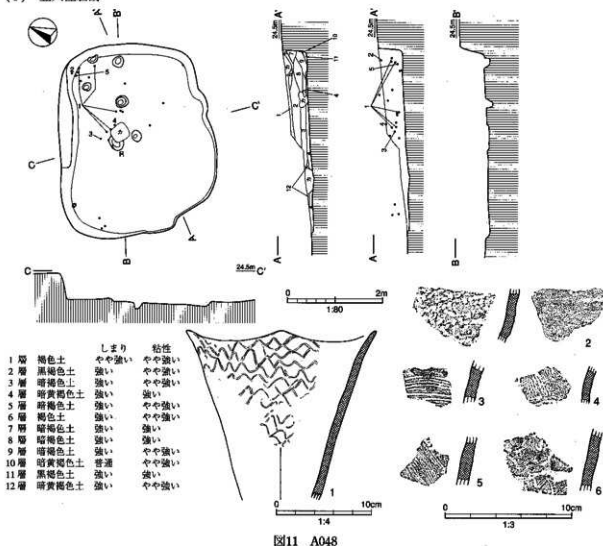


図11 A048

表2 A048遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(200)×-×(180) 輪積 口縁-波状口縁(五単位) 外面 櫛状工具による横位の小波状文 頸部-底部より直線的に外 転する 内面 ナデ	暗褐色	砂粒・ 繊維多	1/2	黒浜式 A048-6と同一 器体
2	縄文 深鉢	-×-×- 外面 L R 半筋縄文 内面 ナデ	暗褐色	砂粒・ 繊維多	頸部 破片	黒浜式
3	縄文 深鉢	-×-×- 輪積 外面 平行沈線文 内面 ナデ コゲ状付着物	赤褐色	砂粒・ 繊維多	頸部 破片	黒浜式
4	縄文 深鉢	-×-×- 輪積 外面 櫛状工具による横位の小波状文 内面 ナデ	暗褐色	砂粒・ 繊維多	頸部 破片	黒浜式 A048-1と同一 器体
5	縄文 深鉢	-×-×- 輪積 外面 燃赤文 内面 ナデ	暗赤褐色	砂粒・ 繊維多	頸部 破片	黒浜式
6	縄文 深鉢	-×-×- 輪積 外面 貝殻条痕文 内面 ナデ	明褐色	砂粒多 繊維少	頸部 破片	

A048

検出地区 H8-98-1G。台地南側先端で、傾斜がやや始まった地点に位置する。

遺構 不整の隅丸長方形の平面形で、床はソフトロームの床で、やや軟弱である。周溝は検出されなかった。ピットは5基検出したが、主柱穴については不明である。壁は山側で検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。谷側の壁は検出されなかった。炉は一部攪乱を受けているものの、楕円形の僅かに掘り込まれた地床炉で住居跡中央からやや北に寄る。

覆土は、色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土下層～上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から縄文時代前期黒浜期の住居跡と判断した。栗谷遺跡の中にあつて、数少ない縄文時代前期の住居跡と言える。

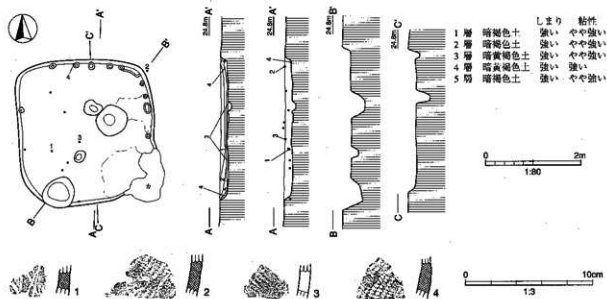


図12 A049

表3 A049遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 輪襷 外面 斜行沈縄文 内面 ナデか?	暗褐色	菅 砂粒・ 繊維多	胴部 破片	黒浜式
2	縄文 深鉢	-X-X- 輪襷 外面 L R単筋縄文 内面 ナデ	暗褐色	菅 砂粒・ 繊維多	胴部 破片	黒浜式
3	縄文 深鉢	-X-X- 輪襷 外面 R L単筋縄文か? 内面 ナデ	明褐色	菅 砂粒多	胴部 破片	
4	縄文 深鉢	-X-X- 輪襷 外面 L R単筋縄文 内面 ナデ	暗褐色	菅 砂粒 繊維	胴部 破片	黒浜式

A049

検出地区 H9-15-4G。台地南側縁辺部に位置する。

遺構 隅丸方形の平面形で、床はソフトロームの床で一部堅い部分もあるが、全体的には軟弱である。周溝は一部で検出し、さらに壁柱穴9基を検出した。主柱穴については不明である。掘り込みは

浅くソフトロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。炉は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 炉は検出されていないが、遺構の形状、出土遺物及び出土状況等から縄文時代前期の住居跡と判断した。

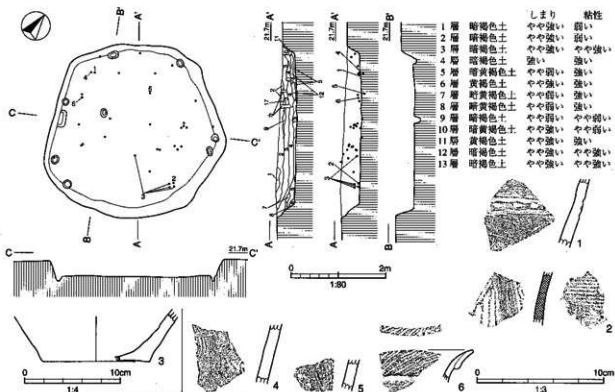


図13 A128

表4 A128遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法 証 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	縄文 深鉢	-X-X- 平行沈線間に連続刺突文	暗褐色 青	砂粒 赤色粒 白色粒	胴部片	
2	縄文 深鉢	-X-X- 胴部外面一層位の集合沈線 胴部内面一層位の条痕文	砂暗褐 一筋横割 砂褐色 青	繊維	胴部片	
3	縄文 深鉢	-X(134)×(55) 平底 胴部下半外面ヘラケズリ 胴部下半内面ヘラケズリとナデ	暗赤褐色 青	粗砂粒 多	底部片	
4	縄文 深鉢	-X-X- 蛇行沈線文	暗赤褐色 青	砂粒 白色粒	胴部片	
5	縄文 深鉢	-X-X- 外面一磨消縄文施文後縦位の条線文施す 内面一磨かれる	暗褐色 青	砂粒 褐色粒	胴部片	
6	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 折り返し口縁 口縁・口唇一筋加状縄文 内面一ナデ後ヘラミガキ 頸部一櫛指波状文	黒褐色 青	砂粒	口縁片	

A128

検出地区 F6-89-3G。台地北側平坦面に位置する。

遺構 不整形の平面形で、床はロームを踏み固めた床で、しっかりしている。周溝は一部で検出し、さらに壁柱穴7基を検出した。主柱穴については不明である。掘り込みは浅くソフトロームの壁で、斜めに立ち上がる。炉は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土層にかけて少量出土。

所見 炉は検出されていないが、遺構の形状、出土遺物及び出土状況等から縄文時代前期の住居跡と判断した。

表5 縄文時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A048	HS-98-1	不整隅丸長方形 4.10×3.35×0.50 主軸 N-68°-E	床面 ソフトロームの床で、やや軟弱 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。一部ケラス状 の平場を持つ	地床炉 住居中央から やや北西壁による 周溝 検出されず 主柱穴 不明 黒浜期
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に12層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A049	HS-15-4	隅丸方形 3.08×2.84×0.24 主軸 N-3°-E	床面 ソフトロームの床で、軟弱。住居跡 東側で硬い部分を検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 不明 黒浜期
		覆土中において少量出土	色調を基本に5層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A128	F6-89-3	不整形 3.65×3.70×0.27 主軸 N-37°-W	床面 ロームを踏み固めた床で平張 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上から覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	

(2) 炉穴

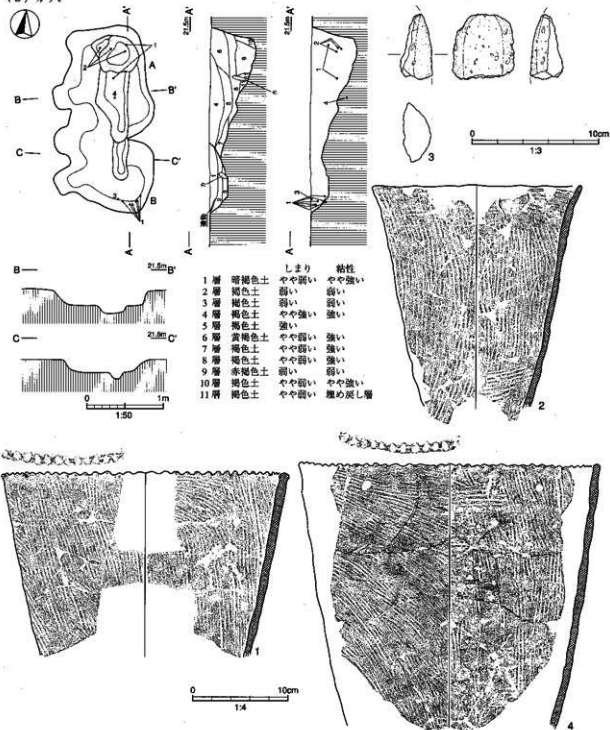


図14 F026

F026

検出地区 F6-76G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてD074・D088がある。いずれも縄文時代の土坑である。

遺構 不整形の平面形で、2基以上の炉穴の重複の為、図14のような平面形態になったと考えられる。新旧関係はAが古くBが新しい。ABともに底部はロームの堅い床で凹凸がある。壁は斜めに立ち上がっていく。火床は均衡ABともに明瞭に検出され、火床付近の壁も熱を受け赤化していた。

覆土は色調を基本に11層に分層された、1層から3層がBの覆土で自然堆積による埋没が想される。4層から11層はBの覆土で人為的な埋戻しの後、自然堆積による埋没が進み、さらに掘り返した状況が想

定される。

遺物 底部直上から覆土層にかけて、それぞれの火床付近で条痕文系土器が出土。

所見 遺構の形状、出土遺物等から縄文時代早期条痕文期の炉穴と判断した。近隣に位置する炉穴F028出土の条痕文系土器と接合した。同時期の所産と考えられる。

表6 F026遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(300)×—×(192) 口唇—押圧 口縁—内外面斜位・縦位の条痕文	①暗褐色 ②橙黄	繊維多	口縁片	
2	縄文 深鉢	(220)×—×(236) 口縁部外反 口縁・外面—縦位の条痕文 内面口縁・胴下部—横位の条痕文 他は縦位の条痕文	暗褐色	繊維多	口縁— 胴部片 1/4	
3	石製品 磨石	長軸(52)×短軸(26)×厚さ(47) 一部が残存するだけであるが、石皿などの比較的大形品があった可能性も考えられる 弱い磨痕が残される			断片	(石皿?)
4	縄文 深鉢	(318)×—×(280) 口縁・口唇—押圧 内外面—横位・斜位の条痕文 胴部上半—口縁下に外側より孔を穿つ	①暗褐色 ②橙黄	繊維多	口縁— 胴部片 1/5	外面スス付着

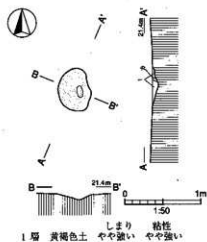


図15 F027

F027

検出地区 F6-55G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてI002・I003・D076があり、何れも縄文時代の遺構である。

遺構 不整形の平面形で、地山を僅かに掘り窪めたくばみ状の炉穴である。火床の赤化範囲は、比較的広範囲に広がっていた。

覆土は色調を基本に1層に分層。自然堆積と考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F028

検出地区 F6-95G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてD030・D080がある。いずれも縄文時代の土坑である。

遺構 不整形の平面形で、楕円形の2基の炉穴の重複と考えられる。その新旧関係までは捉えることができなかった。底部は若干の凹凸が有り、なだらかに立ち上がっていく。それぞれの坑底の片側に一段掘り窪められた場所があり、そこが火床となっている。それぞれの火床とも熱を受け、赤化範囲が広範囲にひろがっていた。

覆土は色調を基本に6層に分層。概ね自然堆積と考えられる。

遺物 2群に分かれて出土。それぞれの火床付近、焼土層より上層で条痕文系土器が出土。

所見 出土遺物及び遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。近隣に位置する炉穴F026の遺物と接合した。同時期の所産と考えられる。

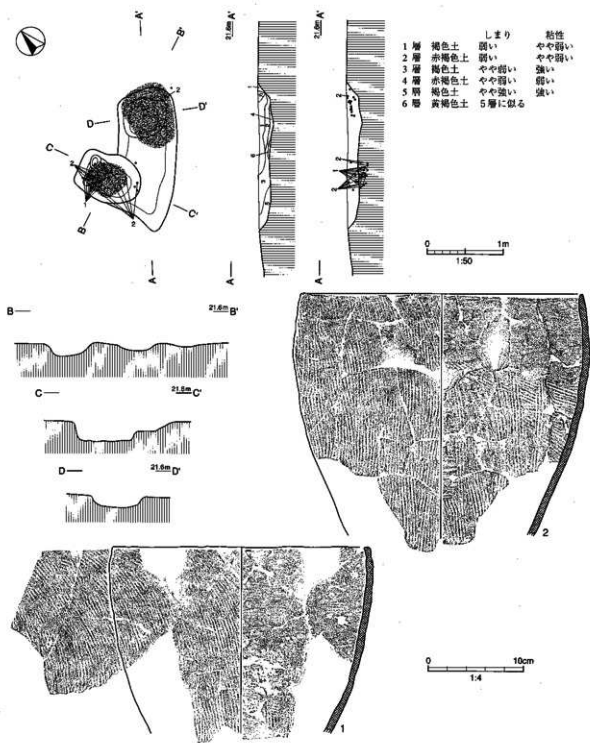


図16 F028

表7 F028遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	容量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(270)×-×(196) 口縁やや内湾 外面 斜位、縦位、内面 横位の条痕文	橙褐色 蒼	繊維多	口縁～ 胴部片	
2	縄文 深鉢	(298)×-×(257) 口縁やや内湾 外面 縦位、内面 斜位、縦位の条痕文	橙褐色 蒼	繊維多	口縁～ 胴部片	

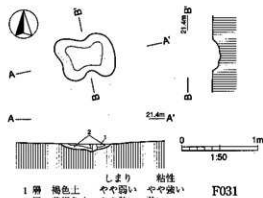
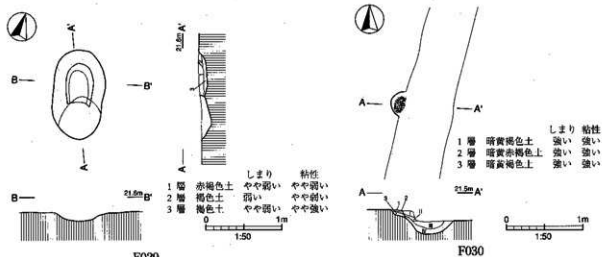


図17 F029・F030・F031

F029

検出地区 F6-58G。台地北側先端部に位置する。西側に南北に入る小支谷に面している。周辺の遺構としてI002・I003があり、いずれも縄文時代の遺構である。遺構 楕円形の浅い皿状の炉穴。縄文時代の土坑と重複関係にあり、本炉穴の方が古い。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明瞭な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に3層に分層。概ね自然堆積と考えられる。覆土1層で滲むような焼土を検出している。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F030

検出地区 F7-4G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF028があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 円形の浅い皿状の炉穴と思われる。弥生時代の方形周溝墓及び古墳時代中期の竪穴住居跡と重複関係にあるが、本炉穴が最も古い。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。火床は薄く焼土を検出する程度であった。

覆土は色調を基本に3層に分層。概ね自然堆積と考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F031

検出地区 F7-1G。台地北側先端部に位置する。周辺の遺構としてF032があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 不整形の浅いくぼみ状の炉穴と思われる。底部は若干の凹凸はあるもののほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明瞭な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に2層に分層。覆土中に焼土、炭化物がまばらに散る。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

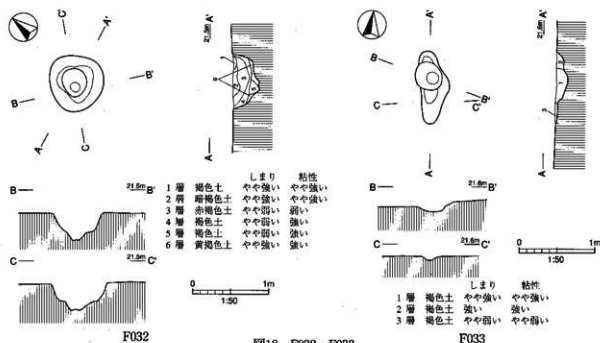


図18 F032・F033

F032

検出地区 F7-12G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF031・F033があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 不整形の炉穴でしっかりとした掘り込みを持つ。底部は凹凸があり、斜めに立ち上がっていく。3層下面が火床となるが明確に赤化するほどではなかった。

覆土は色調を基本に6層に分層。いったん6層下面まで掘られ、その後4層まで埋戻され、その時点で火を焚いたと考えられる。3層以降も人為的な埋戻しが考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F033

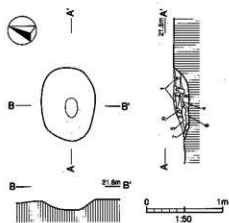
検出地区 F7-23G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF032があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 楕円形の炉穴で浅いくぼみ状の炉穴である。時期不明の土坑と重複関係にあり、本炉穴の方が古い。底部はほぼ平坦でなだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に3層に分層。炉穴の土層は2・3層で人為的な埋戻しが考えられる。

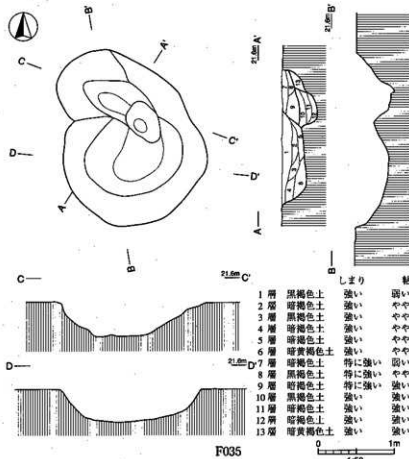
遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。



層	土色	しまり	粘性
1層	褐色土	やや弱い	弱い
2層	褐色土	弱い	やや強い
3層	褐色土	やや弱い	弱い
4層	黄褐色土	やや強い	やや強い
5層	赤褐色土	やや弱い	やや強い
6層	褐色土	やや弱い	やや強い
7層	褐色土	やや強い	やや強い
8層	褐色土	強い	やや強い

F034



F035

図19 F034・F035

F036

検出地区 E8-22G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF037・D078がある。

遺構 不整形の炉穴で、しっかりとした掘り込みを持つ。2基の炉穴が重複関係にある。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床を2カ所で検出し、その周囲の壁についても熱を受け赤化している。

F034

検出地区 F7-86G。台地北側平坦面に位置する。他の縄文時代の遺構と離れ、孤立して立地する。

遺構 楕円形の炉穴でしっかりとした掘り込みを持つ。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F035

検出地区 E8-59G。台地北側平坦面に位置する。他の縄文時代の遺構と離れ、孤立して立地する。

遺構 不整形の炉穴でしっかりとした掘り込みを持つ。縄文時代の土坑と重複関係にあり、本炉穴の方が新しい。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に13層に分層。7から13層が炉穴の土層。全体的に焼土を多く含む。

2～3度に渉る掘り返しが認められ、人為的な埋戻しが考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

覆土は色調を基本に16層に分層。覆土下層においては全体的に焼土を多く含む。2～3度に渉る掘り返しが認められ、人為的な埋戻しが考えられる。

遺物 覆土中から比較的少量に出土。

所見 出土遺物及び遺構の形状等から、縄文時代早期の炉穴と判断した。

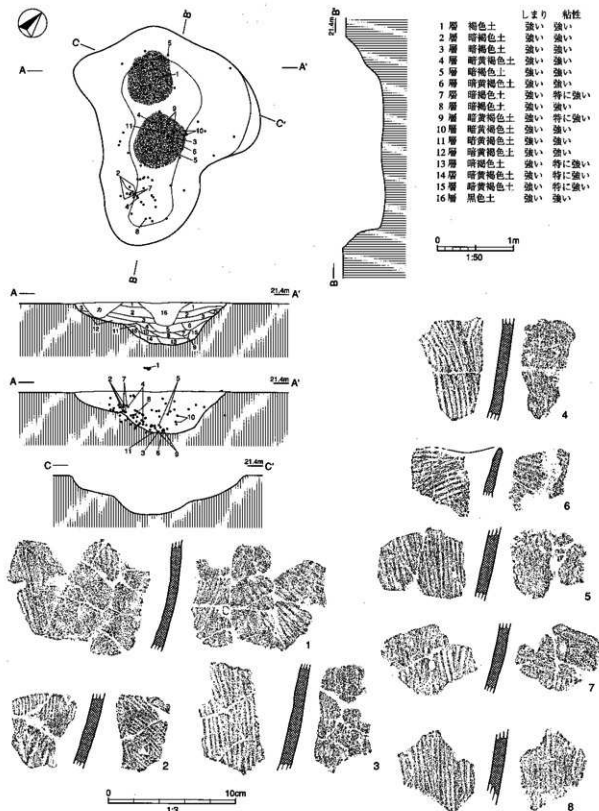


図20 F036

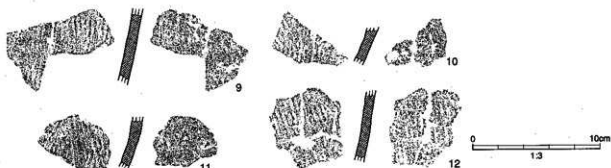


図21 F036(2)

表8 F036遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半 外面 縦位、内面 斜位の条痕文	暗赤褐～ 暗褐色	繊維多	胴部片	
2	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半 外面 縦位、内面 斜位の条痕文	暗赤褐 普通	繊維多	胴部片	
3	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半 外面 縦位、内面 縦位(施文後ナデ)の条痕文	暗赤褐 普通	繊維多	胴部片	
4	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半 外面の条痕文 縦位、内面 ナデ	暗褐 普通	繊維多	胴部片	
5	縄文 深鉢	-X-X- 胴部 外面 縦位の条痕文、内面 ナデ、繊維の脱痕多	暗赤褐 普通	繊維多	胴部片	内面スス付着
6	縄文 深鉢	-X-X- 小波状口縁 外面 横位、斜位、内面 斜位の条痕文	暗褐 普通	繊維多	口縁片	
7	縄文 深鉢	-X-X- 胴部 外面 縦位の条痕文	暗褐色 普通	繊維多	胴部片	
8	縄文 深鉢	-X-X- 胴部 外面 縦位の条痕文	暗赤褐 普通	繊維多	胴部片	
9	縄文 深鉢	-X-X- 胴部 外面 縦位の条痕文 内面 一部に縦位の条痕文	暗褐色 普通	繊維多	胴部片	外面 一部スス付着
10	縄文 深鉢	-X-X- 胴部下半 外面 斜位の条痕文	暗赤褐 普通	繊維多	胴部片	内面スス付着
11	縄文 深鉢	-X-X- 胴部下半 外面 斜位、縦位の条痕文	暗赤褐 普通	繊維多	胴部片	内面スス付着
12	縄文 深鉢	-X-X- 胴部 外面 縦位の条痕文	暗褐 普通	繊維多	胴部片	

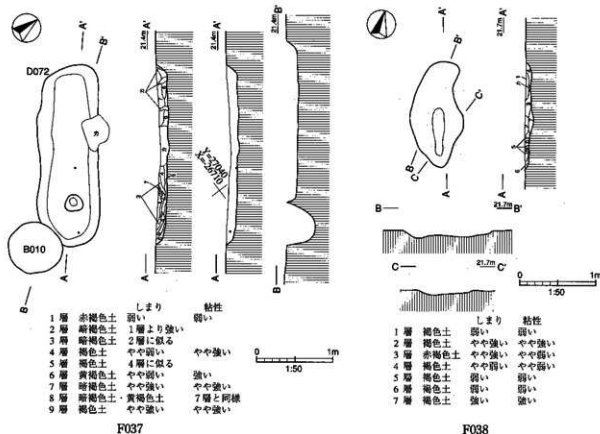


図22 F037・F038

F037

検出地区 F8-32G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF036があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 楕円形の炉穴で浅いくぼみ状の炉穴である。縄文時代の土坑D072と重複関係にあるが、擾乱の為、新旧関係は明らかにし得なかった。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に9層に分層。覆土上層にて焼土層を検出している。人為的な埋戻しが考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物・遺構の形状等から、縄文時代早期の炉穴と判断した。

F038

検出地区 F8-14G。台地北側平坦面に位置する。他の縄文時代の遺構と離れ、孤立して立地している。

遺構 不整形の炉穴で浅いくぼみ状の炉穴である。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から、縄文時代早期の炉穴と判断した。

F039

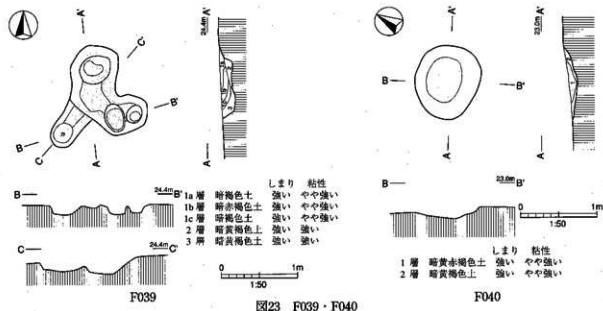
検出地区 H9-7G。台地南側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF040があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 不整形の炉穴で数基の炉穴の重複が想定される。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に3層に分層。覆土中層で焼土層を検出した。数度にわたる掘り返しと人為的な戻しが想定される。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した



F040

検出地区 H9-8G。台地北側平坦面に位置する。周辺の遺構としてF040があり、縄文時代の炉穴である。

遺構 不整形の炉穴で浅いくぼみ状の炉穴である。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。明確な火床は検出できなかった。

覆土は色調を基本に2層に分層。覆土上層にて焼土層が検出されている。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

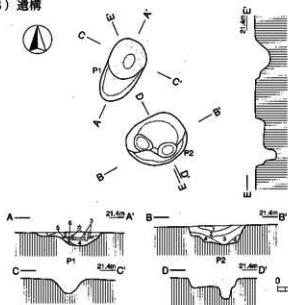
表9 縄文時代が穴一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
F026	F6-76	不整形	色調を基本に11層に分層。おおむね自然堆積と想定される。F028の遺物と接合	
		2~3度にわたる掘り返しが考えられる。	覆土中に糸痕土器の大型破片数点出土 F028の遺物と接合	
F027	F6-55	不整形 0.56×0.42×0.08 主軸 N-1°-W	色調を基本に1層に分層 自然堆積と考えられる	
		浅いくぼみ状の炉穴	遺物は出土していない	
F028	F6-95	不整形 0.26×0.76×0.18 主軸 N-43°-E	色調を基本に6層に分層 自然堆積と考えられる	
		2基の炉穴の重複。新旧関係は明らかにし得なかった。	2群に分かれ分布。それぞれの火床付近、炉穴層より上で出土。F026の遺物と接合	

F029	F6-58	楕円形	色調を基本に3層に分層。自然堆積と考えられる。覆土最上層で焼土を検出
		浅い皿状の炉穴 明瞭な火床は認められなかった	遺物は出土していない
F030	F7-4	不明	色調を基本に3層に分層。自然堆積による層没が想定される
		A162に切られ形状は不明	遺物は出土していない
F031	F7-1	不整形	色調を基本に2層に分層。褐色土中に焼土炭化物がまばらに含まれる
		明瞭な火床は認められなかった	遺物は出土していない
F032	F7-12	不整形 0.73×0.70×0.36 主軸 N-51°-E	色調を基本に6層に分層。3層以降の層についても人為的な埋戻しが想定される
		6層下面まで掘り、4層までを埋め戻し、4層上面を火床としている	遺物は出土していない
F033	F7-23	不整形 0.96×0.40×- 主軸 N-8°-W	色調を基本に3層に分層。人為的な堆積が想定される
		2基の炉穴の重複か 明瞭な火床は認められなかった	遺物は出土していない
F034	F7-86	楕円形 0.96×0.71×0.20 主軸 N-73°-E	色調を基本に8層に分層。人為的な堆積が考えられる
		底部はほぼ平坦 ゆるやかに立ち上がる	遺物は出土していない
F035	E8-59	不整形	色調を基本に13層に分層。7～13層が炉穴のセクション 人為的な埋戻し
		2～3度にわたる掘り返しが考えられる。時期不明の土坑と重複関係にある	遺物は出土していない
F036	F8-22	不整形 2.90×2.03×- 主軸 N-40°-W	色調を基本に16層に分層。覆土下層においては全体的に焼土を含む 人為堆積
		2基の炉穴が重複関係にある	覆土中から比較的多量に出土
F037	F8-32	不整形 3.82×1.20×- 主軸 N-54.5°-W	色調を基本に9層に分層。人為的な堆積が想定される
		土坑と重複関係 新旧関係は不明	覆土中に数点出土
F038	F8-14	不整形 1.38×0.71×- 主軸 N-13°-W	色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される
		浅い凹み状の炉穴	遺物は出土していない
F039	H9-7	不整形	色調を基本に3層に分層。数度にわたる掘り返しと人為的な埋戻しが想定される
		明確な火床は確認できなかった	遺物は出土していない
F040	H9-8	不整形 0.98×0.82×0.20 主軸 N-64°-W	色調を基本に2層に分層
		浅い凹み状の炉穴 明確な火床は確認できなかった	遺物は出土していない

(3) 遺構



- P1
- | | |
|---------|-----------|
| しまり | 粘性 |
| 1層 褐色土 | やや強い 強い |
| 2層 褐色土 | やや強い 強い |
| 3層 赤褐色土 | 弱い 強い |
| 4層 赤褐色土 | やや弱い やや強い |
| 5層 褐色土 | 弱い 強い |
| 6層 赤褐色土 | やや強い やや弱い |

- P2
- | | |
|---------|------------|
| しまり | 粘性 |
| 1層 暗褐色土 | 弱い やや弱い |
| 2層 暗褐色土 | やや弱い やや強い |
| 3層 褐色土 | やや弱い やや強い |
| 4層 黄褐色土 | やや強い 非常に強い |



図24 I002

表10 I002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 胴部下半一外面斜位、内面横位の条痕文	暗茶褐色	繊維	胴部片	

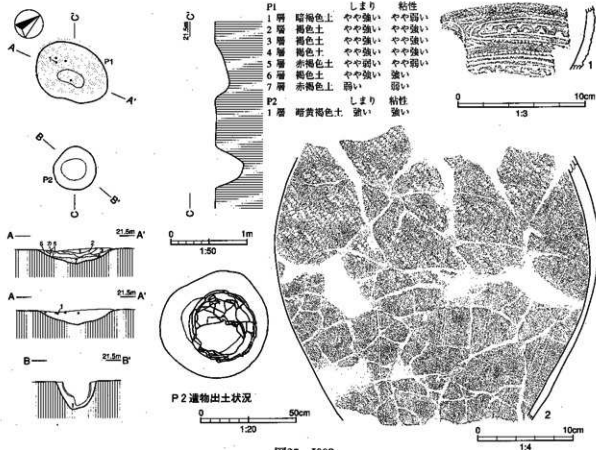


図25 I003

表11 I003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	—×—×— 楕円状及び横位に施された沈線に沿って三角押文 鋸歯状文が連続する 内面一横方向に粗く磨かれる	⑤燈燭 色馬 香	粗砂粒	胴部片	
2	縄文 深鉢	—×—×—(280) 最大径340 胴部上半 条線文を縦位に旋文後一部にRL単節縄文	暗赤褐 色	砂粒多	2/3	

I002

検出地区 F8-46G。台地北側縁辺に位置し、西側に南北に入る小支谷に面して立地。周辺の遺構としてI003・F027・D081に等の縄文時代の遺構がある。

遺構 調査時においては別々の土坑として調査したが、非常に近接して同時期の土坑が検出されたため、1つの遺構として取り上げた。

P1は楕円形の平面形で1段テラスを有し底部に至る。壁は斜めにゆるやかに立ち上がっていく。覆土下層において焼土を検出しているが、明瞭な火床を検出していない。覆土は色調を基本に6層に分層。覆土下層にて焼土層が検出されている。人為的な埋戻しが想定される。

P2は不整形の平面形で、底部はほぼ平坦で小穴を2基検出。壁は斜めに立ち上がっていく。覆土は色調を基本に4層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 P1から縄文時代早期条痕文系土器の小破片が十数点程度出土。焼土層から上層での出土が多い。P2からは、覆土中層～上層にかけてP1と同じく早期条痕文系土器の小破片が数点程度出土した。

所見 P1・P2とも、出土遺物から縄文時代早期条痕文系土器期の土坑と考えられる。P1については、多量の焼土検出していることから炉穴の可能性もある。P2については炉穴に関わる付帯施設か。

I003

検出地区 F6-56G。台地北側縁辺に位置し、周辺の遺構としてI002・F027・F026・D081等の縄文時代の遺構がある。

遺構 調査時においてはI002同様、別々の土坑として調査したが、非常に近接して同時期の土坑が検出されたため、1つの遺構として取り上げた。

P1は楕円形の平面形で、浅く掘り窪めたくぼみ状の土坑である。底部は丸底でゆるやかに立ち上がる。覆土は色調を基本に7層に分層。覆土下層にて焼土層が検出されている。焼土層から上層は自然堆積に依る埋没が想定される。

P2は不整形の平面形で、しっかりとした掘り込みを有し、底部はほぼ平坦で壁は斜めに直線的に立ち上がっていく。出土した深鉢とはほぼ同じ形状となる。覆土は色調を基本に1層に分層。

遺物 P1から縄文時代中期の深鉢形土器の口縁片(1)をはじめ、中期の小破片が少量出土。P2からは中期の深鉢形土器胴部が出土した。

所見 P1・P2とも、出土遺物から縄文時代中期の土坑と考えられる。それぞれの出土遺物・形状からP1については炉、P2については埋甕と思われる。或いは竪穴住居跡の一部とも想定される。

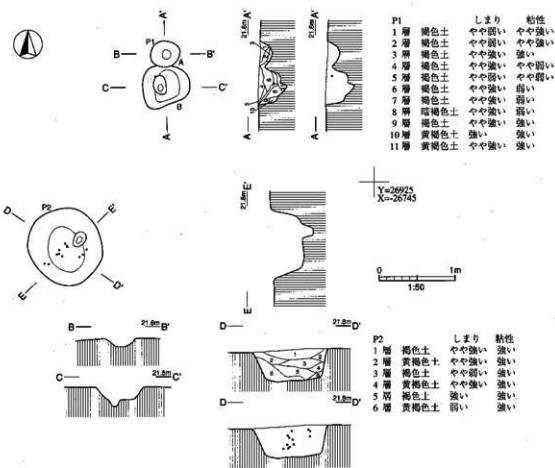


図26 I004

I004

検出地区 F7-25G。台地北側平坦面に位置し、他の遺構と離れ、孤立して立地している。

遺構 調査時においてはI002・I003同様、別々の土坑として調査したが、非常に近接して検出されたため、1つの遺構として取り上げた。

P1は不整形の土坑で、2基の土坑の重複である。新旧関係は明らかにし得なかった。Aは底部が丸底で斜めに立ち上がる。Bの底部は、ほぼ平坦で小穴を1基検出している。壁は斜めに直線的に立ち上がっていく。覆土は色調を基本に11層に分層。1～3層がAの覆土で4～11層がBの覆土である。人為的な埋戻しが想定される。

P2は不整形の平面形で、しっかりとした掘り込みを有し、底部はほぼ平坦で、壁は斜めに直線的に立ち上がっていく。覆土は色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 P1から覆土上層から縄文土器の小破片が1片出土。P2からは中期～後期の小破片が少量出土した。

所見 P1・P2とも出土遺物から縄文時代中期～後期の土坑と考えられ、覆土の人為的な埋戻しも共通する状況である。具体的な用途については不明である。

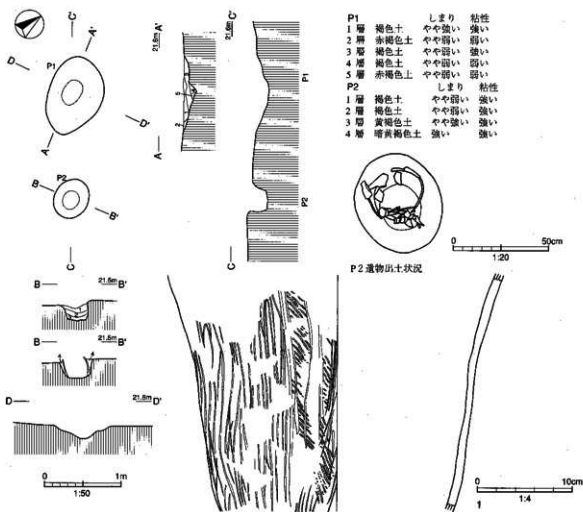


図27 I005

表12 I005遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X(254) 地文しR単節縄文を磨り消し縦位の条線を施文。		明褐色	砂粒多	1/2	

I005

検出地区 F7-1G。台地北側平坦面に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてD079、やや離れて竪穴住居跡A128がある。

遺構 調査時においてはI002同様、別々の土坑として調査したが、非常に近接して同時期の土坑が検出されたため、1つの遺構として取り上げた。

P1は楕円形の楕円形で、浅く掘り窪めたくはみ状の土坑である。底部は丸底でゆるやかに立ち上がる。明瞭な火床が検出された。覆土は色調を基本に5層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

P2も楕円形の平面形で、しっかりとした掘り込みを有し、底部はほぼ平坦で壁は斜めに直線的に立ち上がっていく。出土した深鉢とはほぼ同じ形状となる。覆土は色調を基本に4層に分層。

遺物 P1から遺物は出土しなかった。P2からは中期の深鉢形土器胴部が出土した。

所見 P1から遺物は出土しなかったが、形状から炉或いは炉穴が想定される。P2は出土遺物から縄文時代中期の土坑と考えられ、遺物の出土状況から埋甕と思われる。P1・P2双方の所見から或いは、縄文時代中期～後期にかけての竪穴住居跡の一部とも想定される。

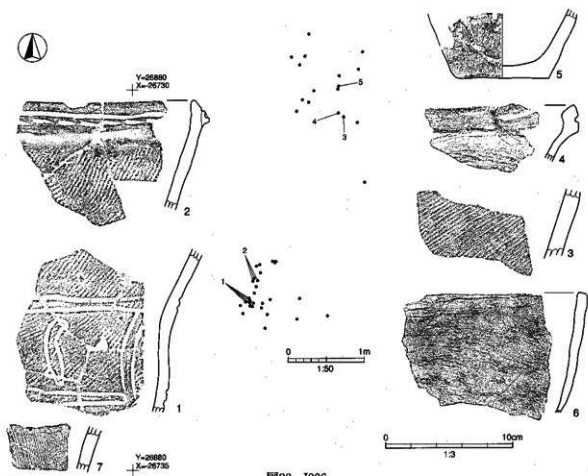


図28 I006

表13 I006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	縄文 深鉢	-X-X- 胴部にくびれを持つ 地紋は無節縄文、平行沈線文によって区画。区画内に楕円形のモチーフが施される。内面はよく研磨されている。	暗赤褐 良	砂粒	胴部片	
2	縄文 深鉢	-X-X- 地紋は無節縄文、口縁に沿って1条の沈線文を巡らし隆帯上に短沈線を加える。内面はよく研磨されている。	暗赤褐 良	砂粒	口縁片	
3	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半 無節縄文 胴部下半 内面はよく研磨されている。	暗褐 良	砂粒	胴部片	
4	縄文 深鉢	-X-X- 波状口縁 逆「く」の字状に区画。 波状部に沿って沈線が施される。内外面ともに横方向に研磨されている。	褐 普	砂粒	口縁片	
5	縄文 深鉢	-X-X- 平底 胴部下端 縦方向に研磨されている。	暗茶褐 普	砂粒 橙色粒	底部片	
6	縄文 深鉢	-X-X- 平縁で角張状の口縁 口縁無紋。外面は荒く研磨されている。	暗赤褐 良	砂粒	口縁片	外面ケール状 付着物
7	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半 縦位の条縄文。内面は研磨されている。	暗茶褐 普	砂粒 橙色粒	胴部片	

I006

検出地区 F6-83G。台地北側平坦面に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてD076・D074・D080・F028等がある。

遺構 調査時においては遺構として調査したが、明確なプランが確定しなかった。また周辺は縄文時代早期の包含層である為、一端遺構から削除したが比較的同時期の遺物が比較的密集して出土していたため、遺物集中区として報告する事にした。中期～後期の遺物を中心にして出土している。出土状況から判断するに、或いはI002・I003・I004・I005と同様な遺構であった可能性がある。



図29 I024

表14 I024遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 一定の無文帯において浅い沈線を1条。 横位一獨歯状工具による。縦位一波状条痕文が施文される。 内面はよく研磨される	暗赤褐色	砂粒	口縁片	
2	縄文 深鉢	-X-X- 口縁の突起部 口縁-口縁の突起部下に凹孔を施し、蓋に凹形の突起が加えられる	褐色	砂粒	口縁片	
3	縄文 深鉢	-X-X- 口唇-平坦に整えられる 口縁-無文	暗茶褐色	砂粒	口縁片	
4	縄文 深鉢	-X-X- 口縁内溝 口縁-やや幅広い無文帯をおき、棒状工具による凹形の連続刺突文をはさんで上下に沈線文	暗褐色 砂粒多	砂粒	口縁片	
5	縄文 深鉢	-X-X- 胴部下半-縦位の波状条痕文 内面は粗く磨かれる	明色	砂粒多	胴部片	
6	縄文 深鉢	-X-X- 頸部-「8」の字状の貼付文の中程より両脇に沈線がのびる。地文はLR単筋縄文 内面は横方向に研磨される	茶褐色	砂粒	頸部片	
7	縄文 深鉢	-X-X- 沈線に幾何学状モチーフ。上位の平行する沈線間には角押文が連続する。内面は粗く磨かれる	褐色	砂粒 粒	胴部片	
8	縄文 深鉢	-X-X- 口縁上端欠損。斜位の条痕文	褐色	粗砂粒	口縁片	
9	縄文 深鉢	-X-X- 獨歯状工具による縦位の小波状を呈する条痕文	暗赤褐色	砂粒	胴部片	
10	縄文 深鉢	-X-X- 胴部下半-縦位に磨かれる	暗赤褐色	砂粒	底部片	

I024

検出状況 F6-67G。台地北側平坦面に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてI003・D081・F026等がある。

遺構 調査時において遺構として調査したが、明確なプランが確定しなかった。また、周辺は縄文時代早期の包含層である為、一旦遺構から削除したが、ほぼ同時期の遺物が比較的密集して出土していたため遺物集中区として報告することにした。縄文時代後期の遺物を中心として出土している。

I007

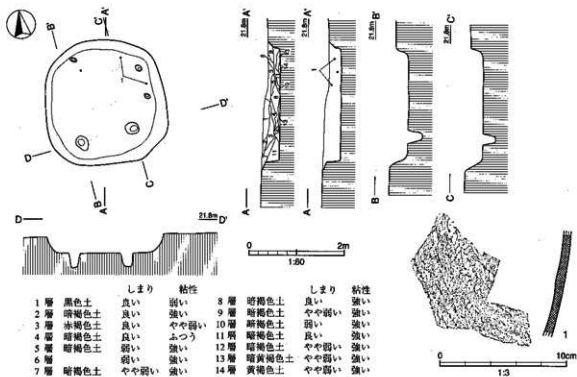
検出地区 E8-9G。台地北側縁部に位置し、他の縄文時代の遺構から離れ孤立して立地している。

遺構 隅丸長方形の平面形で、床はソフトロームの軟弱な床で、小穴を5基検出している。壁は斜めに立ち上がってゆく。炉・周溝・貯蔵穴に相当する施設は検出されなかった。

覆土は色調を基本に14層に分層。覆土中層において焼土層を検出している。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中層～上層にかけて小破片が少量出土した。

所見 出土遺物から縄文時代の遺構と判断した。炉が検出されなかったこと、床が軟弱なこと、遺物の出土量が少ないこと等から住居跡としての確証を欠いたため遺構として報告した。



	しまり	粘性		しまり	粘性		
1層	黒色土	良い	強い	8層	暗褐色土	良い	強い
2層	暗褐色土	良い	強い	9層	暗褐色土	やや弱い	強い
3層	赤褐色土	良い	やや弱い	10層	暗褐色土	弱い	強い
4層	暗褐色土	良い	ふつう	11層	暗褐色土	良い	強い
5層	暗褐色土	弱い	強い	12層	暗褐色土	やや弱い	強い
6層	暗褐色土	弱い	強い	13層	暗黄褐色土	やや弱い	強い
7層	暗褐色土	やや弱い	強い	14層	黄褐色土	やや弱い	強い

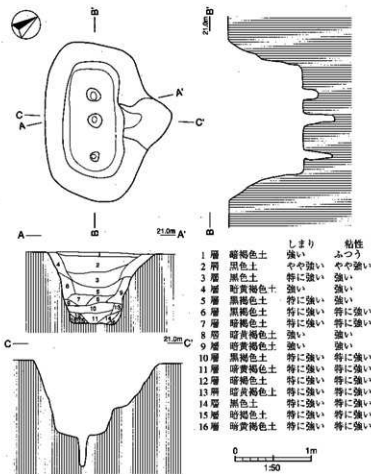
図30 I007

表15 I007遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 胴部上半-LR縄文		暗茶褐色	繊維	胴部片	

(4) 土坑



D071

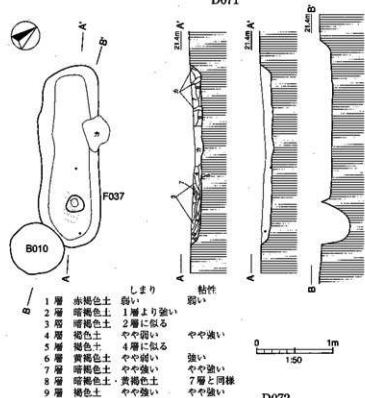
検出地区 E8-78G。台地北側縁部に位置し、他の縄文時代の遺構から離れ孤立して立地している。

遺構 隅丸長方形の平面形で、床はロームの床で、ほぼ平坦。小穴を3基検出している。壁は急傾斜で立ち上がり漏斗状に広がる。

覆土は色調を基本的に16層に分層。人為的な埋戻しが行われ、さらに掘り返した状況が想定される。

遺物 遺物は出土していない。所見 出土遺物は出土していないが、土抗の形状、覆土の状況等から縄文時代の陥穴と判断した。

D071



D072

検出地区 F8-32G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはD073・F036がある。

遺構 楕円形の平面形で、浅いくぼみ状の土抗である。F037と重複関係にあるが、新旧関係は攪乱のため、明らかにできなかった。底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がっていく。

覆土は色調を基本的に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土していない。所見 遺物は出土していないが、土抗の形状、覆土の状況等から縄文時代の土抗と判断した。

D072

図31 D071・D072

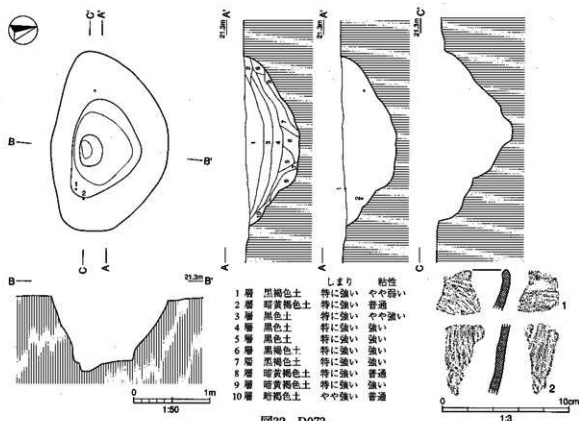


図32 D073

表16 D073遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 小波状口縁 外面 横位、斜位の条痕文 内面 横位の条痕文	橙褐色	繊維含	口縁片	
2	縄文 深鉢	-X-X- 内外面 縦位の条痕文	暗褐色	繊維含	胴部片	

D073

検出地区 E8-22G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはD073・F036・F037がある。
 遺構 不整形円形の平面形で、しっかりと掘り込みを有する。底部はほぼ平坦。小穴を1基検出している。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に10層に分層。人為的な埋戻しの後、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中層から上層にかけて、条痕文系土器の小破片が数点出た。

所見 出土遺物から縄文時代の土抗と考えられ、あるいは陥穴かもしれない。

D074

検出地区 F6-75G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはD080・F026がある。

遺構 不整形の平面形で、数基の土抗の重複が想定される。底部は凹凸があり小穴を3基検出している。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に6層に分層。黄褐色系の覆土が主体をなしていた。土層断面からも別の土抗が重複していたと判断される。それぞれに人為的な堆積が想定される。

遺物 覆土中から小破片が数点出土。

所見 出土遺物から縄文時代の土抗と考えられる。

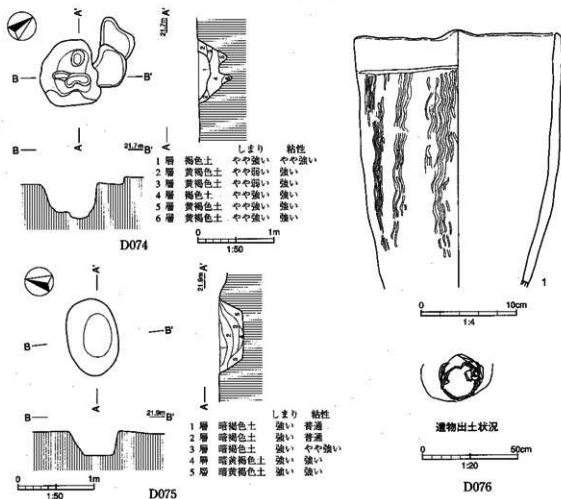


図33 D074・D075・D076

表17 D076遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	220×-×(273) 小突起(3単位と思われる) 口縁片に浅い沈線を1条巡らす 胴部には縦位に蛇行沈線文が施される 内面は磨き	暗赤褐色	砂粒	4/5	外面コケ伏付着物

D075

検出地区 F7-61G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはD082がある。

遺構 楕円形の平面形で、しっかりとした掘り込みを有する。底部はほぼ平坦。壁は斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が3点出土。

所見 出土遺物から縄文時代の土抗と判断した。

D076

検出地区 F6-64G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはF027・D074がある。調査時の不備から平面プラン及び土層に関する記録を残していなかった。

遺構 楕円形の平面形でしっかりとした掘り込みを有する。壁は斜めに直線的に立ち上がる。

遺物 覆土中から縄文時代後期の深鉢胴部大型破片が出土。

所見 出土遺物から縄文時代後期の埋室と判断した。

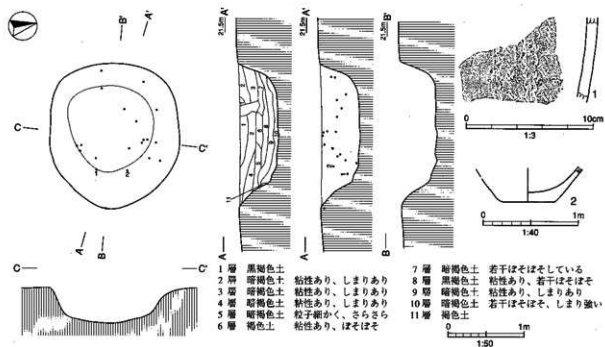


図34 D077

表18 D077遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 L径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-×-×- 結節縄文を縦位に回転	赤褐色 赤褐色 赤褐色	砂粒 赤色粒 黒色粒	胴部片	
2	縄文 深鉢	-×(54)×(38) 平底 胴部下端ナデ後磨きか? 内面 丁寧に磨かれる	赤褐色 暗褐色 赤褐色	粗砂粒 白色粒	底部片	

D077

検出地区 G6-92G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはD079・I005がある。

遺構 不整形の平面形で、しっかりとした掘り込みを有する。底部はほぼ平坦。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に11層に分層。覆土最下層において焼土を検出しているが、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 底面直上から覆土上層にかけて比較的多量に出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期から後期の土抗と判断した。

D078

検出地区 F6-88G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはA128がある。

遺構 不整形の土抗で、底部はロームの底部で一段テラスをもち、さらに落ちこみ尖底である。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に1層に分層。

遺物 深鉢口縁部から胴部の大型破片を中心に小破片が数点出土。

所見 出土遺物から縄文時代中期から後期の埋壘と判断した。

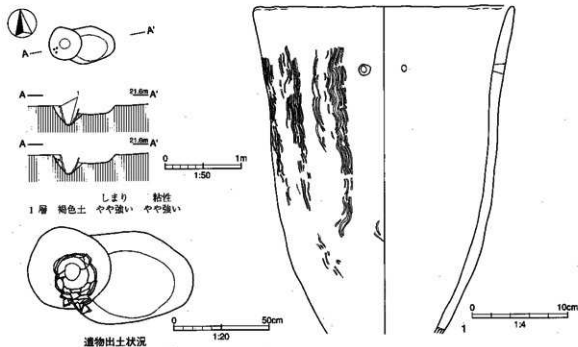


表19 D078遺物観察表

図35 D078

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(276)×-(346) 孔2カ所 胴部に斜行沈線文が縦位に施文される 器面は疎らに磨かれる 内面 ナデ後磨かれる	赤褐色	砂粒 褐色粒	2/3	

D079

検出地区 F7-10G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文遺構としてはA128・I005がある。

遺構 不整形の平面形で2基の土抗が重複している。しっかりとした掘り込みを有する。ロームの底部で若干の凹凸はあるもののはほぼ平坦。古い土抗については、ゆるやかに壁は立ち上がり、新しい土抗についてはほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に18層に分層。1から10層が新土抗、11層から18層が旧土抗の土層となる。それぞれ、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土上層から縄文土器の小破片3点が出土。新しい土抗に伴う遺物と考えられる。

所見 出土遺物から縄文時代中期から後期の土抗と判断した。

D080

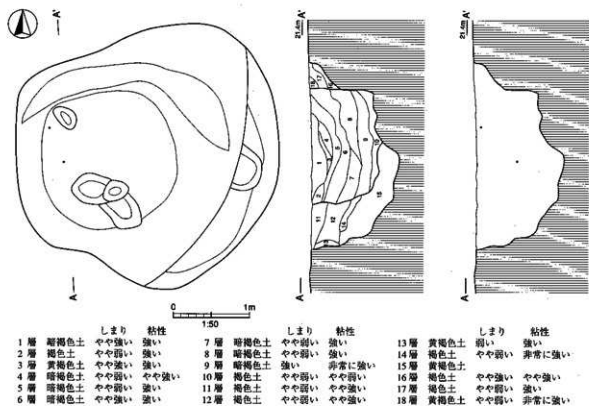
検出地区 F6-85G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてはD074・F026・F028がある。

遺構 不整形の平面形で、隅丸長方形の土抗が連続して2～3基作られたと考えられる。ロームの底部ではほぼ平坦。小穴を6基検出。斜めに立ち上っていく。

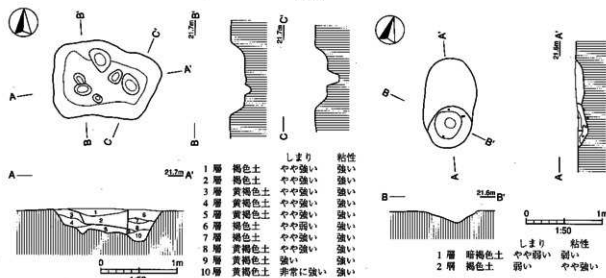
覆土は色調を基本に10層に分層。ローム混じりの黄褐色土系の覆土が主体となることから、人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土上層から縄文土器の小破片1点が出土。

所見 近隣に位置するD074と遺構の形状や同地点で複数の土抗が重複し、人為的な埋戻しがされている点など類似点が多い。また出土遺物からD074と同様に縄文時代中期から後期の土抗と判断した。



D079



D080

図36 D079・D080・D081

D081

D081

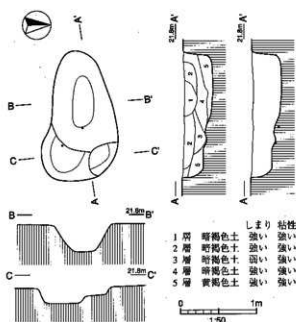
検出地区 F6-58G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてはI002・I003がある。

遺構 不整形の土抗で、F029と重複しており本土抗の方が新しい。ロームの底部で丸底。ゆるやかに立ち上っていく。

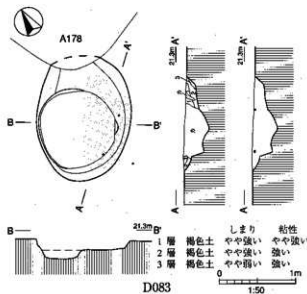
覆土は色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から縄文土器の小破片4点が出土。

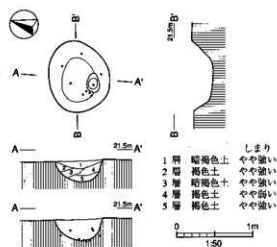
所見 出土遺物から縄文時代中期から後期の土抗と判断した。



D082



D083



D084

図37 D082・D083・D084

D082

検出地区 F7-71G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてD075がある。

遺構 不整形の土抗で、数基の土抗が重複している。底部はほぼ平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。立ち上がりの各所のテラス状の平場は重複している各土抗の底部と考えられる。

覆土は色調を基本に5層に分層。土層の観察からも数基の土抗が重複している状況が伺える。

遺物 覆土中から縄文土器の小破片2点が出土。

所見 出土遺物から縄文時代の土抗と判断した。

D083

検出地区 E8-44G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてD084がある。

遺構 楕円形の土抗と思われるが、攪乱が激しい為、詳細は不明である。A178と重複しているが、本土抗の方が古い。底部はほぼ平坦で、斜めに立ち上がっていくと思われる。

覆土は色調を基本に3層に分層。覆土中、焼土を含む。

遺物 覆土中から縄文土器の小破片2点が出土。

所見 出土遺物から縄文時代の土抗と判断した。

D084

検出地区 E8-45G。台地北側平坦部に位置し、周辺の縄文時代の遺構としてD084がある。

遺構 不整形楕円形の土抗で、ロームの底部で、ほぼ平坦。小穴を1基検出。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。縄文土器から奈良・平安時代土器までが混在している。

所見 遺構の形状、出土遺物等から縄文時代の土抗と判断した。

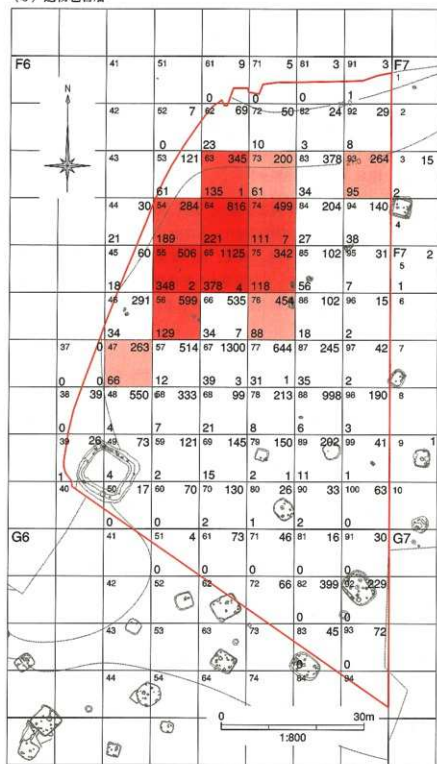
表20 縄文時代土坑一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考 備
D071	E8-78-1	隅丸長形 2.80×1.66×— 主軸 N-54°-W	色調を基本に16層に分層。人為的な埋戻し が想定される	陥穴
		ロームの底部で底面小穴3基あり 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
D072	F8-32-3	楕円形 3.82×1.20×— 主軸 N-54.5°-W	色調を基本に9層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D073	F8-22-4	不整形 2.38×1.54×— 主軸 N-74°-W	色調を基本に10層に分層。人為的な埋戻し ののち自然堆積による埋没が想定される	陥穴か?
		底部は平坦で小穴が1基あり 壁は斜めに立ち上がっていく	覆土中層～上層にかけて条痕文系土器、小 破片が数点出土	
D074	F6-75-4	不整形 0.86×0.74×0.44 主軸 N-51°-W	色調を基本に6層に分層。土層断面から別 の土坑を検出	2基の土坑が重複
		底部に小穴2基あり 斜めに立ち上がる	覆土中から小破片が数点出土	
D075	F7-61-1	楕円形 1.00×0.68×0.30 主軸 N-77°-E	色調を基本に5層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	前期?
		ロームの底部でほぼ平坦で斜めに立ち 上がる	覆土中から小片が3点出土	
D076	F6-64-2			埋戻 堀之内期
D077	G6-92-2	不整形 1.92×1.70×0.50 主軸 N-78°-W	色調を基本に11層に分層。一部で焼土を検 出しているものの概ね自然堆積	中期～後期
		ロームの底部でほぼ平坦 斜めに立ち上がる	底面直上から覆土上層にかけて比較的多量 に出土	
D078	F6-88-2	不整形 0.90×0.40×— 主軸 N-83°-W	色調を基本に1層に分層	埋戻
		ロームの底部で一段テラスをもち、さ らに落ちこみ尖底である	深鉢底部～胴部片を中心に小破片が数点出 土	
D079	F7-10-4	不整形	色調を基本に18層に分層。土層断面から別 の遺構を検出	中期～後期 2基の土坑が重複
		ロームの底部で若干の凹凸はあるもの のほぼ平坦 ゆるやかに立ち上がる	覆土上層から3点出土	
D080	F6-85-2	不整形 0.96×0.80×0.40 主軸 N-1°-W	色調を基本に10層に分層	隅丸長方形の土坑が連 続して2～3基作られ る
		ロームの底部でほぼ平坦 底部におい て小穴6基を検出	覆土上層から1点出土	
D081	F6-58-1	不整形 0.60×0.50×0.20 主軸 N-45°-E	色調を基本に3層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	中期～後期
		ロームの底部で浅い凹み状の土坑であ る	覆土中から小片4点出土	

D082	F7-71-4	不整形 1.70×0.84×0.38 主軸 N-90°-W	色調を基本に5層に分層。土層断面の観察から数基の土坑が重複
		底部は一段のテラスをもち、ほぼ平坦 壁はほぼ垂直に立ち上がる	底面直上から小片2点出土
D083	E8-44-4	楕円形 (1.68)×1.24×- 主軸 N-31°-E	色調を基本に3層に分層
		擾乱が著しい為、詳細は不明	覆土中から小片2点出土
D084	E8-45-3	楕円形 0.94×0.78×- 主軸 N-20°-W	色調を基本に5層に分層。自然堆積による層没が想定される
		底部はほぼ平坦で小穴を1基検出 斜めに立ち上がっていく	覆土中から小片少量出土 縄文～奈良・平安土師器まで混在

(5) 遺物包含層



グリッドNo 総数

XX	XX
XX	XX

条痕文土器
出土数

撚糸文土器
出土数



条痕文土器
200片以上



条痕文土器
100片以上



条痕文土器
50片以上

図38 早期遺物出土状況

栗谷遺跡の包含層は、F6グリッド及びG6グリッドの一部で検出された。台地北側の平坦面から北へ僅かに傾斜する地点で、栗谷遺跡において縄文時代の遺構が比較的集中している地区でもある。

出土している遺物の時期は、縄文時代早期条痕文系土器を中心に出土している。その中で撚糸文系土器が少量ながら混在している。その他の時期については、前期が微量、中期後半～後期前半にかけての土器群が少量出土している。

本来、出土遺物の層序を押さえた上での整理が望ましいが、包含層が北側への緩斜面であることと、包含層の幅が僅かであった為、層位的な検討ができなかった。平面的な出土状況を示したのが図38になる。点数は、ドット遺物の点数の為、総数としては、図38よりも多くなるが、全体の傾向としては、大きな違いは無いと思われる。以下、主だった遺物について記述していきたい。

1 縄文時代早期前半

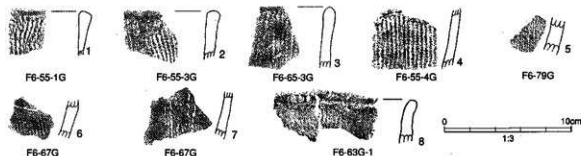


図39 縄文時代早期前半

1～8は早期前半、然糸文期の土器である。1はRLの縄文を施し、色調、赤褐色、焼成、良。2はRの然糸、色調、褐色、焼成、良。1・2ともに夏島期の深鉢口縁片。3はRLの縄文、色調、暗褐色、焼成、良、夏島期の深鉢口縁片。4はRLの縄文、色調、褐色、焼成、良、夏島期の深鉢胴部片。5は色調、暗褐色、焼成、良。6は色調、褐色、焼成、良。5・6は井草から夏島期の深鉢胴部片。7は然糸施文、色調、褐色、焼成、良、稲荷台期の深鉢胴部片に相当すると思われる。8はRの然糸、色調、褐色、焼成、良、夏島期の深鉢口縁片である。

2 縄文時代早期後半

早期後半の条痕文系土器群で、栗谷遺跡の包含層の中で主体を占める土器群である。大きく分けると細かな条痕を施す一群と、粗い条痕を施す一群に分類できる。以下(図40)は、細かな条痕を施す一群である。

図40、1～3は深鉢形土器の口縁片で僅かに波状を呈する。1・2は横位、3は斜位の条痕が施される。いずれも細かな条痕で色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。4・5も深鉢形土器の口縁片で素口縁である。ともに横位の条痕が施される。いずれも細かな条痕で色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。4・5は同じグリッドからの出土のため同一個体の可能性あり。6は深鉢形土器の胴部片、縦位、斜位の細かな条痕を施し、色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。7～8は深鉢形土器の底部片、縦位、斜位の条痕が施される。いずれも細かな条痕で色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。9～10は同じグリッドからの出土の深鉢形土器の口縁片であるが、9は素口縁で、10は口唇に刻みを施した口縁である。9は横位の条痕を施し色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。10は斜位の条痕を施し色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。11は9・10同様F6-64Gからの出土で深鉢形土器の胴部片、横位の細かな条痕を施した後、沈線による区画文を作る。色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。12は深鉢形土器の口縁片で口唇に刻みを施す斜位の細かな条痕を施し、色調は橙褐色、焼成は良好、繊維少量含む。13は深鉢形土器の口縁片で素口縁である。斜位の細かな条痕が施される。色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。14は深鉢形土器の胴部片、縦位、斜位の細かな条痕を施し、色調は褐色、焼成は良好、繊維少量含む。15は深鉢形土器の胴部片、縦位、斜位の細かな条痕を施した後、斜位の沈線区画文を作る。色調は橙褐色、焼成は良好、繊維少量含む。16も深鉢形土器の胴部片、縦位、斜位の細かな条痕を施した後、斜位の沈線区画文を作る。色調は橙褐色、焼成は良好、繊維少量含む。15と同様の施文で同グリッド出土のため同一個体の可能性あり。以上、条痕文系土器のうち野鳥式の古い段階に相当すると思われる。

以下も縄文時代早期後半、条痕文系土器の群で、粗い条痕を施す一群である。

(図41)、1～4は深鉢形土器の口縁部片で素口縁である。1・4は横位、縦位の条痕を施し、いずれも粗い条痕で、焼成は良好、繊維少量含む。2・3は横位の粗い条痕を施す、焼成は良好、繊維少量含む。

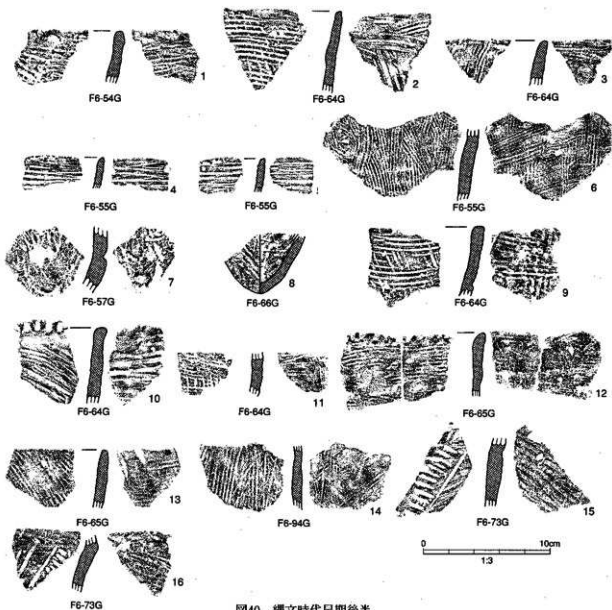


図40 縄文時代早期後半

5～7は4と同グリッドの出土である。5は深鉢形土器の胴部片で沈線による菱形状の区画文を形成する。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。同様のタイプの土器片がF6-63Gでも出土している。6は深鉢形土器の胴部片で細い沈線で区画文を形成する。色調は明褐色、焼成は良好、繊維少量含む。7も同様に深鉢形土器の胴部片で外面縦位、内面横位の粗い条痕文を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

8は5と同様、深鉢形土器の胴部片で沈線による菱形状の区画文を形成する。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

9～14は同グリッド出土の深鉢形土器の口縁部片及び胴部片である。9は小波状を呈し、横位の粗い条痕を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。10は素口縁で横位の粗い条痕を施す。色調は外面黒褐色、内面褐色、焼成は良好、繊維少量含む。11・12は口唇外面に棒状工具による刻目を外側から施す。沈線による区画をし、沈線以下を斜位の粗い条痕を施す。また、棒状工具による円形刺突文が連続して斜行する。色調は明褐色、焼成は良好、繊維少量含む。同一個体と思われる。13も11・12と同様、口唇に棒状工具による刻目を施すが、刻みの方向が、口唇直上から行われている。沈線区画はな

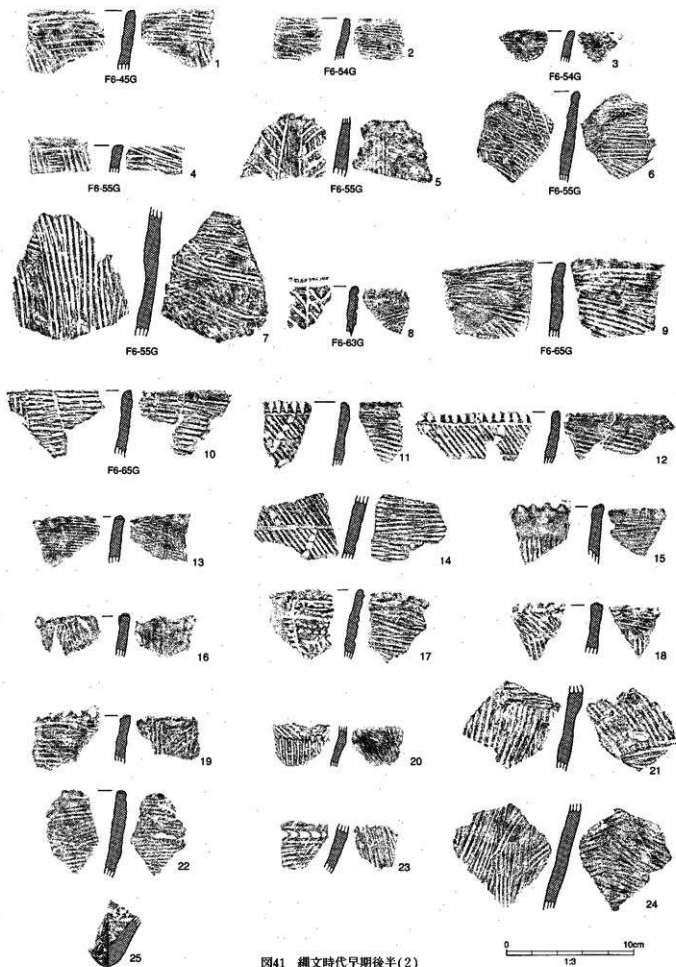


図41 縄文時代早期後半(2)

く横位の粗い条痕を施す。14は深鉢形土器胴部片で、斜位の粗い条痕を施し、沈線と斜行する連続円形刺突文を配する。施文方法として11・12と同タイプと思われる。同一個体の可能性あり。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

15は深鉢形土器の口縁部片で14と同様、口唇に直上から刻み目を施すタイプであるが、口縁部に無文帯を設ける。口縁部無紋帯以下胴部上半に縦位の粗い条痕を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

16・17は同一グリッドの出土で共に深鉢形土器の口縁部片である。16は口唇を直上から指頭による押圧を施している。口唇直下は縦位の条痕を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

17も深鉢形土器の口縁部片で沈線と細い竹管による連続刺突による区画をし、さらに、区画の内側を細い竹管による連続刺突を充填している。色調は暗褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

18は深鉢形土器の口縁部片で口唇を棒状工具による刻みを施し、口縁部は斜位の条痕を施している。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。19は口唇を棒状工具で内側からの刻みを施し口縁部は横位の条痕を施している。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

20・21は深鉢形土器の胴部片。20は、一段稜をもち、稜線の上部は斜位の条痕と円形刺突、下部は縦位の条痕を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。21は粗い横位、縦位の条痕を施す。色調は外面淡褐色、内面は暗褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

22は、深鉢形土器の口縁部片で口唇を棒状工具による刻みを施し、横位の条痕、色調は外面暗褐色、内面褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

23・24は深鉢形土器の胴部片。22は横位の条痕を施した後、横走る連続円形刺突を配す。色調は外面暗褐色、内面褐色、焼成は良好、繊維少量含む。24は粗い縦位、斜位の条痕を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

25は深鉢形土器の尖底部。縦位、斜位の条痕を施す。色調は淡褐色、焼成は良好、繊維少量含む。

以上、1～25は条痕文系土器のうち野島式の新しい段階に相当すると思われる。

3 縄文時代前期

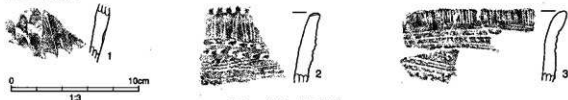


図42 縄文時代前期

表21 包含層縄文時代前期

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X-X- ハマグリのような貝殻による波状貝状文だが、三角文に近い形となっている。内面は肌荒れ状態。	砂褐 淡赤褐	砂粒多	胴部片	F6-54G
2	縄文 深鉢	-X-X-X- 平線(刻み)外反 口唇上端に刻み 半切竹管状施文具を用いた縦位の平行沈線 縁用具を用いた刺突文 押し文 内面横ナデ	淡褐 青	砂粒多	口縁片	F6-54G
3	縄文 深鉢	(190)X-X-X- 波状になるかもしれない。屈曲外反口唇部。 半切竹管状施文具による縦位の平行沈線。以下に縦位の沈線引かれ、沈 線間に刺突が施される。	淡褐 青	砂粒	口縁片	F6-73G

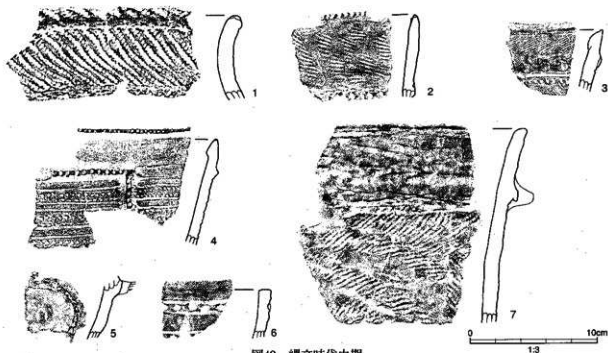


図43 縄文時代中期

表22 包含層縄文時代中期

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(380)×-×- 平縁屈曲外反 重厚な作り 口縁 口唇上端に縄文 口唇に結節文、以下に縄文 頸部 明瞭ではないが無文帯のような部分 が認められる 胴上半 内面横ナデ	淡褐 橙褐色	砂粒多	口縁～ 胴部片	F6-78G F6-95G
2	縄文 深鉢	(270)×-×- 平縁 外反 口縁 上端に刻み、以下蒸糸しによる無節を縦位に施文。その下に刺突 と刻みのある隆線。内面ナデ後磨き。	淡褐 蒼	砂粒含	口縁片	F6-48G
3	縄文 深鉢	-×-×- 平縁 外反 口縁 内側に肥厚 口唇に蒸糸しによる無節を縦位に施文 その下に刻 みのある隆線 それに平行して沈線、竹管状施文具による刺突列	赤褐 砂研濁 良	細砂	口縁片	G6-72G
4	縄文 深鉢	(360)×-×- 平縁 直立に近い 口縁 内側に肥厚 口唇上端に刻み 刻みのある隆線が横位、縦位に付 けられ、沈線と刺突列が整然と配置される	淡褐 灰褐 良	砂粒含	口縁片	G6-72G
5	縄文 深鉢	-×-×- 外面 阿玉台式的な弧状の隆線があり、隆線状には横引文 が施される。隆線で面された中には、阿玉台式な凡形文、外面には横引 文が施される。内面ナデ。	赤褐濁 灰濁 良	砂粒 石英粒 雲母片	口縁 付近片	F6-64G
6	縄文 深鉢	-×-×- 平縁 外反気味 口縁 横走する二本の沈線で面された中に円形竹管状施文具で斜めに刺 突している 同様なものが無文部を挟んでその下にも見えている 交互 刺突文の崩れたものであろう 内面横ナデ	淡褐 灰濁 良	細砂	口縁片	F6-99G
7	縄文 深鉢	(340)×-×- 平縁 外反 口縁 突起を伴う隆線がめぐる その上には無文帯で磨きが施される 隆線以下はLR縄文 内面は口縁付近横磨き 以下は縦磨き	赤褐 黒褐 良	細砂	口縁～ 胴上部 片	G6-82G

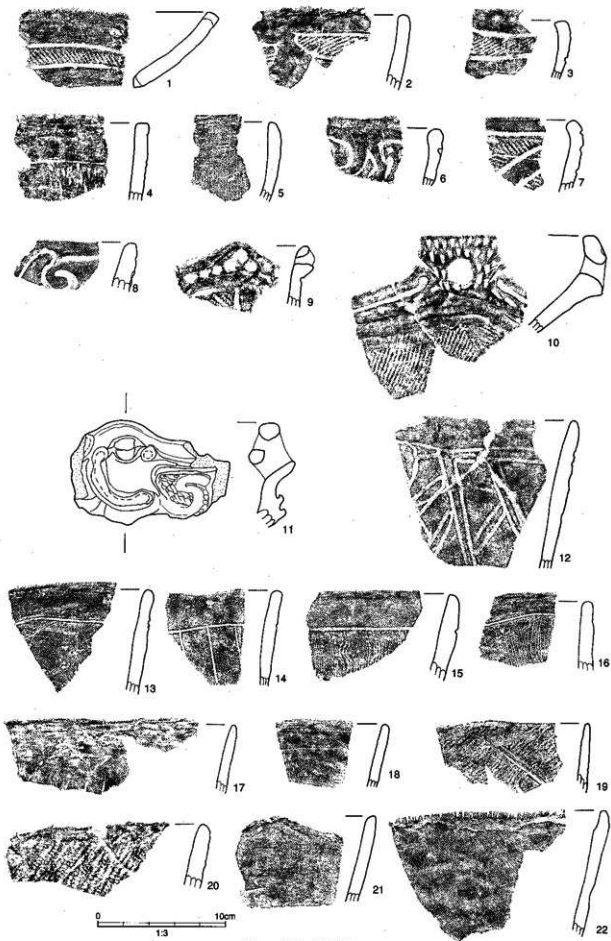


图44 縄文時代後期

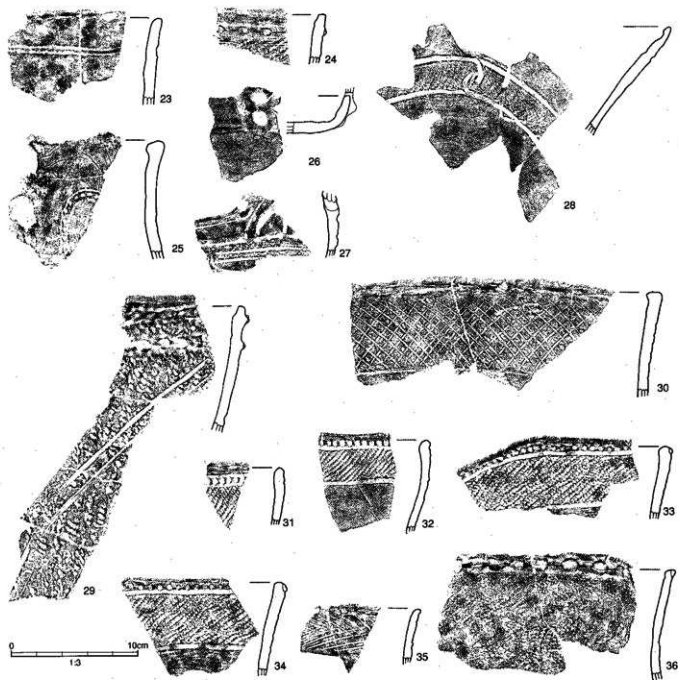


図45 縄文時代後期(2)

表23 包含層縄文時代後期

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(400)×—×— 挟り2カ所明原 胴口はほとんどそのままの状態 土器片鏝としてはとては大きい部類 平縁わずかに内湾 横走する沈線で画された中にL R縄文が施される すり消し部は横磨き 内面横ナデ磨き	灰黄褐 青	砂粒	L縁片	土器片鏝 F6-66G
2	縄文 深鉢	(240)×—×— 平縁直立 沈線で画された中にL R縄文が施される すり消し部は磨き 内面へら削り後磨き ナデ	波帯褐 黒灰 長	細砂	口縁片	G6-82G
3	縄文 深鉢	—×—×— 波状口縁 わずかに内湾 L口に磨き 沈線で画された中にL R縄文が施される すり消し部は磨き 内面磨き	赤褐 砂黒灰 長	細砂少 緻密	口縁片	G6-82G

4	縄文 深鉢	(180)×-×- 平縁直立 器面荒れている 沈線で画された中に列点が施される 内面横ナデ磨き 細かい亀裂が入る	赤褐色 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-88G
5	縄文 深鉢	-×-×- 平縁直立 浅く細かい沈線(条線)が引かれる 内面 横磨き	赤褐色 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-74G
6	縄文 深鉢	(170)×-×- 沈線で画された中に縄文や円形刺突文が施される 内面ナデ	灰褐色	砂粒	口縁片	G6-81G
7	縄文 深鉢	(180)×-×- 平縁直立 口唇やや内湾 太くはっきりとした沈線1条口唇直下を横走 斜方にも施文されその区 画の中にR.L縄文とすり消し部がある 内面磨き	赤褐色 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-77G
8	縄文 深鉢	(240)×-×- 現状は平縁だがあるいは波状になるかもしれない 太くはっきりとした沈線文 横走するもの、曲線を描くものがある磨き 内面はナデ	淡褐色 黒褐色	砂粒	口縁片	F6-88G
9	縄文 深鉢	(190)×-×- 波状 外反 波頂部に突起 貫通孔があり、これに隆 線と円形竹管による列点などが連系する 円形竹管状施文具による新め の刺突列 沈線とR.L縄文 すり消し部に磨き 土器片下部割口に焼成 後穿孔の痕跡あり 内面へウ磨き			口縁片	F7-33G
10	縄文 深鉢	(220)×-×- 波状 大きく外反するが上端でやや内湾する 波頂部に突起貫通孔のある方形突起 棒状の施文具を斜めに刺した刺突 文が施される 口唇は厚く作られ円文と連続した沈線 それに沿って突起部と同じ刺突が施文される 内面 横磨き	赤褐色	細砂	口縁片	F6-73G
11	縄文 深鉢	(230)×-×- 横状把手下に注ぎ口が作られる 幾半切竹管状施文具による幅広い沈線で文様が描かれる 地文は縄文と思われるがよくわからない 内面 横磨き	赤褐色 赤褐色	細砂 微密	口縁片	G6-92G
12	縄文 深鉢	(280)×-×- 平縁外反 地はナデ磨きが施され文様は2本1対の沈線で、幾何学文様に描かれ ている 内面磨き ヘラ削り痕が残る	赤褐色 赤褐色	砂粒 小石粒	口縁片	F6-65G
13	縄文 深鉢	(280)×-×- 平縁外反 口唇付近磨き 横走する1条の沈線の下は ヘラ削りで歯輪条施文具による蛇行する懸垂文、斜行する沈線が施され る 内面は磨き	赤褐色 赤褐色	細砂	口縁片	F6-88G
14	縄文 深鉢	(300)×-×- 波状であろう 外反 地はナデ磨き 磨きは顕著では ない 浅い沈線が横走しそれ以下に縦に同様の沈線が引かれる 内面横ナデ やや荒れた状態	赤褐色 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-58G
15	縄文 深鉢	340×-×- 平縁外反 口唇磨き 横走する1条の沈線 それ以下は櫛波状施文具による懸垂文 内面横磨き	黒褐色 黒褐色	砂粒	口縁片	F6-75G
16	縄文 深鉢	(280)×-×- 平縁外反 口唇付近磨き 横走する1条の沈線 以下ヘラ削りの上に浅く細かい沈 線が縦に引かれる 内面磨き	赤褐色 赤褐色	細砂	口縁片	F6-77G
17	縄文 深鉢	(250)×-×- 平縁 直立 外面 横磨き 胴部には縦の浅い沈線が見えている 内面 横磨き	赤褐色 赤褐色 黒褐色	細砂 赤褐色 スコリア	口縁片	G6-92G
18	縄文 深鉢	(300)×-×- 平縁外反 内面ナデ 口唇付近磨き その下に浅く細かい沈線が1条横走し、その下は櫛波状施 文具による曲線的な文様 おそらく懸垂状になる	黒褐色 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-79G
19	縄文 深鉢	(240)×-×- 平縁外反 口唇ナデ 以下L.R縄文 内面 横磨き	赤褐色 赤褐色	細砂	口縁片	G6-82G
20	縄文 深鉢	(120)×-×- 少波状 直立 小型土器 地文は懸垂Lによる無筋縄文 半切竹管状施文具による幅広い沈線が斜 行する 内面凹凸あり 凸部は磨き	赤褐色 赤褐色	細砂	口縁片	F6-64G
21	縄文 深鉢	(300)×-×- 平縁だが突起がある 外反 口唇に丸みのある三角形の突起が付けられている 横磨き 内面 ナデ 磨き 肌荒れ状	赤褐色 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-65G

22	縄文 深鉢	(200)×-×- 平縁(弱みあり)だが若干波打つ 外反 口唇部は内外ともに割落したような状態 口唇上端には不規則な刻みがある 一見輪筒みではずれた壁状口縁のように見える 浅くて細かい平行沈線が縦に引かれる 磨き 内面ナデ磨き	砂黒赤褐 赤褐 赤褐色	砂粒	口縁片	F6-63G
23	縄文 深鉢	(320)×-×- 平縁外反 平切竹管状施文具による幅広い沈線1条横走するのみ 外面 ナデ 磨き 内面 磨きが施され、かつ凹凸や調痕が残る	砂褐 淡赤褐 赤褐色	細砂	口縁片	F6-84G
24	縄文 深鉢	(440)×-×- 平縁外反 断面が三角形で押圧のある紐織があり、それ以下は粗い縄文を地文として細い沈線が横に施文されている 内面 口唇付近に幅広い浅い沈線が1条引かれる			口縁片	F6-56G
25	縄文 深鉢	(80)×-×- 算盤玉形の注口土管の破片か? 把手のはずれた跡がある。突起もあったものと思われる。口唇は内側に粘土を付けて張り出されている。2条沈線が曲線的に引かれており、その間に棒状施文具を斜めに刺す刺突文が施文される。外面磨き。内面横磨き。	赤褐 赤	砂粒	口縁~ 胴部	F6-64G
26	縄文 深鉢	(220)×-×- 平縁だが突起がある。胴部断面。口縁は直立し、やや内湾気味となる。屈曲より上は磨き。下はナデでヘラ削りの痕跡を残す。突起は「8」の字形。内面は磨き突起部の下屈曲部に当たるところに「()」字形の深く鋭い沈線が描かれる。	砂赤 淡灰褐 赤褐色	細砂 緻密	口縁~ 胴部	F6-78G
27	縄文 深鉢	(180)×-×- 平縁であるが把手が付けられる。口縁外反し、上端がやや内湾する。口唇付近や把手部分に沈線が引かれる。把手は口縁に平行に付けられていたらしい。沈線3条が平行して横走しその間にL R縄文が施されている。この文様帯を区切るような縦の短沈線がある。無文部分は磨き。内面横磨き	褐 暗褐 赤	細砂 緻密	口縁片	F6-99G
28	縄文 深鉢	(200)×-×- 波状口縁 口縁外反 平行して横走する2本の太い沈線が引かれ、その間にはL R縄文が施される。波頂部の下に当たるところの沈線間には、入籠状の対置文が施されている。無文部分は磨き。内面幅広い沈線が2条と波頂部の下に当たるところに円分が縦に少なくとも2個並ぶ。	砂赤褐 赤褐色 赤褐色	細砂砂粒 緻密	口縁片	F6-64G
29	縄文 深鉢	(300)×-×- 平縁直立 蒸籠部が2条 地文は貫背B式に特有の粗い縄文で、紐織の間から胴部下干まで施文される。胴部下干から下半付近まで斜方向の平行沈線が施文される。 内面 幅広い平行沈線が2条 ナデ 磨き	淡褐 灰褐 赤	細砂	口縁~ 胴部	F6-64G
30	縄文 深鉢	(320)×-×- 平縁外反 浅い沈線による拍文がめぐり、沈線で囲した下は無文帯となる。 内面 幅広い沈線が1条 口唇直下にめぐり、以下は横磨き	赤黄褐 赤褐 赤	砂粒	口縁片	F6-79G
31	縄文 深鉢	-×-×- 波状か 直立からやや内湾 口唇内面に2条の沈線間に刻みを施し刺突帯を形成する その下にはL R縄文 内面 横磨き	暗褐 赤	細砂 緻密	口縁片	F6-79G
32	縄文 深鉢	(180)×-×- 平縁 若干内湾する 口唇外面に押圧のような刻みと沈線で刺突帯が形成され、その下にL R縄文帯沈線、さらにその下には無文帯で磨きが施される。 内面横磨き	褐 暗褐 赤	細砂 緻密	口縁片	F6-79G
33	縄文 深鉢	(230)×-×- 波状 外反 口唇外面に刺突列と沈線が施され刺突帯を形成する。その下にL R縄文帯がめぐり沈線で囲まれた無文帯は磨きである。内面 口唇は波頂部を中心に内側に肥厚し、口唇直下の沈線は不明瞭なものとなっている。横磨き	赤褐 暗褐 赤	細砂 緻密	口縁片	F6-70G
34	縄文 深鉢	No.33と同一個体と思われる。			口縁片	F6-70G
35	縄文 深鉢	(170)×-×- 平縁外反 細くて浅い沈線による斜線文 内外面磨き	褐 暗褐 赤	緻密	口縁片	G6-82G
36	縄文 深鉢	(300)×-×- 平縁 縦やかに屈曲 外反 口唇外面に紐織文がめぐり、以下は粗い縄文。L R縄文が 内面 口唇に幅広い沈線(ほとんど不明瞭だが)がめぐり、横ナデ 磨き	淡赤褐 赤褐色 赤	砂粒	口縁片	F6-76G

第2節 弥生時代・古墳時代

栗谷遺跡Ⅲ地区における弥生時代・古墳時代の遺構についてであるが、まず弥生時代では竪穴住居跡33軒、方形周溝墓2基、土坑5基、その他の遺構5基が検出されている。时期的には後期で、一部古墳時代初頭のものも含まれると考えられる。栗谷遺跡Ⅲ地区において報告する地点は、台地の南側先端部の一部と、北側先端部の大部分に分かれているが、今回北側部分の23軒と南側部分の10軒を報告することになる。方形周溝墓2基とその他の遺構については、台地北側で検出され、土坑5基については台地南側で検出された。

古墳時代前期以降については、住居跡が3軒検出され、中期～後期にかけての所産と考えられる。何れも台地北側で検出されている。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表を参照されたい。

第1項 弥生時代後期

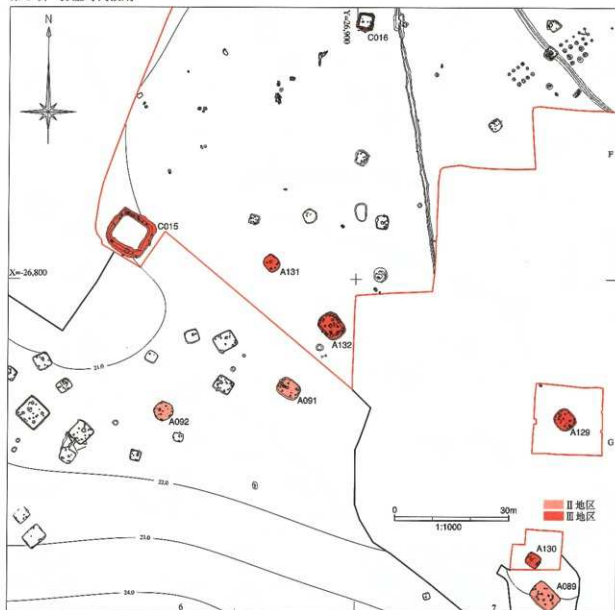


図46 弥生時代遺構配置図

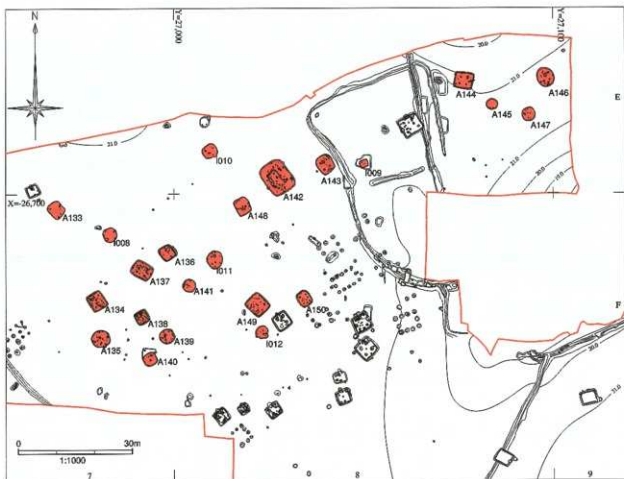


图47 弥生时代遺構配置图(2)

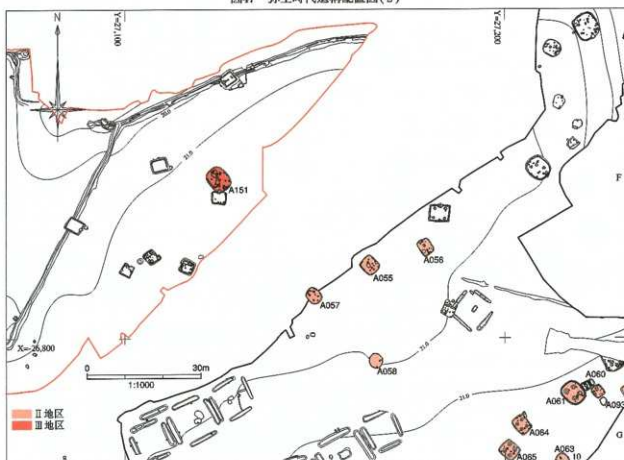


图48 弥生时代遺構配置图(3)

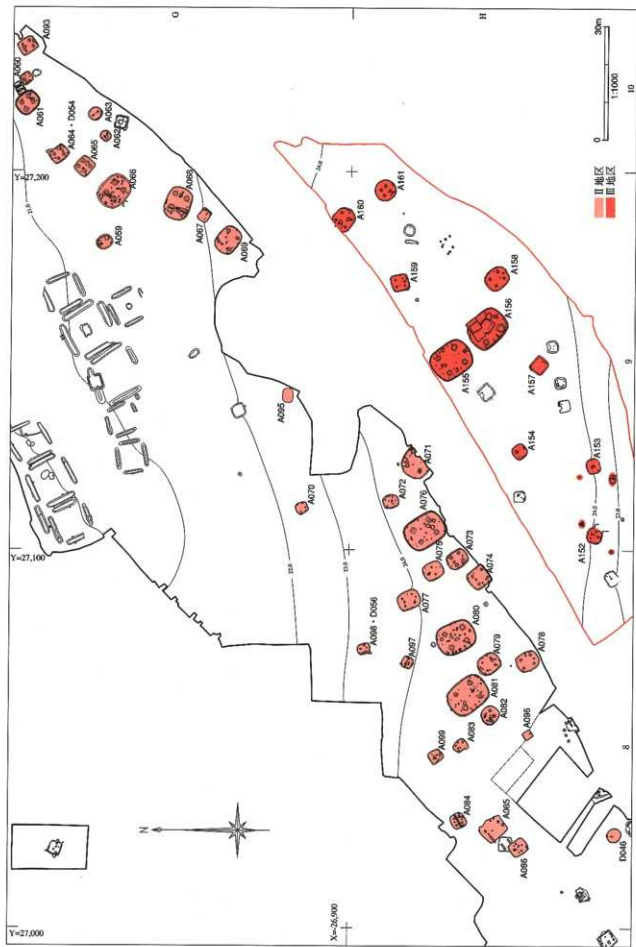


图49 新石器时代遗址配置图(4)

(1) 竪穴住居跡

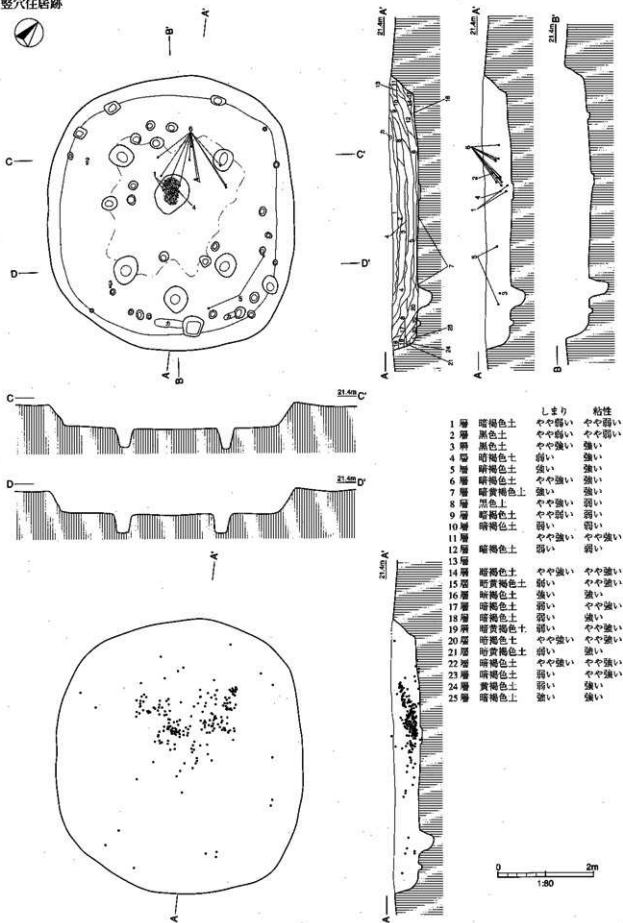


図50 A129

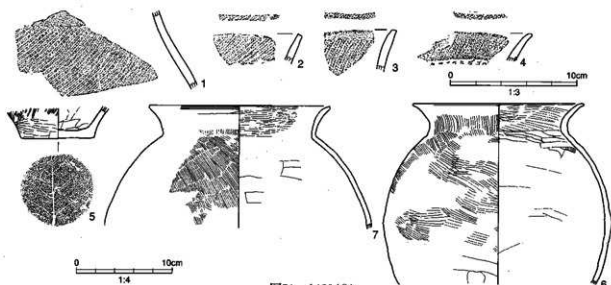


図51 A129(2)

表24 A129遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	一×一×一 胴部上半ナデ→附加条縄文	褐色 青	砂粒	胴部片	
2	弥生 甕	一×一×一 口径外反 口径・口径とも附加条縄文 内面 ナデ	暗赤褐 青	砂粒	口径片	
3	弥生 甕	一×一×一 口径外反 口径・口径とも附加条縄文 口径ドナデ 頸部 内面ナデ後磨き	暗褐色 青	砂粒	口径片	外面コケ状付着 物
4	弥生 甕	一×一×一 口径外反 口径・口径とも附加条縄文 下端 ひだ状に押圧を加えた 頸部 隆帯を施す 内面ナデ後磨き	暗褐 青	砂粒	口径片	
5	弥生 甕	一×77×(34) 胴部下半 附加条縄文 内面ナデ 胴部下端 ヘラ磨き 底部 木葉痕	暗赤褐 青	砂粒	底部片	
6	土師器 甕	(180)×一×(192) 最大径胴部(240) 口径外反 頸部屈曲 頸部球胴状 口径横ナデ 内面横ハケ 頸部一縦ハケ 内面鈍削り 胴部上半・下半一斜め、横のハケ 内面ナデ 胴部下端一覽削り	暗褐 赤	砂粒	口径～ 胴部 1/4	
7	土師器 甕	(190)×一×(128) 口径外反 頸部屈曲 胴部球胴状 口径横ナデ 内面横ハケ 頸部 斜めのハケ 内面ナデ	暗褐 青	砂粒 橙色粒	口径～ 胴部上 半	

A129

検出地区 G7-54G。台地中央、平坦面に位置する。

遺 構 小判型の中型の住居跡で、床はロームを踏み固めた床で硬化面が壁際で広範囲に検出され、住居跡中央はやや軟弱である。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に25層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土下層～上層にかけて小破片を中心に比較的多量に出土。住居跡北側に集中する傾向があった。

所 見 古墳時代の土師器も出土しているが、全体の出土状況から弥生時代後期の住居跡と判断した。

A130

検出地区 G7-48G。台地中央、平坦面に位置する。

遺構 隅丸方形の小型の住居跡で、床はロームを踏み固めた床で硬化面が壁際で広範囲に検出され、住居跡中央はやや軟弱である。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央からやや壁際による。主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に7層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土下層～上層にかけて小破片を中心に比較的多量に出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

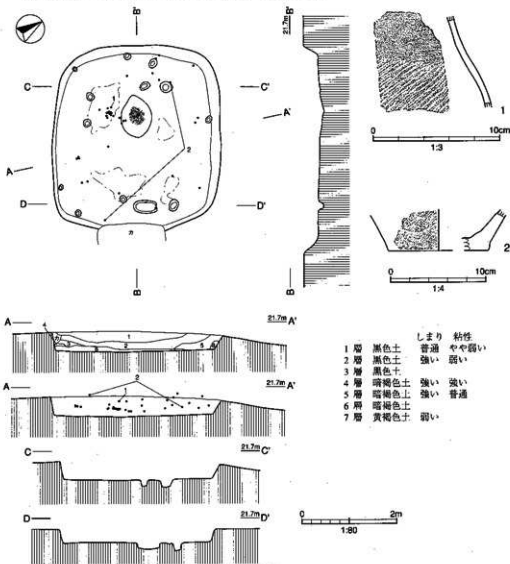


図52 A130

表25 A130遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 L径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×-×- 胴部上平→附加条縄文 内面ナア	暗褐色	砂粒	胴部片	外面コケ状付着物
2	弥生 甕	-×-×- 胴部下踵 附加条縄文 内面ナアと思われる 底部 木炭痕	褐色	砂粒	底部片	

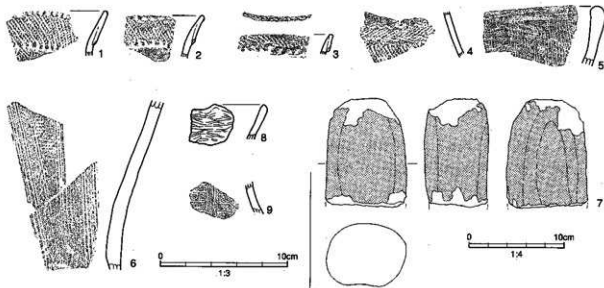
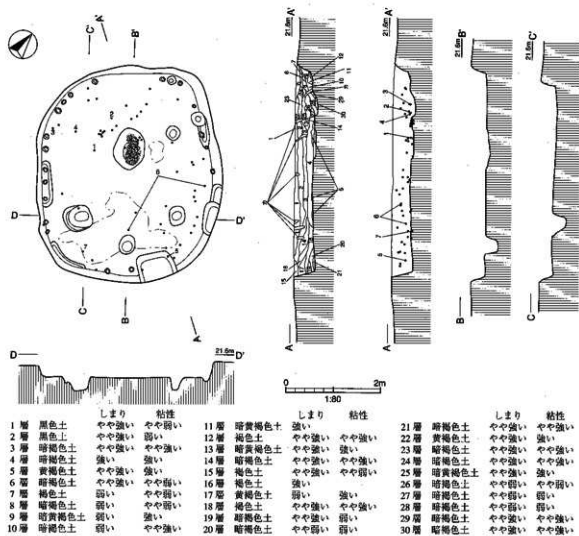


図53 A131

A131

検出地区 G7-80G。台地北側、平坦面に位置する。

遺構 小判型の中型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で硬化面が部分的に広がる。壁もロ

ームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。炬は地床炬で住居跡中央からやや壁際による。

覆土は、色調を基本に30層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて出土。覆土中から縄文土器（中期）も少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器が主体的に出土した。

覆土中から縄文系土器が出土していることは注目される。

表26 A131遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	-X-X- 口縁外反 折り返し口縁 内面ナデ後ヘラ磨き 口縁 附加条縄文施文後上端押圧 下端 ペン先状工具による刺突 頸部ナデ (一部口縁に施文されたものが頸部にかかったと思われる)	砂褐 暗黒褐 青	砂粒	口縁片	A131と同一個体 か?
2	弥生 壺	-X-X- 口縁外反 折り返し口縁 口縁 附加条縄文施文後上端押圧 下端 ペン先状工具による刺突 頸部ナデ 内面ナデ後ヘラ磨き	褐 青	砂粒 橙色粒	口縁片	A166と同一個体 か?
3	弥生 壺	-X-X- 口縁外反 折り返し口縁 口縁・口径ともRL縄文 下端に押圧 内面ナデ後ヘラ磨き	黒褐 青	砂粒 橙色粒	口縁片	
4	弥生 壺	-X-X- ナデ→無筋縄文の上下を結束縄文で挟む→附加条縄文	砂褐 暗褐 青	砂粒 赤色粒 橙色粒	頸部～ 胴部片	
5	縄文 深鉢	-X-X- 波状口縁 条縄文 内面 横位に磨かれる	砂暗褐 暗褐 青	砂粒 橙色粒	口縁片	
6	縄文 深鉢	-X-X- 括れをもつ LR縄文施文後、磨削条縄文を縦位に施す 内面ナデ 上部は磨かれる	暗茶褐 青	砂	胴部片	
7	石器 砥石	長軸114×短軸85×厚さ66 重量1010g 上端及びD半部を欠損するが、本来は隅丸長方形ないし長楕円形を呈し ていたと推測される 全面に明瞭な研磨跡が残されており片面には凹み をもつ			1/2	
8	縄文 深鉢	-X-X- 波状口縁 外面 研磨される 内面 ナデ後磨きを施す	暗褐 青	砂粒 橙色粒少	口縁片	
9	弥生 壺	-X-X- 3本歯撻搦による横走文施文後、撻搦縦区画される 内面ナデ	暗褐 青	砂粒	頸部片	

A132

検出地区 G6-92G。台地北側、平坦面に位置する。

遺構 隅丸長方形の中型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で硬面は壁際で広範囲に検出される。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。主柱穴は4本柱でP1～P4が考えられる。P5は出入り口施設に伴うピットで、P6については、遺物の出土状況から縄文時代後期の土坑と考えられる。炬は地床炬で住居跡中央からやや北壁による。周溝は一部で検出。

覆土は、色調を基本に21層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。柱穴・周溝の状況から、拡張住居と考えられる。床面直上から縄文系土器が出土していることは注目される。

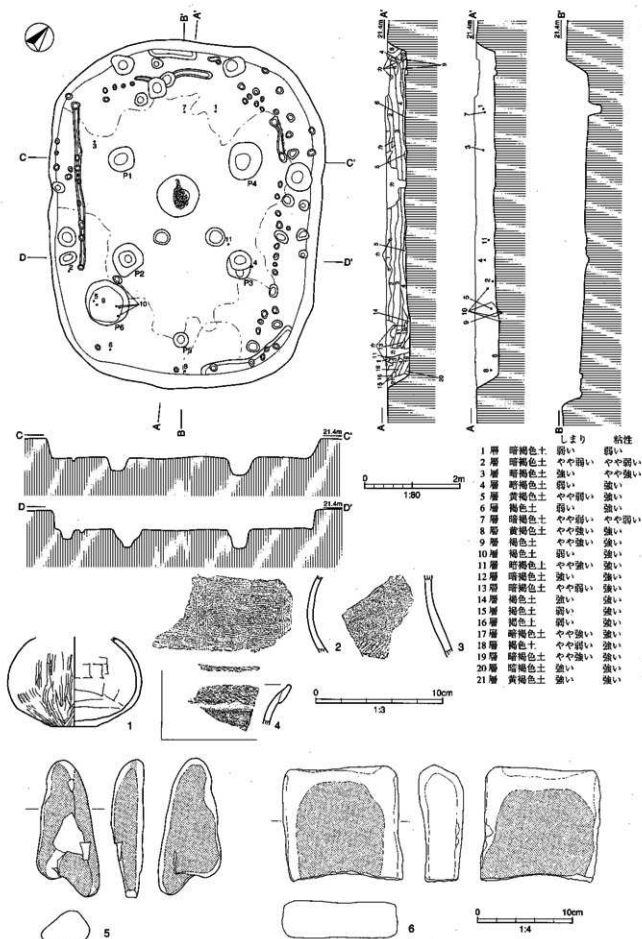


図54 A132

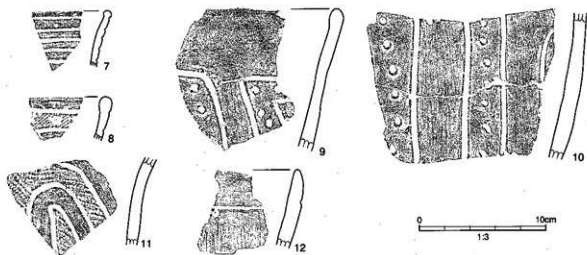


図55 A132(2)

表27 A132遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 小型壺	-×50×(94) 胴部断面楕円状 胴部下半~下端 ナデ後縦ヘラ磨き 内面 ヘラナデ及びヘラ刷り	橙褐色 青	粗砂粒	1/3	
2	弥生 壺	-×-×- 3本尚構指による縦区画充填横文 内面ヘラナデ	暗茶褐色 青	粗砂粒	胴部片	外面ス付着
3	弥生 壺	-×-×- 胴部 ナデ 内面ナデ後ヘラ磨き 胴部上半 附加糸縄文	暗褐色 青	砂粒	胴部~ 胴部	
4	弥生 壺	-×-×- 口縁外反 折り返し口縁 L1縁・口唇とも無筋縄文 内面ナデ後ヘラ磨き 胴部 ナデ	橙褐色 青	砂粒	口縁片	
5	石器 磨石(?)	長軸108×短軸50×厚さ25 重量140g 不整な長楕円形を呈する 全体に弱い磨痕が残されており磨石の用途 が考えられる 火痕あり				略空形
6	石器 砥石	長軸(120)×短軸121×厚さ40 重量1160g 隅丸の長方形を呈していたと思われるが下半部を欠損する 両面ともよ く使い込まれ中央部がそれぞれ凹む 研磨痕は側面にも認められる			1/2	
7	縄文 深鉢	-×-×- 口縁外反し内屈 口縁直下より横位の沈線5条 内面磨かれる	暗赤褐色 青	粗砂粒 赤色粒	口縁片	
8	縄文 深鉢	-×-×- 口唇肥厚 RL単筋縄文磨消し平行沈線文が描かれる	暗赤褐色 青	粗砂粒	口縁片	
9	縄文 深鉢	-×-×- 波状口縁内外面とも丁寧に研磨され口縁下に横位の沈線1条を施す	橙褐色~ 暗褐色 青	砂粒 赤色粒	口縁片	
10	縄文 深鉢	-×-×- 沈線による枠状区画内に列点文を施す 枠外は磨かれる 内面ナデ後磨き	橙褐色 青	砂粒 少砂	口縁片	A132-12と同一 個体と思われる
11	縄文 深鉢	-×-×- 地文LR単筋縄文磨消し平行沈線による楕円状モチーフが描かれる	暗茶褐色 青	粗砂粒多	胴部片	
12	縄文 深鉢	-×-×- 縦位の平行沈線区画内に列点文 枠外は磨き 内面磨き	暗茶褐色 青	砂粒 少砂	胴部片	外面ス付着

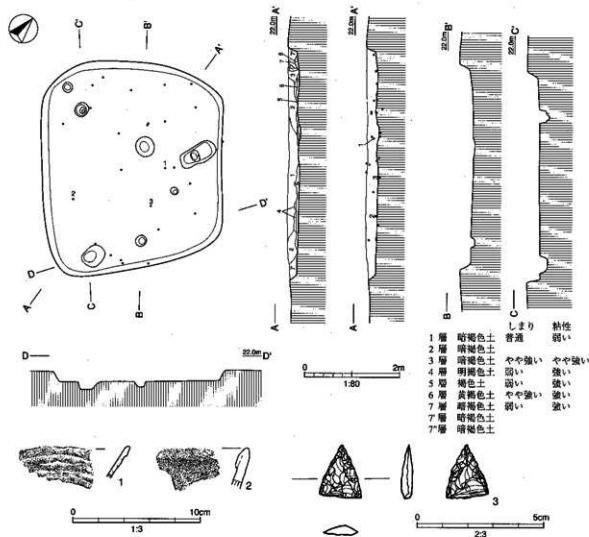


図56 A133

表28 A133遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 口唇へ付加条縄文? 口縁 輪積み痕を残す 内面ヘラナダ	暗褐色 普通	砂粒含	口縁片	
2	弥生 甕	-X-X- 口唇 内側ぎ状 口縁 内面に折り返し	褐色 普通	砂粒多含	口縁片	
3	石器 石鏃	長軸21×短軸16×厚さ4 重量1.1g 平基式の無茎鏃である 平面の一部に割離痕を残す			完形	

A133

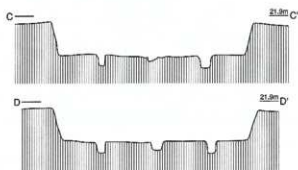
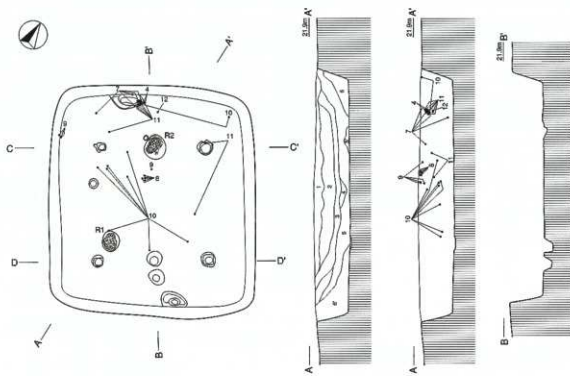
検出地区 G7-91G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸台形の小型住居跡で、床はロームの床でやや軟弱。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北による。周溝は検出されず支柱穴も不明である。

覆土は、色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土下層～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。



- | | しまり | 粘性 |
|----|------|-----------|
| 1層 | 暗褐色土 | 弱い 普通 |
| 2層 | 黒色土 | 強い 普通 |
| 3層 | 暗褐色土 | やや弱い やや強い |
| 4層 | 暗褐色土 | 弱い 弱い |
| 5層 | 暗褐色土 | |
| 5層 | 暗褐色土 | |
| 6層 | 黄褐色土 | 強い 強い |
| 6層 | 黄褐色土 | やや弱い |

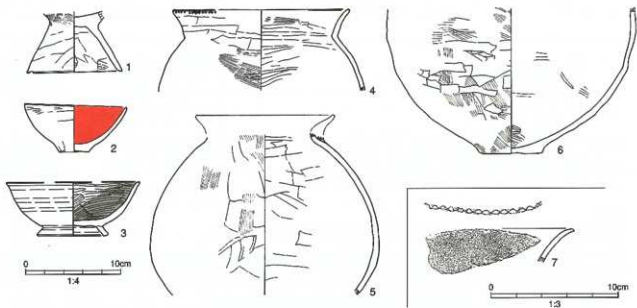


図57 A134

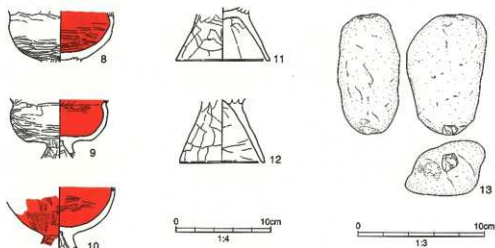


図58 A134(2)

表29 A134遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 台付甕	—×100×(64) 脚部～接合部 外面斜めのハケ 内面へら削り 裾部 外面ナデ 内面上部へら削り 下部斜めのハケ		④暗褐 ⑤暗赤褐	砂粒多	脚部片	
2	土師器 椀	107×30×52 小さい底部からやや立ち上がり気味に体部広がる 口縁に至ってやや内傾しつつ立ち上がる 内外面とも器面の摩耗が激しく調整痕が認められにくいナデの後へら磨きを加えられていると思われる		褐黒	砂粒多	完形	口縁付近内外面に黒色付着物 赤彩
3	土師器 高台付杯	(140)×75×57 「ハ」の字状に開く高台をもつ 内面丁寧なへら磨き		暗褐褐 昏	砂粒含	1/3	内黒
4	弥生 甕	(186)×—×(86) 頸部屈曲 口唇刻み目 口縁から頭部にかけて輪積み痕 胴部弱いハケ 内面ナデ		暗赤褐 昏	砂粒含	口縁片	
5	土師器 甕	—×—×— 胴部球胴状を呈すると思われる ハケ調整後ナデ 内面横ナデ		暗赤褐	砂粒含	胴部片	
6	土師器 甕	—×66×(154) 球胴状を呈すると思われる 底部平底 外面 胴下半不定方向のハケ 剥離著しい 内面 ナデ?		褐黒	砂粒 多含	1/3	
7	弥生 甕	—×—×— 口縁外反 口縁・口唇押圧 内外面ナデ		茶褐 昏	砂粒含	口縁片	
8	土師器 高杯	—×—×(54) 杯部 平たい椀型 体部 内外面ナデ後横へら磨き 口縁との接合部分は粘土の輪積みを明顯に残し稜を作出		黒 昏	砂粒含	1/2	赤彩
9	土師器 高杯	—×—×(64) 杯部 平たい椀型 下端でやや角張る 体部 内外面ナデ後横へら磨き 接合部～脚部は縦へら磨き 脚部 内面へら削り		褐黒	砂粒 灰白色粒 多	1/2	赤彩
10	土師器 高杯	—×—×(71) 杯部椀型 口縁に向かって立ち上がる 内外面 ハケ調整後へら磨き 器面の剥離 摩耗激しい		明褐 黒	粗砂粒多	1/2	赤彩
11	土師器 台付甕	—×100×(56) 脚部 内外面へらナデ 内面接合部へら削り		④暗褐 ⑤暗赤褐	砂粒多	脚部片	

12	土師器 台付蓋	—×90×(67) 脚部 内外面ヘラナデ	◎橙褐色赤褐色	砂粒含	脚部片	
13	石器 敷石	106×60×48				片麻岩

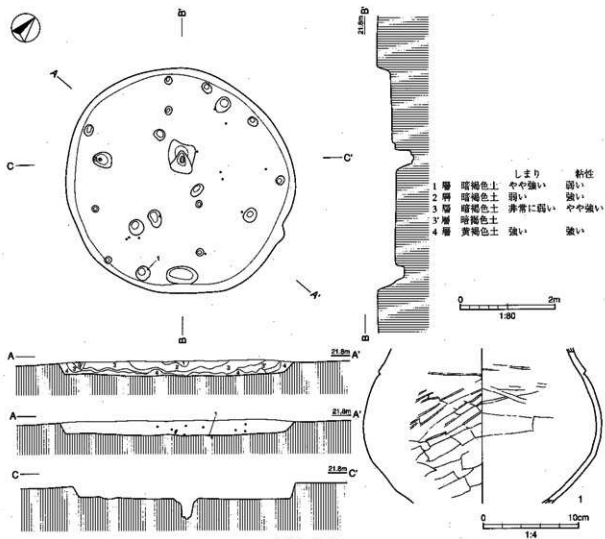


図59 A135

表30 A135遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	—×—×(163) 最大径(250) 上部に輪積みを利用した段が1段めぐる 内外面ヘラナデ	◎橙褐色 赤褐色	小礫多含	脚部片	

A134

検出地区 F7-73G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸長方形の小型住居跡で、床はロームの床で全体的によく踏み固められている。壁もロームの壁で直線的に立ち上がる。炉は地床炉で2基有り。R1の方がよく掘り込まれ明瞭な火床を持つ。R2は住居跡内の位置は良いが、凹みを持たず床が赤化しているような状態であった。周溝住居跡東隅でわずかに検出はされたが、明瞭なものは無かった。主柱穴は4本柱である。

覆土は、色調を基本に6層に分層。覆土中に炭化物が検出され、人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。中層からの出土が少ない。

所見 古墳時代前期と思われる遺物も出土しているが、全体の出土状況から弥生時代後期の住居跡と判断した。

A135

検出地区 F7-84G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 円形の小型住居跡で、床はロームの床でやや軟弱。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から西による。周溝は検出されず主柱穴も不明である。

覆土は、色調を基本に4層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

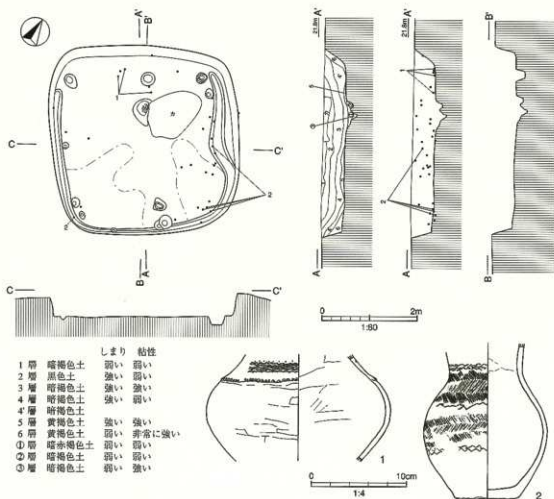


図60 A136

表31 A136遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 調成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	一××113 最大径(194) 輪積み 胴中位が筒口状に影らむ 外面 結節5段 頸部と胴部の境に輪積み痕を利用した段をめぐらし連続刺突を加える	橙褐色	砂粒含	頸部片	内外面スス付着
2	弥生 甕	一×66×(164) やや細めの頸部から胴中位が影らみ底部にかけてややすぼまる 外面 波状構成 結節2段→RL→附加条→RL→結節2段→ナデ→RL→附加条→RL→結節2段→ナデ ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	粗砂粒多含	略完形	外面 コゲ状付着物

A136

検出地区 F7-92G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はロームの床でやや軟弱だが住居跡南側で若干踏み固めた範囲が広がる。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北による。周溝は約3/4周し、支柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される。①～③は炉のセクションである。

遺物 床面直上～覆土中層にかけて少量出土。壁際に出土する傾向有り。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。所謂、印手系土器を主体に出土する住居跡である。

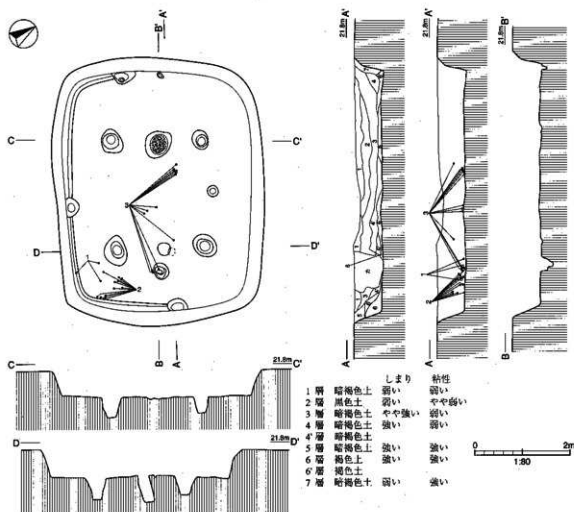


図61 A137

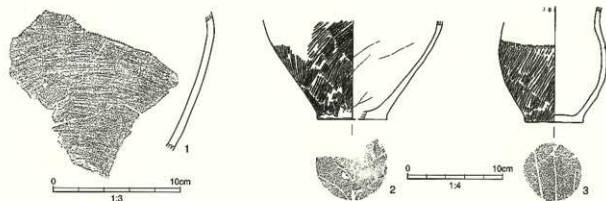


図62 A137(2)

表32 A137遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕 外面 ヘラナデ 内面 ナデ	-×-×- 木葉痕	暗褐色 曇	粗砂粒含	胴部片	内面スス付着
2	弥生 甕 外面 附加条縄文 内面 ナデ	-×74×(104) 木葉痕	赤褐色 砂礫曇	粗砂粒含	胴部～ 底部片	内外面スス付着
3	弥生 甕 外面 頸部-上部(上方からの刺突)と下部(下方からの刺突)の2カ所に 連続刺突 内面 ナデ 附加条縄文	-×62×123 木葉痕	暗褐色 曇	粗砂粒 多含	3/4	

A137

検出地区 F7-93G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸長方形の小型住居跡で、床はロームの床で全体的によく踏み固められている。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北西により、柱穴間に位置する。周溝は一部で検出された。主柱穴は4本柱である。

覆土は、色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土中層にかけて出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。所謂、印手系土器を主体に出土する住居跡である。

A138

検出地区 F7-94G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はロームの床で全体的によく踏み固められている。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北により、周溝は検出されず主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に5層に分層。覆土下層に層を形成するほどではないが、広範囲に焼土を検出。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

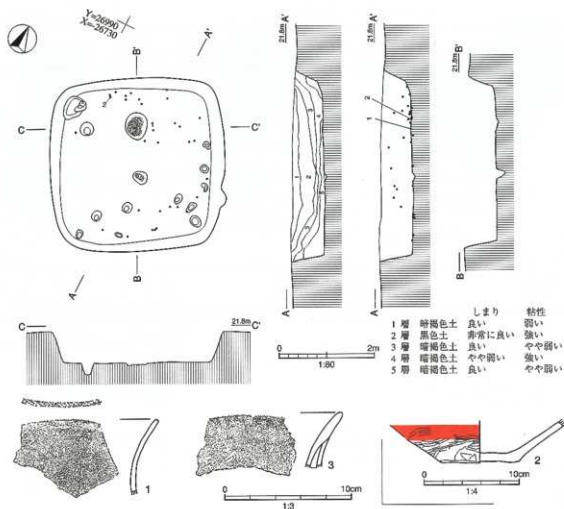


図63 A138

表33 A138遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法景 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生甕 口縁外反 口縁 内外面ナデ	×××× 口唇 附加条縄文	褐色	砂粒 橙色粒 含	口縁片	外面スス付着
2	弥生甕 外面 ナデ後ヘラ靡き 内面 ヘラナデ	××84×(45) ナデ後ヘラ靡き ヘラ削り後ナデ	褐色 悪	粗砂粒 赤色粒 含	胴部- 底部片	赤彩
3	弥生甕 口縁外反 口縁 器面摩耗のため不鮮明	×××× 複合口縁(下端に粘土帯挟み込み) ナデか?	砂粒褐 色褐	粗砂粒含	口縁片	

A139

検出地区 F7-94G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 不整形の小型住居跡で、床はロームの床でやや軟弱だが硬化面を一部で検出。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。炉は地床炉で2基検出された。R1は住居跡中央から北により、R2は住居跡中央から南による。火床はR2の方が明瞭で、掘り込みもなされている。R1は床面がわずかに赤化する程度で、炉としての使用期間は短かったと考えられる。周溝は検出されず支柱穴は不明である。壁際に並ぶ小穴は壁柱穴と考えられる。

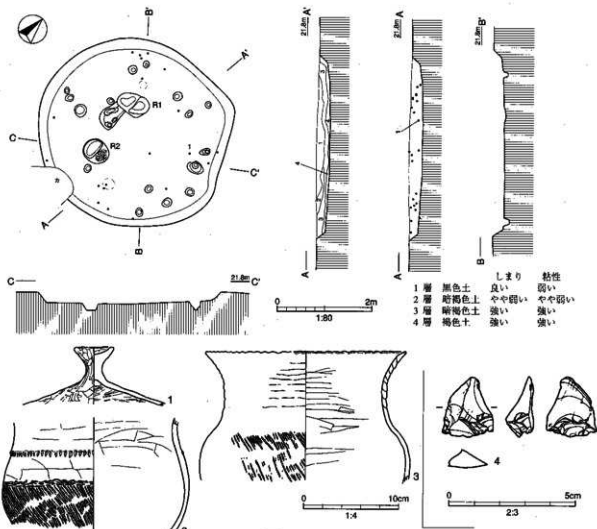


図64 A139

表34 A139遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 蓋形土器	つまみ径42×体部(150)×(62) 蓋体部外面に輪積み痕 外面 つまみ部へラ削り後へラ磨き 体部 へラナデ 内面 天井部へラ削り ナデ後へラ磨き	◎暗褐色 ◎暗褐色	砂粒含	1/2	
2	弥生 甕	一×一(128) 最大径195 胴部中位 横円状に膨らむ 外面 ナデ→胴部との境に輪積みを利用した段を有し下端に連続列突を 加える ナデ→結節3段→附加条縄文 内面 ナデ	◎明褐色 ◎暗褐色	粗砂粒多 含	1/3	外面 コゲ状付着物 及びスス
3	弥生 甕	(210)×一×(140) 頸部に輪積み痕を残す 口唇押圧・輪積み痕8段→ナデ→附加条縄文 内面 へラナデ	◎暗褐色 ◎暗褐色	粗砂粒多 含	L1層~ 胴部片	
4	石器	長軸24×幅16×厚さ7 はじめに打面から背両状に平坦な加工をし、 次に腹面のバルブの厚みをとるような加工がなされている。				

覆土は、色調を基本に4層に分層された。

遺物 床面直上~覆土上層にかけて少量出土。蓋形土器が覆土中層から出土している。
 所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。炉が2基あることと壁柱穴の配置から、
 立て替え或いは拡張住居と考えられる。所謂、印手系土器を主体に出土する住居跡で、蓋型土器が出土
 していることが注目される。

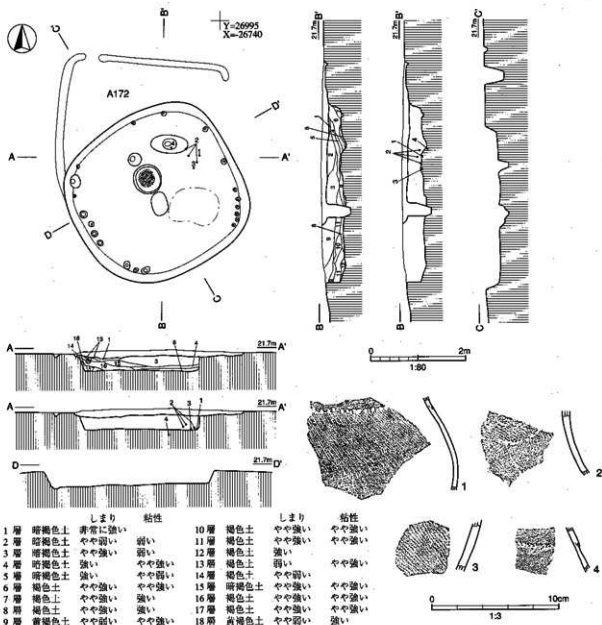


図65 A140

表35 A140遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	外面 ナデ→胴部との境に輪痕み痕を利用した段を有し連続列突を加える 附加糸縄文 内面 ナデ	-×-×-	褐色 滑	粗砂粒含	胴部片	外面 コゲ状付着物
2	弥生 甕	胴部上半 結節2段→波状縄文(摩耗のため原体不明) 内面 ナデ	-×-×-	暗褐色 滑	粗砂粒含	胴部片	器面摩耗
3	弥生 甕	外面 附加糸縄文 内面 ナデ	-×-×-	暗褐色 滑	粗砂粒含	胴部片	内外面スス付着
4	弥生 甕	外面 結節3段→輪痕み痕を利用した段を有し下部に連続列突 胴上半→断糸文	-×-×-	赤黒間 砂滑 滑	砂粒含	胴部片	外面スス付着

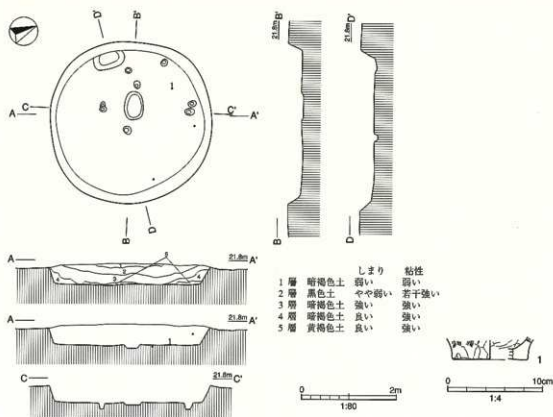


図66 A141

表36 A141遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	一×(80)×(24) 木業痕 外面 附加糸縄文 ヘラ削り 内面 ヘラ削り	暗褐色 青	砂粒含	底部片	内面 コゲ状付着物

A140

検出地区 F7-95G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。A172と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はロームをよく踏み固めた床で硬化面が一部で広がる。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北により、周溝は検出されず主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に11層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土下層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。所謂、印手系土器を主体に出土する住居跡である。

A141

検出地区 F8-3G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 円形の小型住居跡で、床はロームの床でやや軟弱。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北により、火床はわずかに認められるのみであった。周溝は検出されず主柱穴も不明である。

覆土は、色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

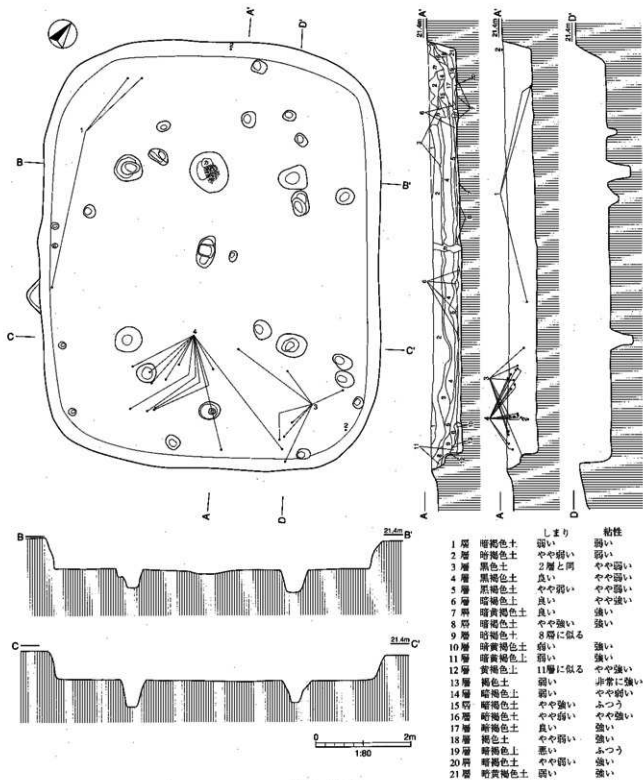


図67 A142

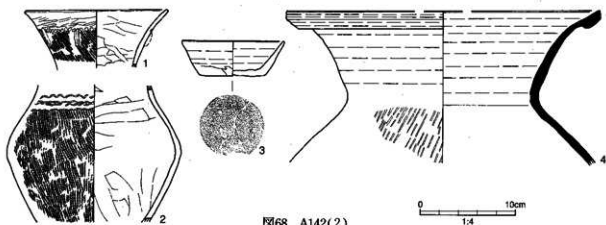


図68 A142(2)

表37 A142遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	150×-×(64) 口縁外反 外面 口唇 附加糸縄文 ヘラ磨き 口縁との境に連続刺突 附加糸縄 文施文後刺突列直下に縦長の突起を7単位貼り付け 下半ナデ	暗褐色	砂粒含	口縁片	
2	弥生 壺	-×-×(144) 胴上部が膨らむ 頸部 結節3段 捻糸文	暗褐色	粗砂粒含	胴部片	内外面コゲ状付 着物及びブス ス付着
3	土師器 坏	98×68×37 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁から体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 赤色粒 含	1/2	
4	須恵器 壺	(330)×-×(164) ロクロ 口縁外反し上端で立ち上がる 外面 ナデ 胴上半 タタキ 内面 ナデ	暗赤褐色	粗砂粒 雲母含	口縁~ 胴部片	

A142

検出地区 E8-30G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸長方形の大型住居跡で、床はロームをよく踏み固めた床で周辺部が特に堅い。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北による。明瞭な周溝は検出されず部分的にわずかに窪んでいた。主柱穴は4本柱である。

覆土は、色調を基本に21層に分層。概ね、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上~覆土上層にかけて少量出土。

所見 主柱穴の配置から拡張住居の可能性あり。出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。後期でも後半に属するだろう。床面直上から覆土下層にかけて口縁部下端にイボ状突起を持つ壺型土器(1)が出土し、同時に頸部がS字結節文で胴部に捻糸文を施文している壺形土器(2)が出土していることは注目される。

A143

検出地区 E8-40G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 小判形の中型住居跡で、床はロームをよく踏み固めた床で、住居跡中央部で硬化面が比較的広範囲に広がる。やや軟弱。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から北により、周溝は検出されず主柱穴は4本柱である。

覆土は、色調を基本に14層に分層。覆土中層に焼土層を検出、人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上~覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

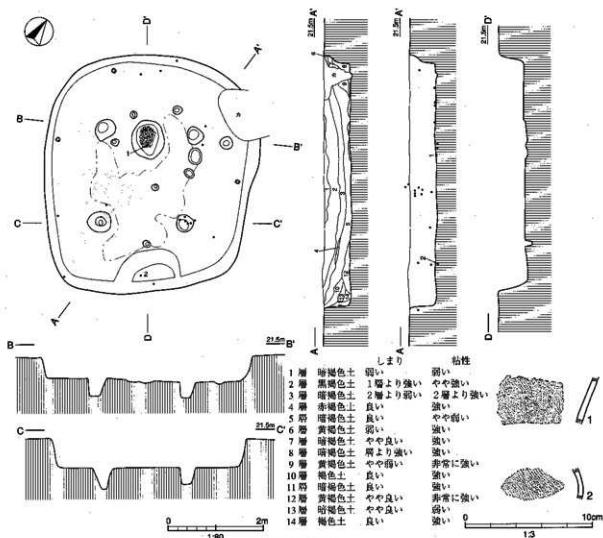


図69 A143

表38 A143遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生甕 外面 附加糸縄文 内面 ヘラナデ	-X-X- 附加糸縄文 ヘラナデ	砂暗褐色 砂褐色	砂粒含	胴部片	外面スス付着
2	弥生甕 外面 附加糸縄文 内面 ナデ	-X-X- 附加糸縄文 ナデ	暗褐色 青	砂粒含	胴部片	外面 コケ状付着物

A144

検出地区 E8-78G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸長方形の中型住居跡で、床はロームをよく踏み固めた床で、硬化面が部分的に点在する。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央から西により、周溝は約3/4周し主柱穴は4本柱である。

覆土は、色調を基本に24層に分層。覆土中層に焼土層を検出、人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

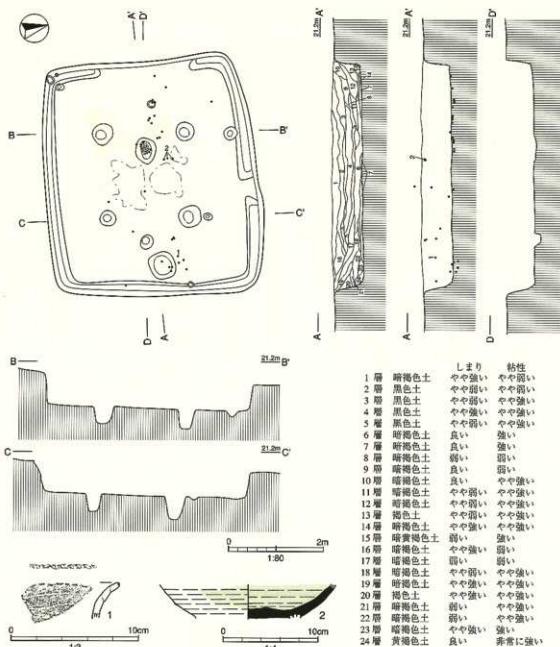


図70 A144

表39 A144遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×-×- 外面 口唇押圧 輪積み痕3段 内面 ナテ		橙 黒	砂粒 小石多含	口縁片	器面劣化
2	須恵器 甕	-×-×(36) ロクロ 回転ヘラ削り 高台部欠損		緑灰色 良	粗砂粒含	底部片	内外面に自然輪

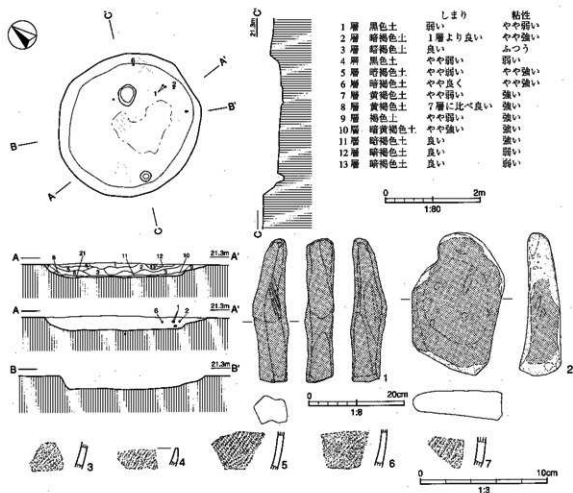


図71 A145

表40 A145遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 L径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 砥石	長軸304×短軸75×厚さ60 重量1370g 長大な棒状の礫の各面に比較的良好な研磨痕あり 各所で凹む 断面は不整な六角形に近い 一部に粗い織状痕が残される				完形
2	石器 砥石	長軸302×短軸194×厚さ63 重量4400g 大石状の大型 厚手の作りである 内面及び細縁の広い範囲に研磨痕あり 中央部が弱く凹む				完形
3	弥生 甕	-×-×- 外面 附加糸縄文 内面 ナデ	橙褐色	粗砂粒 多含	胴部片	外面スス付着
4	弥生 甕	-×-×- 内外面蒸糸文	暗褐色	砂粒含	L線片	
5	弥生 甕	-×-×- 外面 胴下半 LR単節縄文 内面 ヘラ磨き	暗褐色	砂粒含	胴部片	
6	弥生 甕	-×-×- 蒸糸文	褐色	粗砂粒 小石多含	胴部片	
7	弥生 甕	-×-×- 蒸糸文	褐色	粗砂粒 小石含	胴部片	

A145

検出地区 E8-88G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 不整形形の小型住居跡で、床はローンをよく踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面を検出。壁もローンの壁で斜め立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央からやや北東により、周溝・支柱穴も検出されなかった。

覆土は、色調を基本に13層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量出土。覆土上層にて大型の砥石が出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

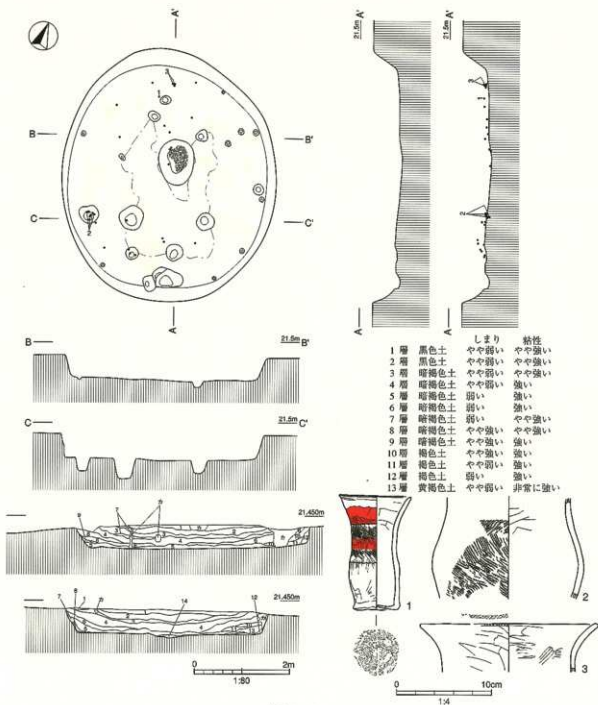


図72 A146

表41 A146遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生甕	75×50×122 木葉痕 口縁外反 胴中位にやや括れをもつ 口縁-口唇RL 口縁ナデ(一カ所RL施文有) 頸部-頸部ナデ後一部へラ磨き 頸部下半から胴部上半に上ドを結節縄文で挟みRL卑節縄文施文 胴部との境をナデ及び磨きで磨り消す 胴下半ナデ後一部へラ磨き 下端へラ削り 内面ナデ 胴下半へラ削り	褐黒褐色 やや重	砂粒多含	略丸形	赤彩
2	弥生甕	一×一×(107) 外面 ナデ 胴上半ナデRL熱糸文 内面 ナデ	昏暗褐色 赤褐色	粗砂粒含	胴部片	内外面コゲ状付着物及びスチ付着
3	弥生甕	(168)×一×(51) 外面 口唇LR卑節縄文 ヘラナデ 内面 ナデ後頸部へラ磨き	暗赤褐色 青	砂粒 赤色粒	口縁片	

A146

検出地区 E8-97G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 不整形円形の小型住居跡で、床はロームをよく踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面を検出。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央からやや北より、周溝は検出されず支柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。14層は炉の覆土。

遺物 床面直上を中心に少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

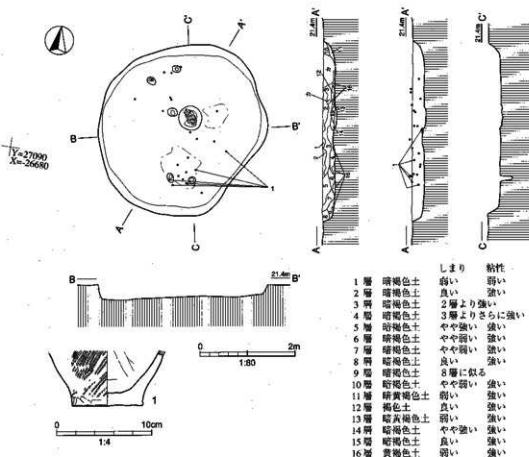


図73 A147

表42 A147遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	一×74×(59) 外面 刷上半附加糸縄文 ヘラ削り 内面 ナデ	暗褐色	砂粒含	胴部～ 底部片	内外面一部コゲ 状付着物

A147

検出地区 E8-98G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 不整円形の小型住居跡で、床はロームのやや軟弱な床だが硬化面を部分的に検出。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央からやや北より、周溝・支柱穴も検出されなかった。

覆土は、色調を基本に16層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。

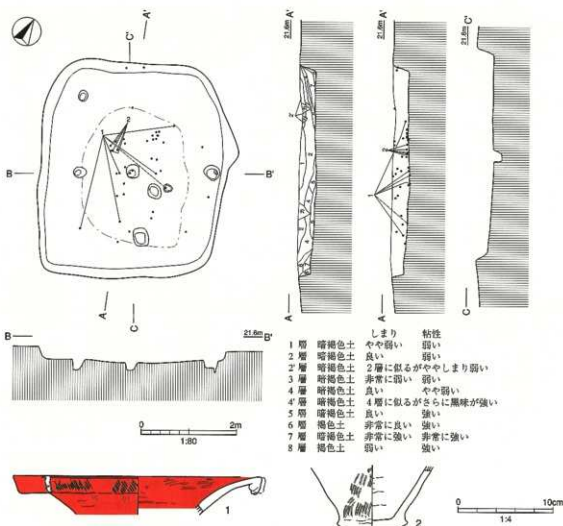


図74 A148

表43 A148遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	(260)×-(35) 複合口縁 外面 RL単条縄文施文後棒状浮文。ヘラ磨き2個1組。1単位残存(1 個欠損)。下端に押圧。頸部ヘラ磨き。	橙褐色	砂粒 雲母多含	口縁片	赤彩
2	弥生 甕	-(74)×(65) 木葉痕 外面 附加条縄文 内面 ナデ	暗褐色	砂粒含	胴部~ 底部片	

A148

検出地区 E8-11G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺 構 隅丸長方形の小型住居跡で、床はロームのやや軟弱な床だが硬化面を中央部に検出。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は検出されなかった。周溝・支柱穴も検出されなかった。

覆土は、色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺 物 床面直上から覆土上層から少量出土。

所 見 炉は検出されていないが、遺物の出土状況、遺構の状況及び覆土の観察から住居跡と判断し、遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系土器と所謂印手系土器が共存する住居跡である。

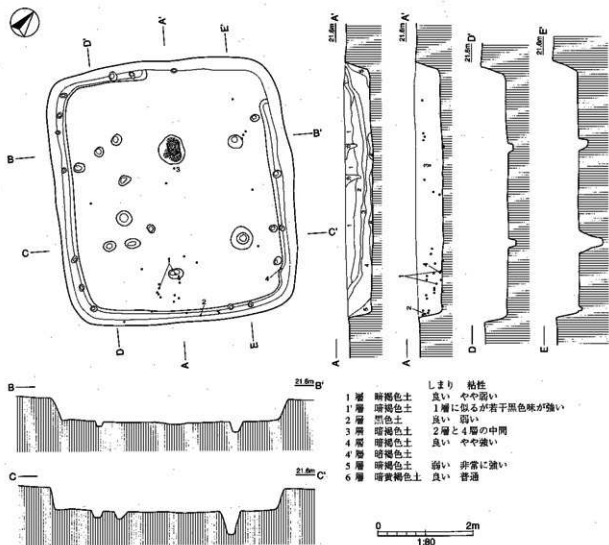


図75 A149

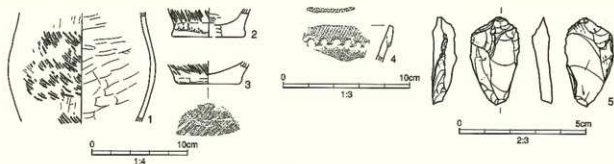


図76 A149(2)

表44 A149遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法量 口径×底径×器高 成 形・調整等 の 特徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	—×—×(115) 最大径(154) 外面 ナデ 附加糸縄文 内面 ヘラナデ	暗褐色	砂粒含	頸部～ 胴部片	内外面スス及び コゲ状付着物
2	弥生 甕	—×(78)×(30) 木葉痕 外面 附加糸縄文 ヘラ削り 内面 ナデ	◎褐 ◎暗褐色	粗砂粒含	底部片	
3	弥生 甕	—×(70)×(24) 木葉痕 外面 附加糸縄文 ヘラ削り 内面 ナデ	暗赤褐色	粗砂粒含	底部片	
4	弥生 甕	—×—×— 口径折り返し 外面 口唇とも附加糸縄文 下端押圧 頸部ナデ 内面 ナデ後縁らにヘラ磨き	暗褐色	砂粒含	口縁片	
5	石器 楔形石器	35×18×7 打面は横一直線の楕状打面 下端の打面の位置は、やや角度がついて いることから、少し捻れて力が入ったものと思われる				チャート

A149

検出地区 F8-23G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺 構 隅丸長方形の中型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で全体にしっかりとしている。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居跡中央からやや北による。周溝は約3/4周する。主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に6層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土中層にかけて少量出土。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

A150

検出地区 F8-33G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺 構 隅丸長方形の小型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で全体にしっかりとしている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で2基検出された。周溝は一部、主柱穴は4本検出された。

覆土は、色調を基本に7層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土中層にかけて少量出土。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

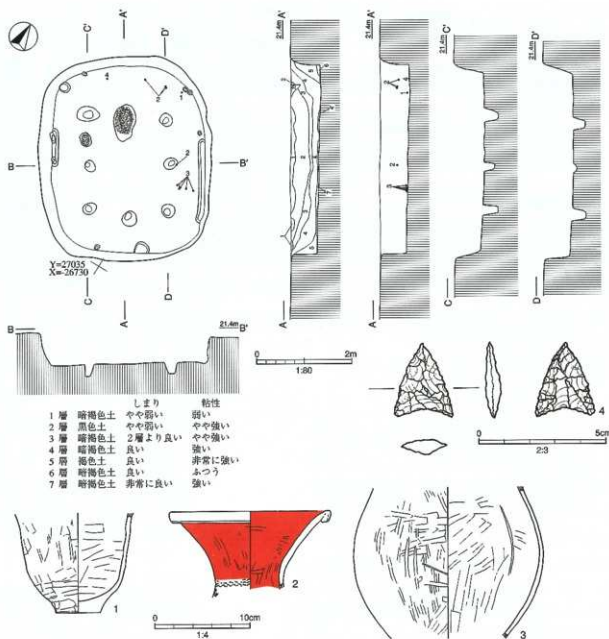
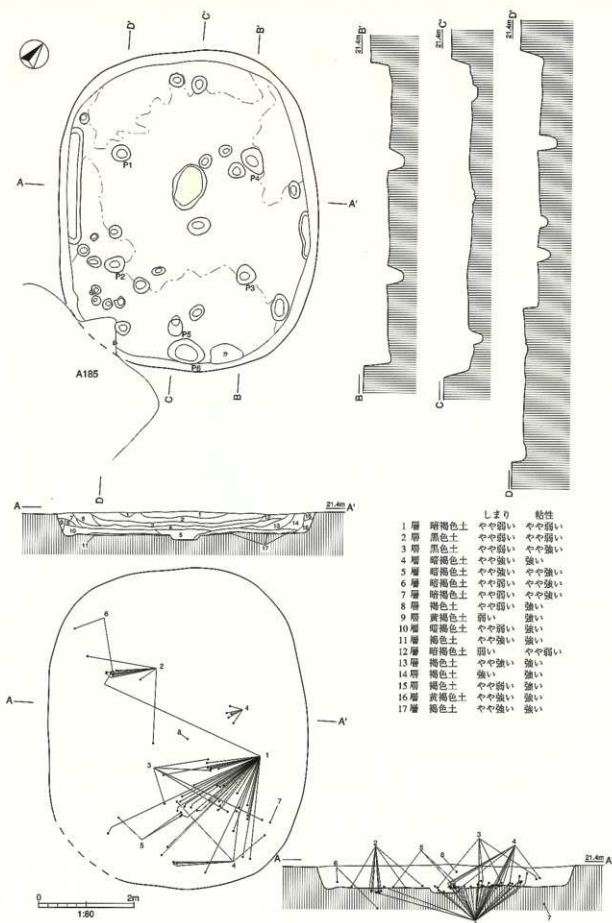


図77 A150

表45 A150遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 小型素	一×46×(104) 胴部上半はつつ形を呈し下半よりすはまる 下端は直線となり小さな底部へつながる 外面 ナデ後一部ヘラ磨き ヘラ削り 内面 ヘラナデ	暗褐色	粗砂粒含	2/3	内面スス付着 外面スス及びコゲ状付着物
2	弥生 甕	170×一×(90) 複合口縁 口縁 磨耗のため不明 頸部 縦ヘラ磨き一部残存 結筋3段か？ 磨耗のためはっきりしないが恐らくLR、RLの波状構成	暗褐色	粗砂粒多 含	口縁～ 頸部片	器面剝離 磨耗著しい 赤彩
3	弥生 甕	一×一×(160) 最大径(200) 球胴状 外面 胴上半 ヘラナデ 下半 荒らなヘラ磨き 内面 ヘラナデ	暗褐色	砂粒	胴部片	内外面スス及び コゲ状付着物
4	石器 石鏃	長軸30×短軸23×厚さ6 重量2.5g 凹基無茎鏃である。比較的大型で厚手の造りである。全面にやや粗い調整が加えられている。			完形	



層	土質	しまり	粘性
1層	暗褐色土	やや弱い	やや弱い
2層	黒色土	やや弱い	やや弱い
3層	黒色土	やや強い	やや強い
4層	暗褐色土	やや強い	強い
5層	暗褐色土	やや弱い	やや強い
6層	暗褐色土	やや弱い	やや強い
7層	暗褐色土	やや弱い	やや強い
8層	褐色土	やや弱い	強い
9層	黄褐色土	弱い	強い
10層	暗褐色土	やや弱い	強い
11層	褐色土	やや強い	強い
12層	暗褐色土	弱い	やや弱い
13層	褐色土	やや強い	強い
14層	褐色土	強い	強い
15層	褐色土	やや弱い	強い
16層	黄褐色土	やや強い	強い
17層	褐色土	やや強い	強い

図78 A151

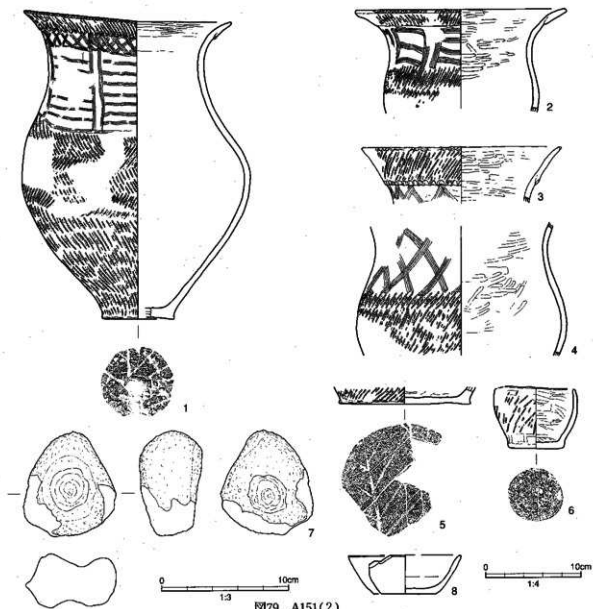


図79 AI51(2)

表46 AI51遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	(220)×(77)×(327) 最大径243 輪横 外面 口唇~口縁部一附加条縄文 下端刻み目 頸部一帯描斜格子文+帯描縦区画充填横走文胴部一附加条縄文 上半羽状構成 内面 ナダ 口縁 ナダ後横位ヘラミガキ 口縁 折り返し口縁・外反	暗褐色	砂粒多	2/3	底部やや上り底脚部上半が影らむ木葉底
2	弥生 甕	(220)××(110) 最大径164 輪横 外面 口唇~口縁部一附加条縄文 頸部一帯描による縦区画 区画内一横走文 胴部一附加条縄文内面 ナダ後横位ヘラミガキ 口縁 折り返し・外反	暗褐色	粗砂粒多	1/4以下	口縁~胴部遺存 外面 コケ状付着物
3	弥生 甕	(208)××(60) 輪横 折り返し口縁・外反 外面 口唇部一押圧 口縁部一附加条縄文 下端一刻み目 頸部一帯描による格子目文 内面 ナダ後横位ヘラミガキ	暗褐色	粗砂粒多	1/4以下	口縁部片遺存 外面スス付着
4	弥生 甕	×××(142) 最大径(220) 輪横 外面 頸部一帯描による格子目文 胴部一附加条縄文 内面 ナダ後一部横位・斜位のヘラミガキ 頸部 ゆるくくびれる 胴部 上半に影らみを持つ	暗褐色	砂粒多	1/4以下	頸部~胴部遺存

5	弥生 壺	一×(140)×(18) 輪積 外面 附加条縄文 内面 ナデ一部横位ヘラミガキ残存 器面の磨耗激しい	明褐色	粗 粗砂粒多	1/4 以下	底部破片遺存 底部 平底 木葉痕
6	弥生 小型鉢	84×58×65 最大径89 外面 口縁上端一ナデ 体部一ナデ後附加条縄文 下端一ヘラケズリによる面取り状に調整がされる 内面 ナデ後横位・斜位のヘラミガキ 底部内面一ナデ口縁 やや内湾	梅	粗 粗砂粒多	3/4	底部 木葉痕
7	石製品 凹石	長さ83×幅73×厚さ50 重さ257.1g おむすび状の踵の体部両面中央に大きな凹みを有する。側縁に粗い敲打痕も認められる事から敲石的な用途も有していたと思われる				花崗岩の一種?
8	土器 坏	(110)×(66)×40 底部回転ヘラケズリ後周縁ヘラケズリ 体部下端ヘラケズリ 内・外面とも器面剥離が著しい	淡褐色	普	1/4	

A151

検出地区 F9-26G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。A185と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

遺 構 小判形の中型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で壁際に硬化面が広がる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。明瞭な火床を持つ。周溝は一部に浅い溝が検出され肩溝幅は約0.34mであった。主柱穴は4本検出されP1～P4である。P5は出入り口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。

覆土は、色調を基本に17層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺 物 床面直上を中心に多量に出土。(8)は覆土上層からの出土で後世の流れ込みによる。

所 見 台地北側に集中している弥生時代の集落とは、小支谷を隔てられ孤立して立地している。第2分冊で報告した、A055・A056・A057及びA058と一群を形成すると思われる。床面直上から頸部に櫛描による縦スリットを施した櫛描文系土器(1)・(2)が出土していることは注目される。また、一群を形成すると思われるA055からも同様に櫛描文系土器が出土していることも注目される。出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。ピットの配置から立て替え或いは、拡張住居の可能性あり。

また、主要ピットの計測値は下記の通りである。

主要ピット計測値一覧

- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| P1 長軸0.4m×短軸0.3m×深さ0.38m | P2 長軸0.42m×短軸0.3m×深さ0.28m |
| P3 長軸0.4m×短軸0.4m×深さ0.28m | P4 長軸0.6m×短軸0.4m×深さ0.38m |
| P5 長軸0.3m×短軸0.3m×深さ0.24m | P6 長軸0.76m×短軸0.5m×深さ一m |

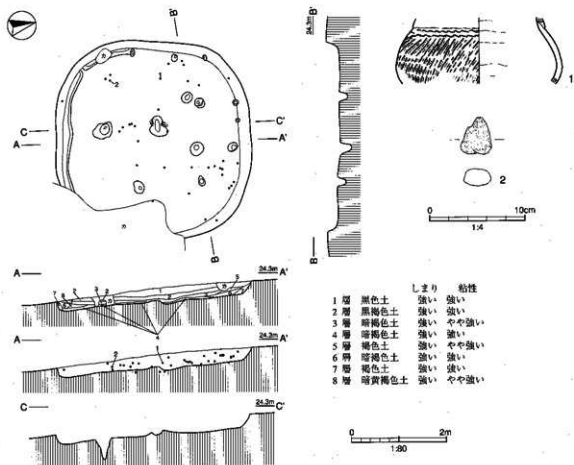


図80 A152

表47 A152遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整号の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	—×—×(70) 最大径—胴部(176) 輪積 外面 頸部—輪積痕 胴部—結節2段→附加糸縄文 内面 ナデ 頸部—輪積痕 胴部—上半が影らむ	暗褐色	砂粒多	1/4 以下	頸部～胴部遺存 外面一部コケ状 付着物
2	石製品	長さ39×幅33×厚さ18 重量5.0g 全体の形状は二等辺三角形に近く、各面に研磨痕を残す				軽石

A152

検出地区 H9-7G。台地南側縁辺部、傾斜がはじまりかかる地点に立地する。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はロームの床でやや軟弱である。壁は斜めに立ち上がる。炬は地床炉で住居中央からやや西による。浅い周溝が一部検出された。主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に8層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。軽石が出土。砥石として使用したものと考えられる。

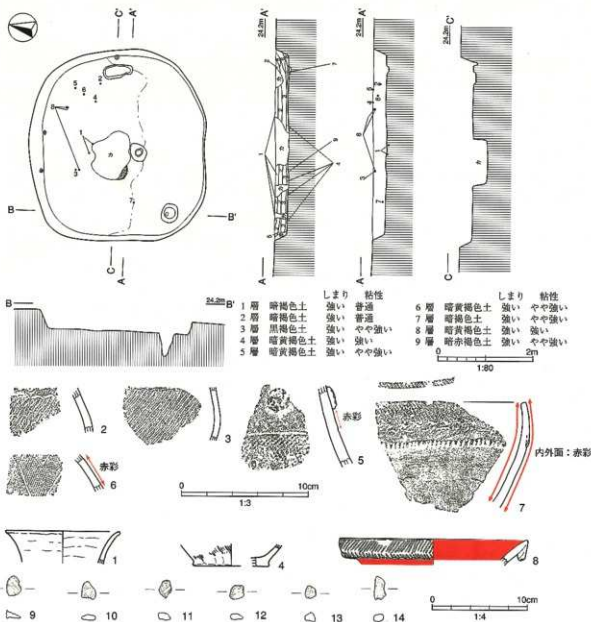


図81 A153

表48 A153遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 小型甕	(120)××(33) 輪横 外面 ナテ コゲ状付着物 内面 ナテ 口縁-外反	暗褐	砂粒少	口縁部 破片	
2	弥生 甕	一×××一 輪横 外面 結節2段+附加糸縄文 コゲ状付着物 内面 ナテ後横位ヘラミガキ	褐	砂粒多	胴部 破片	
3	弥生 甕	一×××一 輪横 外面 結節1段+附加糸縄文 スス付着 内面 ナテ後横位・斜位のヘラミガキ	暗褐	粗砂粒多	胴部 破片	
4	弥生 甕	一×(80)×(23) 輪横 外面 附加糸縄文 下端ハラケズリ 内面 ナテ	褐	粗砂粒多	1/4 以下	底部破片遺存

5	弥生 壺	-X-X- 輪積 外面 ヘラミガキを施した後に円形刺突を加えた円形浮文を貼付け、横位の沈線でされた区画内に羽状縄文を充填 内面 器面剥離のため不明	橙褐色	粗 粗砂粒多	頸部~ 胴部 破片	赤彩
6	弥生 壺	-X-X- 輪積 外面 沈線による山形文区画 区画内-RL単筋縄文 内面 器面剥離のため不明	褐色	砂粒	胴部 破片	外面赤彩
7	弥生 高坏?	-X-X- 輪積 外面 口唇上- RL単筋縄文 口縁部- LR 単筋縄文→結節2段→LR単筋縄文の羽状構成をとり、下端に刻み目 胴部-ナデ後横位・縦位のヘラミガキ 内面 ナデ後横位・斜位のヘラミガキ	橙褐色	粗砂粒 雲母多	口縁部 破片	高坏か鉢 赤彩
8	弥生 壺	(200)X-X<27> 輪積 外面 複合部- LR+RLの羽状縄文 下層押圧 頸部-縦位ヘラミガキ 内面 横位ヘラミガキ 口縁-複合口縁	橙褐色	粗砂粒 黒雲母多	1/4 以下	口縁部破片遺存 赤彩
9	石製品	長さ21×幅15×厚さ9 重量0.5g 一部が残存するだけであり、全体の形状・用途などは不明				軽石
10	石製品	長さ19×幅15×厚さ6 重量0.2g 一部が残存するだけであり、全体の形状・用途などは不明				軽石
11	石製品	長さ19×幅13×厚さ8 重量0.5g 一部が残存するだけであり、全体の形状・用途などは不明				軽石
12	石製品	長さ15×幅16×厚さ6 重量0.3g 一部が残存するだけであり、全体の形状・用途などは不明				軽石
13	石製品	長さ13×幅11×厚さ10 重量0.3g 一部が残存するだけであり、全体の形状・用途などは不明				軽石
14	石製品	長さ25×幅13×厚さ8 重量0.4g ごく一部が残存するだけであり、全体の形状・用途などは不明				軽石

A153

検出地区 H9-27G。台地南側縁部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸長方形の小型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で谷側の床はやや軟弱である。壁は斜めに立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや西による。周溝は検出されなかった。主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に9層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。上層から中層にかけての出土が多い。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系土器を主体に出土する住居跡で軽石が多く出土。砥石として使用したのと考えられる。

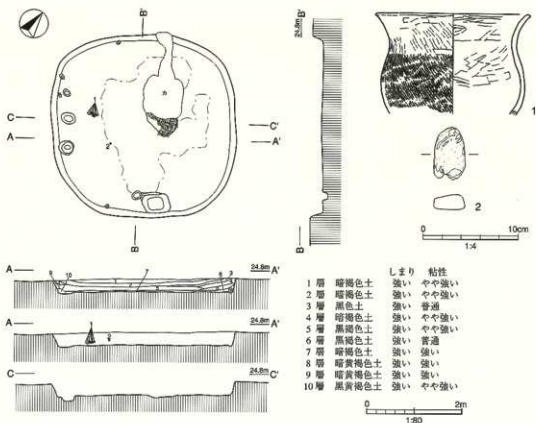


図82 A154

表49 A154遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	(160)×ー×(106) 最大径(152) 輪襖 外面 口縁~頸部-ナア 後斜位ヘラミガキ 胴部-附加糸縄文 コゲ状付着物 内面 ナア後一部横位ヘラミガキ 口縁-外反 頸部-くびれる		暗褐	砂粒多	1/4 以下	口縁~胴部遺存
2	石製品	長さ56×幅33×厚さ16 重量9.3g 一端を欠くが全体に長楕円形を呈しており、全面に研磨痕が残る					軽石

A154

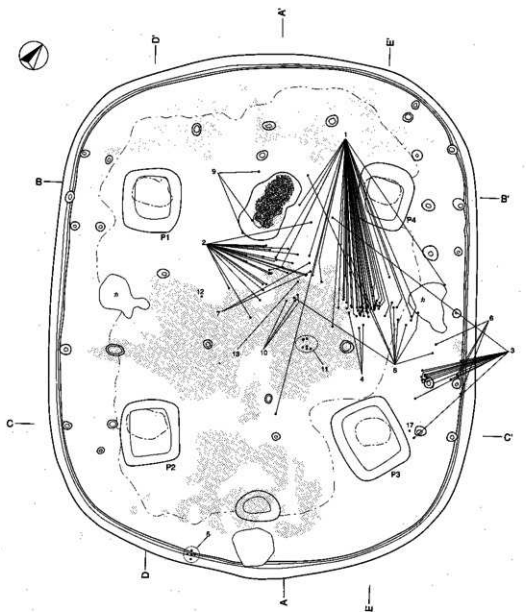
検出地区 H9-25G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はローンを踏み固めた床で住居中央に硬化面が広範囲に検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。周溝は検出されず主柱穴は不明である。

覆土は、色調を基本に10層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

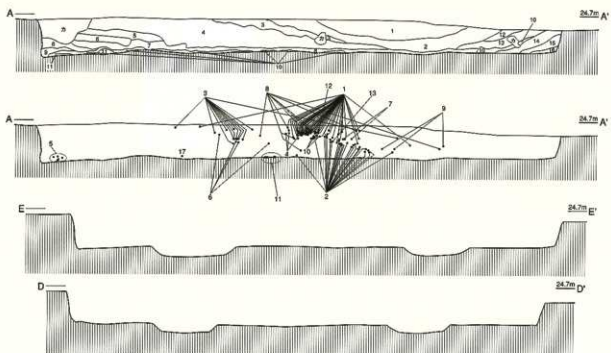
遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。中層からの出土が多い。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。所謂、印手系土器を出土する住居跡で、A152・A153同様、砥石として使用されたと考えられる軽石が出土している。



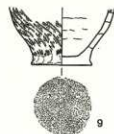
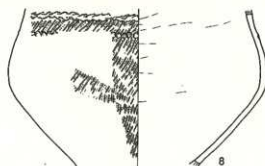
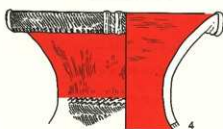
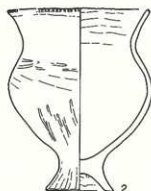
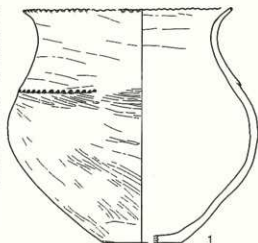
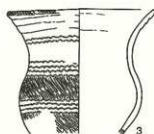
0 2m
1:80

图83 A155



	しまり	粘性
1層	黒色土	強い やや強い
2層	暗褐色土	強い やや強い
3層	黄褐色土	強い やや強い
4層	暗褐色土	強い やや強い
5層	黄褐色土	強い やや強い
6層	暗褐色土	非常に強い やや強い
7層	褐色土	非常に強い やや強い
8層	黒褐色土	強い 強い
9層	暗褐色土	強い やや強い
10層	黒赤褐色土	強い やや強い
11層	褐色土	非常に強い やや強い
12層	黄褐色土	強い やや強い
13層	褐色土	強い やや強い
14層	暗褐色土	非常に強い やや強い
15層	黒褐色土	強い やや強い
16層	暗褐色土	強い やや強い

0 2m
1:80



0 100cm
1:4

図84 A155(2)

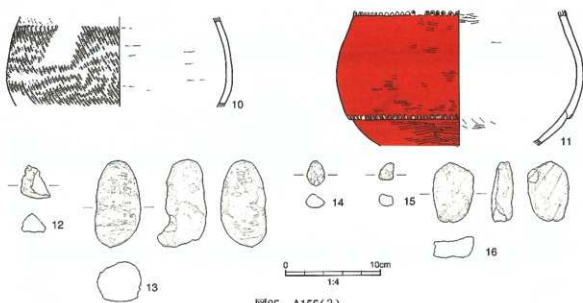


図85 A155(3)

表50 A155遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	220×(82)×250 最大径263 輪襷 外面 口唇部→押上 口縁 →胴上半→輪襷痕を利用した段に縄文原体の押圧を巡らす 胴中位～下 半→ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ 口縁→外反 上半に輪襷痕を利用した段を持つ	褐	粗 粗砂粒多	略完形	黒斑有り 内外面スス付着
2	弥生 台付甕	150×72×193 最大径151 輪襷 外面 口唇部→刻み目 口縁 部→一部輪襷痕を残す 胴→胴上半→ナデ後一部横位、斜位のヘラミガ キ 胴下半→縦位ナデ後一部縦位ヘラミガキ 脚部→縦位ナデ 内面 胴内面→ヘラケズリ 口縁→外縁 頸部→ゆるやかな「く」の字状 胴部→やや上半に膨らみを持つ	橙褐	砂粒少	略完形	黒斑有り 外面スス付着
3	弥生 甕	(155)×-(×)(133) 輪襷 外面 口唇部→附加糸縄文 口縁部→輪襷痕 3段 頸部→結節2段→結節4段 胴部→附加糸縄文→結節4段→附加 糸縄文 一部スス付着 内面 ナデ 口縁→外反	暗褐	粗 粗砂粒多	2/3	黒斑有り 胴部→上半に膨 らみを持つ
4	弥生 甕	220×-(×)(125) 輪襷 外面 複合部→RL単節縄文施文後捺状浮文 2本1組(残存2カ所) 下層→刻み目 頸部→ナデ後縦位ヘラミガキ 胴部→結節2段→RL単節縄文 内面 ナデ後横位ヘラミガキ (全体に磨耗が激しく残存は一部) 口縁→複合口縁	明赤褐	粗 粗砂粒多	1/4 以下	赤影 口縁→胴
5	弥生 甕	-×60×(80) 輪襷 外面 ナデ 内面 ナデ 底部 平底	明橙褐	砂粒多	1/4 胴部片 →底部	外面コゲ状付着
6	弥生 甕	-×66×(80) 輪襷 外面 ナデ後一部縦位ヘラミガキ 下層→ヘラケズリ 内面 ナデ	暗橙褐	砂粒・ 小石散	1/4 胴→ 底部	外面一部スス付 着
7	弥生 甕	-×(70)×(34) 輪襷 外面 附加糸縄文 下層→ナデ 内面 ナデ 底部 平底	褐	粗砂粒多	1/4	胴部破片→底部 遺存
8	弥生 甕	-×-(×)(167) 最大径(272) 輪襷 外面 結節2段→附加糸縄文→円形刺突文→附加糸縄文 内面 ナデ 胴部中位が膨らむ 底部に向けて急傾斜ですぼまる	橙褐	砂粒多	1/4 胴部 破片	外面コゲ状付着 物
9	弥生 甕	-×64×(60) 輪襷 内外面一部スス付着 外面 附加糸縄文 下層→ヘラケズリ 内面 ナデ 底部 平底・木葉痕	暗褐	砂粒多	1/4 以下	胴破片→底部遺 存
10	弥生 甕	-×-(×)(94) 推定240 輪襷 外面 附加糸縄文 内面 ナデ	暗褐	砂粒	1/4 胴部 破片	コゲ状付着物

11	弥生 壺	一×一×(143) 最大径(260) 輪縁 外面 縄文原体の押圧→ナダ後 横位ヘラミガキ→下端に刻みを施した段を有する ナダ後横位ヘラミガ キ 胴部下半に段を持つ コク状付着物 内面 ナダ後横位ヘラミガ キと思われるが器面の剝離が著しく残存はごく一部	検出	粗砂粒多	1/4 以下	赤彩 胴部破片遺存
12	石製品 軽石	長さ35×幅31×厚さ20 重量5.5g 不定形の軽石残片 明瞭な加工痕はみられない				
13	石製品 軽石	長さ88×幅46×厚さ43 重量45g 一面に線条痕があり、砥石としての使用が考えられる。				
14	石製品 砥石	長さ27×幅19×厚さ15 重量1.4g 小さな卵状を呈する。一部に研磨痕を残す				
15	石製品 軽石	長さ17×幅15×厚さ12 重量1.4g 一部が残存するだけであり全体の形状。 砥石か？				
16	石製品 砥石	長さ63×幅43×厚さ22 重量9.8g 全体に長楕円形を呈する。一面に線条痕が残される				

A155

検出地区 H9-43G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。周辺の弥生時代の住居跡としてA156・A078（第2分冊報告）等がある。

遺 構 小判形の大型住居跡で、床はロームを踏み固めたしっかりとした床で中央部に硬化面が広がる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。明瞭な火床を検出している。周溝は全周し周溝幅は0.14mであった。主柱穴は調査時に幾分掘りすぎてしまったが、4本検出された。（破線は床面検出時における柱穴範囲である。）

覆土は、色調を基本に16層に分層。床面直上に焼土・炭化物を多量に検出した。人為的な埋戻しが想定される。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて土器を中心に多量に出土しているが、床面直上からの出土が少ない。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と所謂、印手系土器が共存する住居跡で焼失住居である。遺物の出土状況と覆土の堆積状況から住居内の遺物を持ち去った後、住居を燃やし、埋戻したと考えられる。規模的には本遺跡のなかでも最大級のクラスで土器の出土量も多く器種構成も豊富である。研磨痕・削痕のある軽石が出土しているが、砥石としての用途が考えられ金属器の存在を想起させる。集落内でも中心的な位置を示していた住居跡であろう。同様の住居跡にA156及び第2分冊で報告したA080・A081が挙げられる。

A156

検出地区 H9-54G。台地台地南側縁辺部、平坦面に位置する。A156と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。周辺の弥生時代の住居跡として、A155・A158（第2分冊報告）等がある。

遺 構 小判形の大型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で壁際に硬化面が広がり、中央部はやや軟弱である。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。炉は攪乱により大部分が破壊されていたが、地床炉で底部には火床が検出された。住居跡中央からやや北による。周溝は2条検出された。外側の周溝は全周し、幅は約0.1mであった。内側の周溝は約1/2周し、幅は約0.1mであった。主柱穴は、調査時に幾分掘りすぎてしまったが、4本検出された。（破線は床面検出時における柱痕範囲である。）

覆土は、色調を基本に19層に分層。焼土層を検出。人為的な埋戻しが想定される。

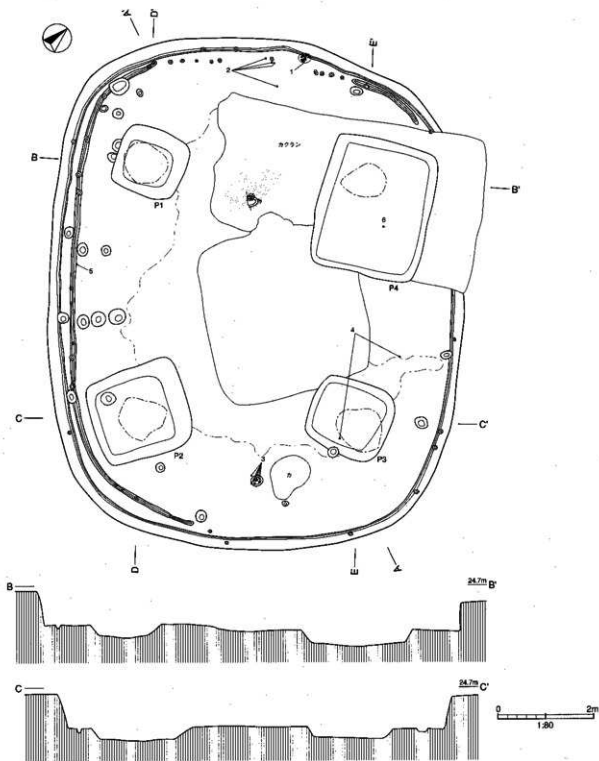


図86 A156

遺物 床面直上から覆土層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。規模的には本遺跡のなかでも最大級のクラスで、所謂、印手系土器を主体に出土する住居跡である。周溝及び壁柱穴の配置等から拉張住居と考えられる。



	しまり	粘性
A 1層	褐色土	強い やや弱い
A 2層	黒色土	強い やや強い
A 3層	黒褐色土	強い やや強い
A 4層	黒褐色土	強い やや強い
A 5層	暗褐色土	強い やや強い
A 6層	暗黄褐色土	強い やや強い
A 7層	暗黄褐色土	強い 強い
A 8層	暗褐色土	強い やや強い
A 9層	暗黄褐色土	強い やや強い
A 10層	暗黄褐色土	強い やや強い
A 11層	暗褐色土	強い やや強い
A 12層	褐色土	強い やや強い
A 13層	黒褐色土	強い やや強い
A 14層	暗褐色土	強い やや強い
A 15層	褐色土	強い やや強い
A 16層	暗黄褐色土	強い 強い
A 17層	褐色土	強い やや強い
A 18層	褐色土	強い やや強い
A 19層	暗褐色土	強い 強い

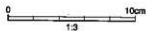
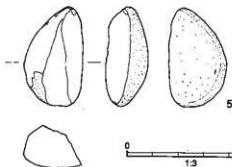
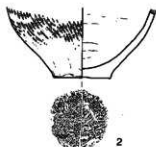
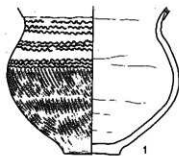
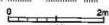


図87 A156(2)

表51 A156遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	一×59×(156) 最大径182 輪積 外面 □縁下縁に輪積痕 頸一刷 上半一結節3段→ナデ一結節3段→ナデ一結節3段 胴中～下半一附加 条縄文 下端ヘラケズリ 内面 ナデ □縁一輪積痕を残す 胴部中に彫らみを持つ 底部 ヘラケズリによる凸凹有り	橙褐色	砂粒少	2/3 □縁部 欠損	黒斑有り 内外面スス付着
2	弥生 甕	一×60×(74) 外面 附加条縄文 下端一ナデ 内面 ナデ 底部 木葉痕	橙褐色	砂粒少	1/4 胴部片 ～底部	黒斑有り
3	弥生 甕	一×一×(103) 推定160 輪積 外面 ナデ 結節3段→附加条縄文 内面 ナデ	暗褐色	砂粒多	1/4 頸部片 ～胴部	外面一部コゲ状 付着物
4	弥生 甕	一×(70)×(21) 外面 無節縄文 下端ヘラケズリ 内面 ナデ後一ヘラミガキ 底部 木葉痕	暗褐色	砂粒多	1/4 底部 破片	
5	石製品 磨石	長さ79×幅46×厚さ34 重量132.9g 半分に割れた磨石の割れ面にも良好な研磨痕が残されており、二次なる 利用が考えられる				砂岩(凝灰質?)
6	土師器 甕	(220)×一×(61) □縁上縁立ち上がり内屈する 頸部「く」の字状 内面 □縁・頸部ナデ 胴部上半タキ? 外面 ナデ	茶褐色	砂粒含	□縁片	□縁内外面 スス付着

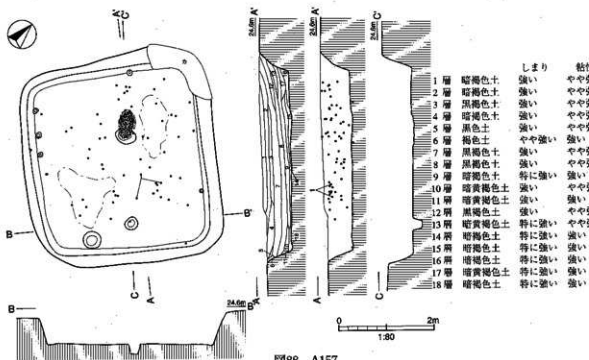


図88 A157

A157

検出地区 H9-46G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はローンを踏み固めた床で部分的に硬化面を検出した。壁は斜めに直線的に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。周溝は検出されなかった。主柱穴も不明である。

覆土は、色調を基本に18層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

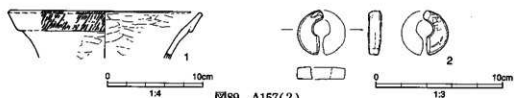


図89 A157(2)

表52 A157遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	(200)×—×(50) 外面 口径～口縁部～附加条縄文 頸部～ナデ 内面 ナデ 口縁～折り返し・外反	褐	粗砂粒多	1/4 口縁片 ～頸部	外面ス付着
2	土製品 耳飾	長径(37)×孔径(13)×10 半分ほどを欠くカラム形に近い块状耳飾。厚手の作りであり一部にはミガキ調整も加えられる				土製块状耳飾

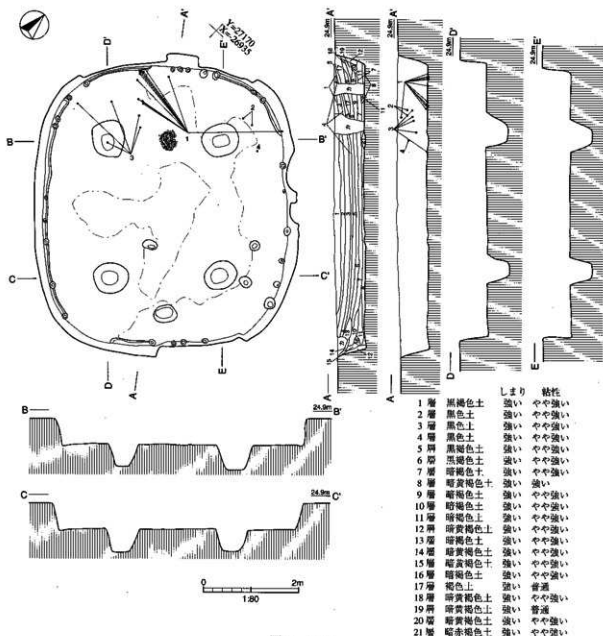


図90 A158

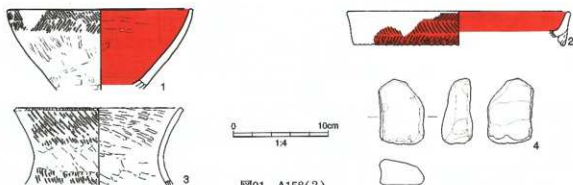


図91 A158(2)

表53 A158遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生鉢	(195)×-(×)86 輪横 口縁-RL+LRの羽状縄文 上端でやや立ち上がる 外面 胴部(体部)-ナデ後縦位ヘラミガキ 器面の磨耗著しい 内面 ナデ後ヘラミガキ 器面の剥離・磨耗著しく残存はごく一部 残存部に赤彩痕	口径-RL+LRの羽状縄文	橙褐色	粗粒砂粒・雲母多	2/3	赤彩
2	弥生壺	(234)×-(×)35 輪横 口縁-複合 外面 複合部-LR+RL+LRの羽状縄文 下端一縄文原体の押圧 内面 ナデ後縦位ヘラミガキと思われるが、器面の剥離が著しく残存はごく一部	複合部-LR+RL+LRの羽状縄文	橙褐色	砂粒少 種小礫微	1/4 以下 口縁	赤彩
3	弥生甕	(180)×-(×)82 輪横 口縁-外反 頸部-ゆるやかな「く」の字状 外面 口唇~口縁部-附加条縄文 頸部-ナデ 胴部-附加条縄文 内面 口縁部-ナデ後縦位ヘラミガキ 胴位-ナデ	口径-外反	明赤褐色	粗砂粒多 小石微	1/4 以下	口縁部破片遺存
4	石製品 砥石	長さ74×幅48×厚さ33 重量125g 両面及び側面の一部に磨痕が残されており、砥石的な用途が考えられる					砂岩

A158

検出地区 H9-74G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 小判形の中型住居跡で、床はローンを踏み固めた床で住居東側において硬化面を比較的広範囲に検出した。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。周溝は一部、主柱穴は4本検出された。

覆土は、色調を基本に21層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

A159

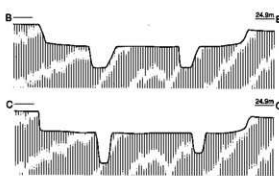
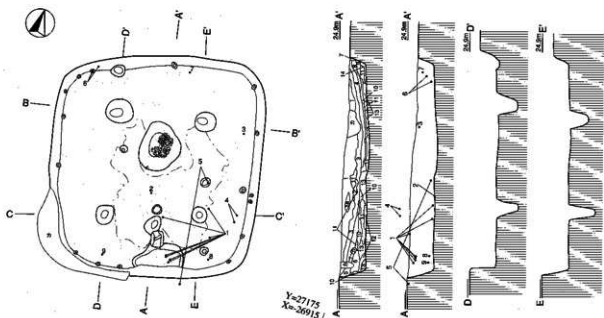
検出地区 H9-72G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 隅丸方形の小型住居跡で、床はローンを踏み固めたしっかりとした床で中央部に硬化面を広範囲に検出した。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。周溝は検出されなかった。主柱穴は4本検出された。

覆土は、色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土下層から上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。



しまり 粘性

1層	褐色土	強い	やや強い
1a層	黒褐色土	強い	やや強い
2層	赤黒褐色土	強い	やや強い
3層	黒色土	強い	やや強い
4層	黒色土	強い	やや強い
5層	黒黄褐色土	強い	強い
6層	黒褐色土	強い	やや強い
7層	黄褐色土	強い	やや強い
8層	黒黄褐色土	強い	やや強い
9層	黒黄褐色土	強い	強い
10層	黒褐色土	強い	やや強い
11層	時赤褐色土	強い	やや強い
12層	黒褐色土	強い	やや強い
13層	黒黄褐色土	強い	やや強い
14層	黒褐色土	強い	やや強い

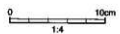
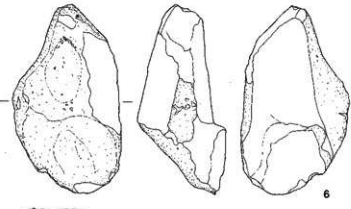
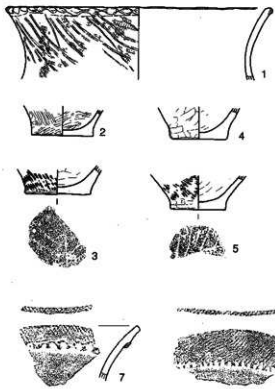
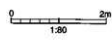


図92 A159

表54 A159遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文? 深鉢	(280)×-(77) 輪襷 口縁-外反 頸部-くびれる 外面 口縁部-経縄文 頸部-粗いLR単筋縄文を施した後斜位に沈線を加える	明橙褐色	粗砂粒多	1/4 以下 口縁	
2	弥生 甕	-×(65)×(31) 輪襷 外面 ヘラケズリ後縦位・斜位のヘラミガキ 内面 ナデ後一部横位ヘラミガキ 底部 平底	明橙褐色	砂粒多	1/4 以下	胴~底部遺存
3	弥生 甕	-×(69)×(30) 輪襷 外面 撫糸文 内面 ナデ 底部 木葉痕	褐	粗 砂粒多	1/4 以下	胴~底部遺存
4	弥生 甕	-×58×(33) 輪襷 外面 ナデ 内面 ナデ 底部-平底 胎土や器厚などから縄文土器の可能性も考えられる	暗褐色	粗 砂粒多	1/4 以下 底部	
5	弥生 甕	-×(58)×(36) 輪襷 外面 附加糸縄文 下端-ナデ 内面 ナデ 底部 木葉痕	暗褐色	粗 砂粒多	1/4 以下	胴~底部遺存
6	石製品 台石 (砥石)	長さ200×幅115×厚さ94 重量1690g 大形の不整な礫の多くの面に研磨痕が残されている 砥石的な用途が考えられる				砂岩
7	弥生 甕	-×-×- 輪襷 口縁-外反 外面 口唇上-口縁部-附加糸縄文 下端に押圧を加えた隆帯を貼り付ける 頸部-ナデ 内面 ナデ	暗褐色	砂粒少	1/4 以下	口縁部片
8	弥生 甕	-×-×- 輪襷 口縁-折り返し 外面 口唇上-口縁部-無筋縄文 下端に刻み目 頸部-ナデ 内面 ナデ後横位ヘラミガキ	明橙褐色	砂粒少	1/4 以下	口縁部片
9	弥生 甕	-×-×- 輪襷 口縁-強く外反 外面 口唇上-口縁部-無筋縄文 下端に隆帯をひだ状に貼り付ける 頸部に縦位の揚指文が一部認められる 内面 ナデ後横位ヘラミガキ	褐	砂粒多	1/4 以下	口縁部片

A160

検出地区 H9-90G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 小判形の中型住居跡で、床はロームを踏み固めた床で比較的広い硬化面が点在する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。周溝は一部、支柱穴は4本検出された。

覆土は、色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

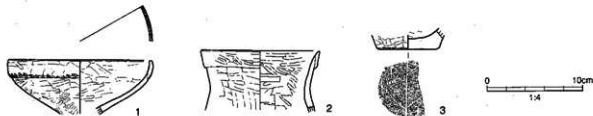


図93 A160

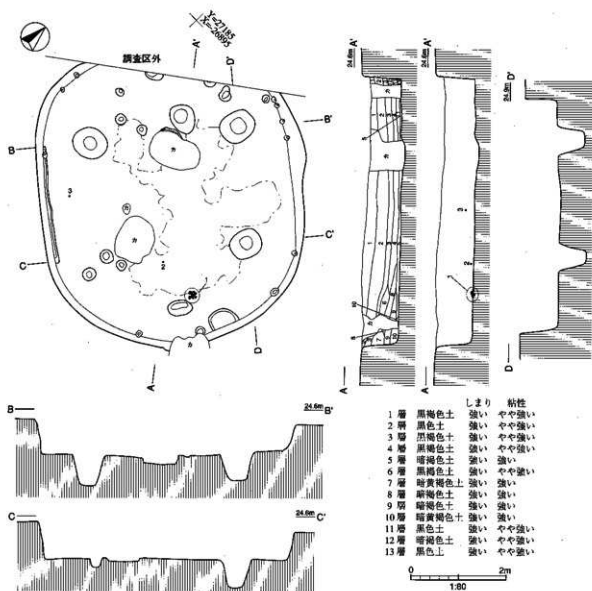


図94 A160(2)

表55 A160遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 高坏	{152}×-×{57} 輪積 口縁-内西・折り返し 外面 口唇上-RL単動縄文 口縁部-ナダ後横位ハラミガキ 下堀に 棒状工具による刻み目 体部-ナダ後不定方向のハラミガキ 内面 ナダ後一部横位ハラミガキ	暗褐色	砂粒多	2/3	内外面スス付着
2	弥生 甕	{124}×-×{65} 輪積 口縁-折り返し 外面 口縁部-ナダ後横位ハラミガキ 頸部-横位・斜位ナダ 胴部-縦位ナダ 内面 ナダ後横位・斜位ハラミガキ	明橙褐色	砂粒	1/4 以下	口縁-胴部遺存
3	弥生 甕	-×{66}×{22} 輪積 外面 ハラケズリ 内面 ナダ 底部 平底・木炭痕	褐色	砂粒多	1/4 以下	底部破片

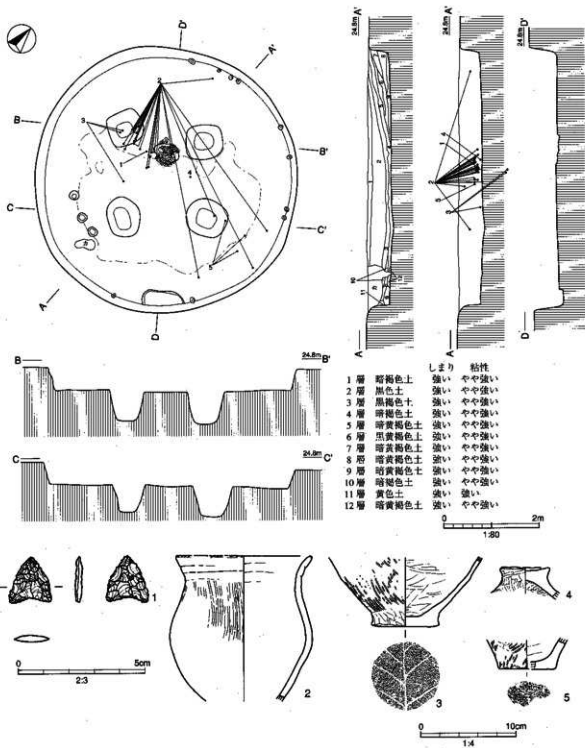


図95 A161

A161

検出地区 H9-91G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 円形の中型住居跡で、床はローンを踏み固めた床で住居中央はやや軟弱である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は地床炉で住居中央からやや北による。周溝は検出されなかった。支柱穴は4本検出された。

覆土は、色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。

表56 A161遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石製品 石鏃	18×17×3 0.88 ほぼ正三角形を呈する無茎鏃 両面の全面に調整が施される。側面はやや外湾する				チャート
2	弥生 鏃	(144)××(154) 最大径150 輪積 外面 口唇部一刻み目 口縁～頸部一輪積痕 胴部～ナデ後縁位ヘラミ ガキ 内面 ナデ 口縁～外反 胴部～ゆるやかな「く」の字状 胴部～長胴で中位に膨らみを持つ	暗褐色	砂粒多	2/3	黒斑有り 外面コゲ状付着物
3	弥生 鏃	×72×(75) 輪積 外面 胴部～附加条縄文 下端～ヘラケズリ 内面 強いナデ 底部や丸みを持つ・木葉痕	暗褐色	粗 粗砂粒多	1/4 以下	外面一部コゲ状 付着物 胴部～底部遺存
4	弥生 鏃(?)	つまみ径52××(3.3) 輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後ヘラミガキ 口縁～つまみ部が広く低い	褐色	砂粒多	1/4 以下	蓋形土器のつま み部分か? つまみ部破片
5	弥生 鏃	×(60)×(33) 輪積 外面 附加条縄文・ナデ 内面 ナデ 底部 木葉痕	暗褐色	砂粒多	1/4 以下	胴部～底部遺存

表57 弥生・古墳時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

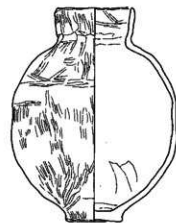
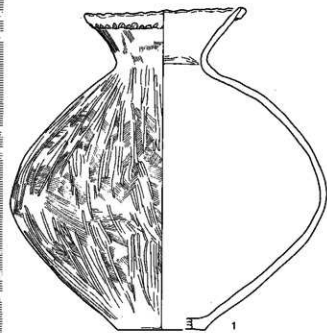
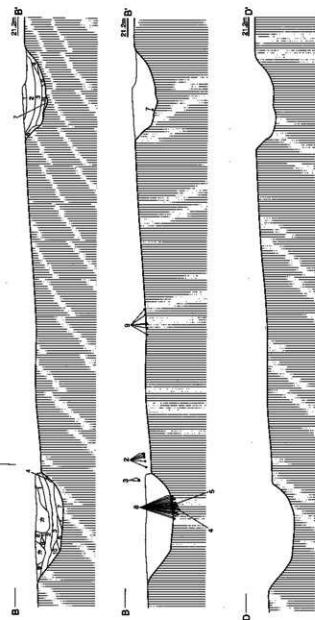
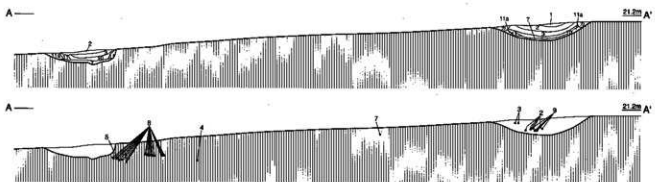
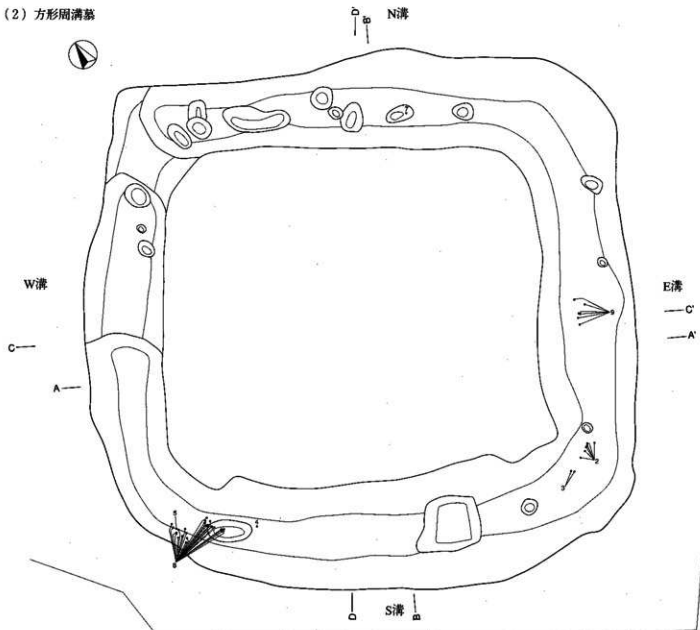
遺構番号	検出 調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A129	G7-54-4	小判形 5.80×5.20×0.50 主軸 N-40°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、硬化面は 壁際で広範囲に検出され、中央はやや軟弱。 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや 北による 周溝 検出されず 主柱穴 4本
		覆土下層～上層にかけて出土。住居跡 南側に集中する傾向がある	色調を基本に25層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A130	G7-48-3	隅丸方形 3.84×3.56×0.40 主軸 N-58°-E	床面 ロームを踏み固めた床で、比較的広 範囲の硬化面が点在する。 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや 北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		覆土下層～中層にかけて多量に出土	色調を基本に8層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A131	F6-80-4	小判形 4.60×3.90×0.35 主軸 N-40°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、硬化面が 部分的に広がる	地床炉 住居中央からやや 北による 周溝 一部あり 周溝幅 0.14m 主柱穴 2本
		床面直上～覆土上層にかけて出土。覆 土中から縄文土層(中期)も少量出土	色調を基本に30層に分層。人為的な埋没 が想定される	
A132	G6-92-1	小判形 7.37×5.70×0.40 主軸 N-40°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、硬化面は 壁際で広範囲に検出される。 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや 北による 周溝 一部あり 周溝幅 0.14m 主柱穴 4本 拡張住居
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出 土	色調を基本に21層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A133	F7-61-3	隅丸台形 4.34×3.76×0.20 主軸 N-42°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや 北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に7層に分層。人為的な埋没 が想定される	
A134	F7-73-4	隅丸長形 4.90×4.34×0.70 主軸 N-34°-W	床面 ロームの床で全体的によく踏み固め られている 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 2基あり 周溝 東コーナーにわず かな溝状の歪みあり 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出 土。中層からの出土が少ない	色調を基本に6層に分層。人為的な埋没 が想定される	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 底溝・備考
A135	F7-84-2	円形 4.76×4.84×0.28 主軸 N-42°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや北西による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に4層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
A136	F7-92-4	隅丸方形 4.15×3.94×0.46 主軸 N-31°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 住居南側に、若干踏み固めた範囲が広がる 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや北による 周溝 一部あり 周溝幅 0.34m 主柱穴 不別
		床面直上～覆土中層にかけて少量出土。壁際に集中して出土する傾向あり	色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋戻しが想定される	
A137	F7-93-1	隅丸長形 5.70×4.40×0.56 主軸 N-57°-W	床面 ロームの床で全体的によく踏み固められている 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや北西による 周溝 一部あり 周溝幅 0.24m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土中層にかけて出土	色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
A138	F7-94-1	隅丸方形 3.70×3.66×0.60 主軸 N-28°-W	床面 ロームの床で、全体的によく踏み固められている 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 住居跡中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に5層に分層。覆土下層に広範囲に焼土を検出 人為的な埋戻し	
A139	F7-94-4	不整円形 3.98×4.40×0.26 主軸 S-49°-W	床面 ロームの床で軟弱である 硬化面を一部で検出 壁 斜めに立ち上がる	地床炉 2基 周溝 検出されず 主柱穴 不明 礎石か?
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に4層に分層	
A140	F7-95-1	隅丸方形 3.48×3.42×- 主軸 N-29°-W	床面 ロームをよく踏み固めた床で、硬化面が一部広がる 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土下層にかけて少量出土	色調を基本に11層に分層。自然堆積による埋戻しが想定される	
A141	F8-3-1	不整円形 3.44×3.40×0.41 主軸 N-75°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居中央からやや北による 火床はわずかに認められるのみ 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋戻しが想定される	
A142	E8-30-4	長丸長方形 9.20×7.14×- 主軸 N-38°-W	床面 ロームをよく踏み固めた床で周辺部がとくに硬い 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居跡中央からやや北による 周溝 検出されず 部分的にわずかに凹んでいる 地点あり 主柱穴 4本 礎石か?
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に21層に分層。自然堆積による埋戻しが想定される。	
A143	E8-40-3	小判型 5.20×4.48×- 主軸 N-37°-W	床面 ロームをよく踏み固めた床で住居中央部に硬化面が比較的広範囲に広がる 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 住居跡中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に14層に分層。覆土中層に焼土層を検出 人為的な埋戻しが想定される	
A144	E8-78-3	長丸長形 5.00×4.48×- 主軸 N-75°-W	床面 ロームをよく踏み固めた床で硬化面が部分的に点在する 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 住居跡中央からやや西による 周溝 一部あり 周溝幅 0.26m 主柱穴 4本
		床面直上から少量出土	色調を基本24層に分層。覆土中層に焼土層を検出 人為的な埋戻しが想定される	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A145	E8-88-2	不整形円形 3.04×2.98×－ 主軸 N-50°-E	床面 ロームをよく踏み固めた床で住居跡中央に硬化面を検出 壁 斜めに立ち上がっていく	池床炉 住居跡中央からやや北東にずれる 周溝 検出されず 主柱穴 なし
		覆土中から少量出土	色調を基本に13層に分層。人為的な埋め戻しが想定される	
A146	E8-97-4	楕円形 5.30×4.52×－ 主軸 N-22°-W	床面 ロームをよく踏み固めた床で住居中央部に硬化面を検出 壁 斜めに直線的に立ち上がる	池床炉 住居跡中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上を中心に少量出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A147	E8-98-2	不整形円形 3.60×3.58×－ 主軸 N-14°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 硬化面を部分的に検出 壁 斜めに立ちよる	池床炉 住居跡中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 なし
		覆土中から少量出土	色調を基本に16層に分層。人為的な埋め戻しが想定される	
A148	E8-11-8	隅丸長方形 4.54×3.92×－ 主軸 N-30°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 硬化面を中央部で検出 壁 斜めに直線的に立ち上がる	池床炉 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に8層に分層。人為的な埋め戻しと考えられる	
A149	F8-23-2	隅丸長方形 5.54×5.04×－ 主軸 N-40°-W	床面 ロームを踏み固めた床で全体的にしっかりとしている 壁 斜めに直線的に多ち上がる	池床炉 住居跡中央からやや北による 周溝 3/4周する 周溝幅 0.3m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて少量出土	色調を基本に6層に分層。おおむね自然堆積による埋没が想定される	
A150	F8-33-2	隅丸長方形 4.32×3.64×－ 主軸 N-32°-W	床面 ロームを踏み固めた床で全体的にしっかりとしている 壁	池床炉 2基あり 周溝 一部あり 周溝幅 0.22m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土中層にかけて少量出土	色調を基本に7層に分層。おおむね自然堆積による埋没が想定される	
A151	F9-26-2	小判形 6.72×5.48×4.60 主軸 N-39°-W	床面 ロームを踏み固めた床で壁際に硬化面が広がる 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床炉 住居中央からやや北にずれる 周溝 一部検出 周溝幅 0.34m 主柱穴 4本
		床面直上を中心に多量に出土	色調を基本に17層に分層。人為的な埋め戻しが想定される	
A152	H9-7-2	隅丸方形 (4.24)×4.12×0.68 主軸 N-76.5°-W	床面 ロームの床でやや軟弱 壁 斜めに立ち上がる	池床が 住居中央からやや西による 良い周溝、一部あり 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて少量出土	色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A153	H9-27-1	隅丸長方形 4.04×3.68×0.54 主軸 N-72°-E	床面 ロームを踏み固めた床 谷間の床はやや軟弱である 壁 斜めに立ち上がる	池床炉 住居中央からやや西による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土 上層～中層にかけて出土が多い	色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A154	H9-25-4	隅丸方形 3.85×3.84×0.28 主軸 N-38°-W	床面 ロームを踏み固めた床で住居中央に硬化面が広範囲に検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床炉 住居中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて出土 中層からの出土が多い	色調を基本に10層に分層。自然堆積による埋没が想定される	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	築造施設・位置 周溝・備考
A155	H9-43-4	小判形 11.1×8.98×0.90 主軸 N-38°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床で中央部に硬化面が広範囲に広がる 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床伊 住居中央からやや北による 周溝 全周する 周溝幅 0.14m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土しているが床面直上からの出土はない	色調を基本に16層に分層。床面直上に焼土を検出 人為的な埋戻しが想定される	
A156	H9-54-4	小判形 10.9×8.84×0.98 主軸 N-54°-W	床面 ロームを踏み固めた床で壁際に硬化面が広がり、中央部はやや軟弱 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床伊 住居中央からやや北による 周溝 二重にめぐる拡張住居 周溝幅 0.1m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	色調を基本に19層に分層。焼土層を検出 人為的な埋戻しが想定される	
A157	H9-46-3	隅丸方形 4.40×4.06×0.74 主軸 N-42°-E	床面 ロームを踏み固めた床で硬化面を部分的に検出 壁 斜めに直線的に立ち上がる	池床伊 住居中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて出土	色調を基本に18層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A158	H9-74-2	小判形 6.18×5.50×0.72 主軸 N-43°-W	床面 ロームを踏み固めた床で住居東側において硬化面を比較的広範囲に検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床伊 住居中央からやや北による 周溝 一部あり 周溝幅 0.1m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	色調を基本に21層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A159	H9-72-1	隅丸方形 4.68×4.44×0.66 主軸 N-14°-W	床面 ロームを踏み固めたしっかりとした床 中央部に硬化面を広範囲に検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床伊 住居跡中央からやや北による 周溝 検出されず 主柱穴 4本
		覆土下層～上層にかけて多量に出土	色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A160	G9-90-4	不整形 (5.90)×5.54×0.90 主軸 N-47°-W	床面 ロームを踏み固めた床で比較的広い硬化面が点在する 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床伊 住居跡中央からやや北による 周溝 一部あり 周溝幅 0.08m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A161	H9-91-2	円形 5.60×5.50×0.56 主軸 N-39°-W	床面 ロームを踏み固めた床 住居中央はやや軟弱である 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	池床伊 住居跡中央からやや北西による 周溝 検出されず 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される	

(2) 方形周溝墓



- | | | |
|------|-------|------------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | 黒色土と暗褐色土が均一に混じる |
| 2層 | 黒色土 | 暗褐色土を少し含むが色調は黒い。ローム微粒含 |
| 3層 | 暗褐色土 | 黒色土と暗褐色土が混じる。ローム粒少含 |
| 4層 | 暗褐色土 | 暗褐色土と少量のロームが混じる。ローム粒少含 |
| 5層 | 黒黄褐色土 | 黒色土とロームが混じる |
| 6層 | 暗褐色土 | 暗褐色土とロームが混じる。ローム微粒と小粒含 |
| 7層 | 暗黄褐色土 | ロームとローム中粒~ブロックが混じる。 |
| 8層 | 暗褐色土 | 黒色土と暗褐色土が均一に混じる。ローム粒少含 |
| 9層 | 黒色土 | 暗褐色土を少し含むが色調は黒い。 |
| 10層 | 黒色土 | 黒色土と暗褐色土と極少量のロームが混じる |
| 11層 | 暗黄褐色土 | ローム中粒~微粒含 |
| 11a層 | 暗黄褐色土 | ロームと少量の暗褐色土が混じる |
| | | ロームが主体の上 |



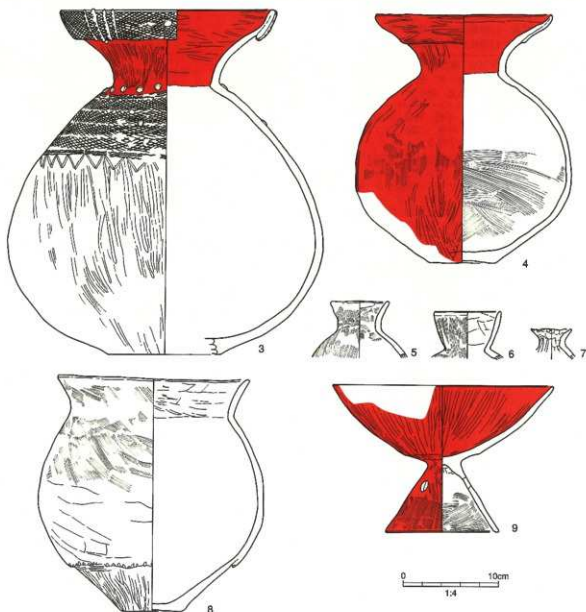


図97 C015(2)

表58 C015遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	170×(92)×343 複合口縁 胴部そろばん玉状 口縁 ヘラ磨きか？ 下端押圧 頸部 ハケ状工具による縦ナデ後一部ヘラ磨き 胴部 ハケ 状工具による斜め横のヘラ磨き後縁部に縦ヘラ磨き 胴部下端 ハケ状 工具による縦ナデ後縦ヘラ磨き	暗橙褐色	砂粒 橙色粒含	略定形	全体に器面の剥 離
2	弥生 壺	84×60×225 直口縁 空な作り 底部モミガラ痕？ 外面 全体にヘラ削り後、口縁～頸部縦ヘラ磨き、胴部縦横ヘラ磨き 内面 口縁～頸部ナデ後横ヘラ磨き 胴部ヘラナデヘラ削り	暗橙褐色	砂粒白色 粒含	4/5	黒斑有
3	弥生 壺	226×120×364 最大径330 複合口縁 胴部下膨れ 口縁 網目状捺 赤文施文後上面にヘラ状工具による刻みを加えた。棒状貼付4本一組を 4カ所、間に円形浮文配座(残存3個)。頸部 縦ヘラ磨き 胴部との境 に円形浮文17個めぐらす。胴部 結節3段→網目状捺赤文施文後円形浮 文貼付(残存2個)→結節3段→沈線による山形文→縦ヘラ磨き 内面 横ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 白色粒含	4/5	赤彩
4	弥生 壺	(186)×72×263 口縁丸みを帯びやや内湾気味に立ち上がる 球胴状 外面 口縁横ヘラ磨き 頸部縦ヘラ磨き 胴部上半 縦、斜めのハケ後 粗いヘラ磨き 下半ヘラ削り後縦ヘラ磨き 内面 口縁～頸部横ヘラ磨 き 胴部上半 ヘラナデ 下半斜位のハケ	橙褐色	砂粒 白色粒含		黒斑有 赤彩 スス付着

5	弥生 壺	62×-×(59) 直口縁 外面 口縁横ナデ 頸部縦ハケ 胴部上半縦ハケ 内面 口縁横ナデ 頸部横斜めのハケ 胴部上半ヘラ削り	暗赤褐 青	砂粒 白色粒含		
6	弥生 小型壺	70×-×(51) 直口縁 外面 口縁 横ナデ 頸部~胴部 下半縦ハケ 内面 口縁~頸部 横ナデ 胴部上半 ヘラ削り	暗赤褐 青	砂粒 白色粒含	口縁~ 頸部片	
7	弥生 ミニチュ ア	42×-×(32) 手捏 外面 口縁指により薄く広げられる 頸部指に よるナデ調整 内面 口縁 指によるナデ 頸部 粘土の巻き上げ痕? あまり調整されず残る	暗褐 青	砂粒 白色粒含	口縁片	
8	弥生 壺	200×68×250 最大径235 素口縁 口唇部平面作出 頸部 縦やかな 「く」の字状 胴下半に段をもつ 球脚状 平底 外面 口縁~胴上 半 ハケ状工具でのナデ調整か? 胴下半 ヘラナデ細み目を有する段 をもつ 胴下端 縦ヘラ磨き 内面 口縁ヘラナデ 頸部ナデ	橙褐 青	砂粒含	2/3	
9	土師器 高坏	231×118×157 坏部下端に稜を有する 脚部「ハ」の字状 透し孔2 カ所 外面 坏部 斜めのハケ後縦ヘラ磨き 下通にヘラ磨き 脚部 縦ハケ後疎らに縦ヘラ磨き 内面 坏部 ナデ後縦ヘラ磨き 脚部 接 合部ヘラ削り 斜めのハケ 下溝横ハケ	橙褐 青	砂粒含	略丸形	赤彩 黒斑有

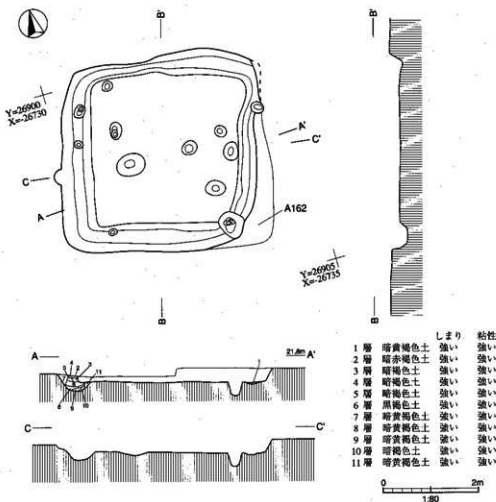


図98 C016

C015

検出地区 F6-39G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 規模13.52m×14.16m、主軸方位N-35°-E。四隅に陸橋部を持たず、周溝が全周するタイプの方形周溝墓と考えられる。主体部は検出されなかった。周溝の状況はE溝・幅2.60m深さ0.45m、S溝・幅2.7m深さ0.7m、W溝・幅1.99m深さ0.4m、N溝・幅1.34m深さ0.7mであった。北コーナー部分の溝の深さが若干浅く、約0.2mである。周溝の溝底は、ロームを掘り込みほぼ平坦である。小穴を各溝数基ずつ検出している。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に11層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 底面直上から覆土中層にかけて比較的多量に出土。北コーナー以外のコーナー部分での出土が目立つ。

所見 北コーナー部分の溝の深さが若干浅くなっていることが、墓道に関連するものか、墳丘の突出部に関連するものかは不明である。また周溝の底部から検出された小穴が、主体部等の施設に伴うものかどうかは現段階では不明である。出土遺物から弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓と考えられる。同様の遺構としてC001（第1分冊報告）がある。

C016

検出地区 F7-4G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。A162と重複関係にあるが、本遺構の方が古い。

遺構 規模4.03m×4.12m、主軸方位N-14°-E。四隅に陸橋部を持たず、周溝が全周するタイプで、主体部は検出されなかった。周溝の状況はE溝・幅0.41m深さ0.32m、S溝・幅0.59m深さ0.33m、W溝・幅0.69m深さ0.33m、N溝・幅0.37m深さ0.24mであった。周溝底部は、ロームの溝底でほぼ平坦。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に11層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中にかけて少量出土。

所見 主体部が検出されていないことと規模・形態から方形周溝墓としての確証を欠く。住居跡の周溝と考えると、周溝幅が広すぎる感がある。ここでは、出土遺物から弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝状遺構と判断した。C002・C003（第1分冊報告）が類例としてあげられるかもしれない。

表59 弥生・古墳時代方形周溝墓

(単位m)

	規模	方位	周溝・E溝	周溝・S溝	周溝・W溝	周溝・N溝
C015	13.52×14.16	N-80°-E	-×2.60×0.45	-×2.70×0.7	-×1.99×0.40	-×1.43×0.7
	主体部	無し				
C016	4.03×4.12	N-14°-E	-×0.41×0.32	-×0.59×0.33	-×0.69×0.33	-×0.37×0.24
	主体部	無し				

(3) 遺構

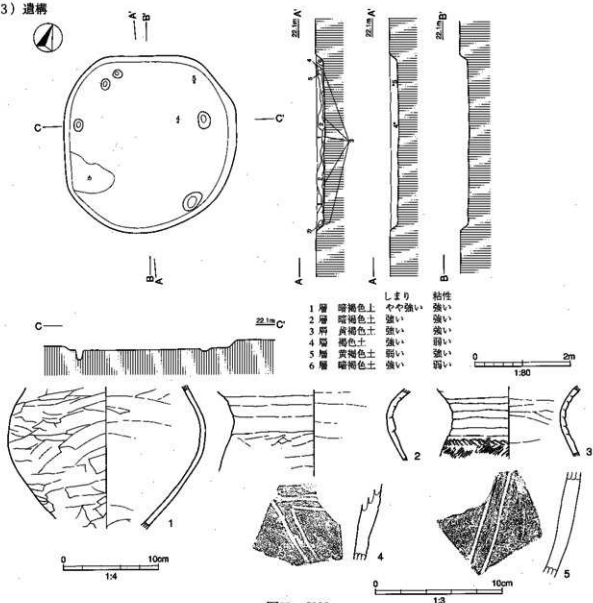


図99 I008

表60 I008遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調	胎土	遺存	備考
1	弥生 土付甕	-X-X(153) 内外面ヘラナア		橙褐色	砂粒小含	2/3	
2	弥生 甕	-X-X(91) 輪轆み表4段 内外面ヘラナア		明褐色	小砂多含	頸部片	
3	弥生 甕	-X-X(74) 輪轆み(残存7段) 結節1段→附加条縄文 内面 ナア		暗橙褐色	砂粒多含	頸部片	
4	縄文 深鉢	-X-X- 平行沈線による幾何学状モチーフ		暗茶褐色	粗砂粒多含	頸部片	堀之内式
5	縄文 深鉢	-X-X- 縦位の平行沈線文		橙褐色	粗砂粒多含	頸部片	堀之内式

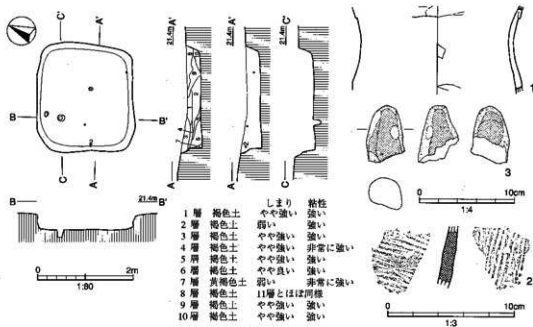


図100 I009

表61 I009遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成 形・調整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	-X-X-(93) 外面 口縁 器面の剥離著しい 頸部 輪積み痕浅存1段	暗橙褐色	小石 粗砂粒 多含	頸部~ 胴部片	
2	縄文 深鉢	-X-X- 外面斜位 内面縦位の糸状文	暗赤褐色	織線含	胴部片	
3	石器 砥石	長軸61×短軸40×厚さ34 重量94.2g 棒状の礫の一端が残されているのみ 4面に磨痕があり一部を除いてそれほど明確ではない 火熱のため赤化している			断片	

I008

検出地区 F7-82-1G。

遺 構 不整形の遺構。床面はロームで軟弱で壁は斜めに立ち上がり、掘り込みとしては浅い。

覆土は、色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。

所 見 炉が検出されなかったこと、床面が軟弱であったことから竪穴状遺構とした。時期は出土遺物から弥生時代後期と判断した。

I009

検出地区 F8-60-1G。

遺 構 隅九長方形の遺構。床面はロームを踏みかためた床で、壁は斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に10層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺 物 覆土上層から数点出土。

所 見 炉が検出されなかったこと、出土遺物が少量であることから竪穴状遺構とした。時期は出土遺物から弥生時代後期と判断した。

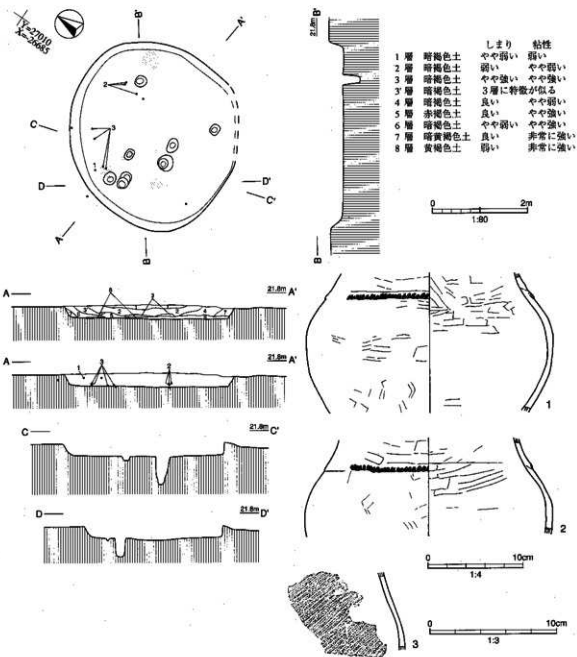


図101 I010

表62 I010遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調成	胎土	遺存	備考
1	弥生甕 外面 内面	—×—(148) 最大径(260) 胴部断面楕円状に膨らむ 輪積み裏を利用した段を有し下端に縄文原体の押圧 胴部ヘラナデ	暗褐色 暗褐色	砂粒含 橙色粒含	胴部～ 胴部片	焼熱によるひび割れ 外面コゲ状付着物 スス多量
2	弥生甕 外面 内面	—×—(148) 最大径(260) 輪積み裏を利用した段を有し下端に縄文原体の押圧 胴部ヘラナデ	暗褐色 暗褐色	砂粒含 橙色粒含	胴部～ 胴部片	外面コゲ状付着物 No.1と同一個体
3	弥生甕 外面 内面	—×— 外面 附加糸縄文 ナデ	暗褐色 暗褐色	砂粒含	胴部片	外面スス付着

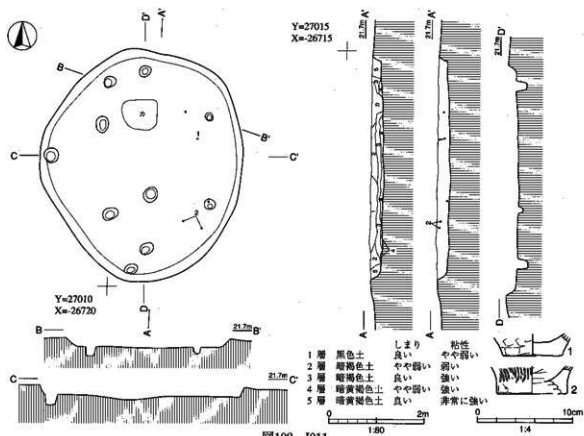


図102 I011

表63 I011遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×60×(24) 外面 ヘラ削り 内面 ナデ	暗褐色	砂粒含	底部片	内外面スス付着
2	弥生 甕	-×(74)×(30) 木葉痕 外面 附加条縄文 ヘラ削り 内面 ナデ	暗赤褐色	砂粒含	底部片	

I010

検出地区 F8-9-4G。

遺構 不整形の遺構。床面はソフトロームの床で軟弱である。壁は斜めに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。

所見 炉が検出されなかったこと、床面が軟弱であったことから堅穴状遺構とした。時期は出土遺物から弥生時代後期と判断した。

I011

検出地区 F8-12-2G。

遺構 不整形の遺構。床面はソフトロームの床で軟弱である。壁はゆるやかに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に5層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。

所見 炉が検出されなかったこと、床面が軟弱であったことから堅穴状遺構とした。時期は出土遺物から弥生時代後期と判断した。

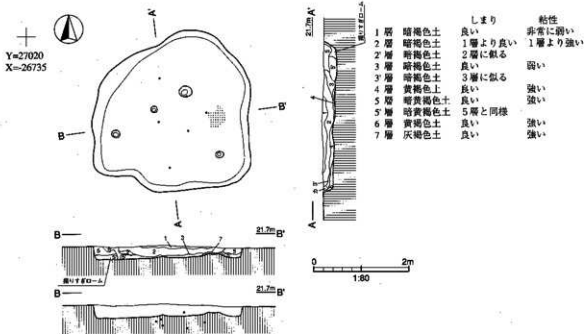


図103 I012

I012

検出地区 F8-24-2G。

遺構 不整形の遺構。床面はソフトロームの床で軟弱である。

覆土は、色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 炉が検出されなかったこと、床面が軟弱であったことから堅穴状遺構とした。時期は出土遺物から弥生時代後期と判断した。

表64 弥生・古墳時代遺構一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
I008	F7-82-1	不整形 3.74×3.99×0.46 主軸 N-31°-W	色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの床で軟弱 斜めに立ち上がり掘りこみとしては浅い	床面直上から覆土層にかけて少量出土	
I009	E8-60-1	隅丸長方形 2.35×2.00×0.32 主軸 N-69°-E	色調を基本に10層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ロームを踏みかためた床で斜めに直線的に立ち上がる	覆土上層から数点出土	
I010	E8-9-4	不整形 4.02×3.52×0.26 主軸 N-57°-E	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ソフトロームの床で軟弱 斜めに立ち上がる	床面直上から覆土層にかけて少量出土	
I011	F8-12-2	不整形 4.90×4.24×0.18 主軸 N-0°	色調を基本に5層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ソフトロームの床で軟弱 ならだかに立ち上がる	床面直上から覆土層にかけて少量出土	
I012	F8-24-2	不整形 -X-X-	色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ソフトロームの床で軟弱	覆土中から少量出土	

(4) 土坑

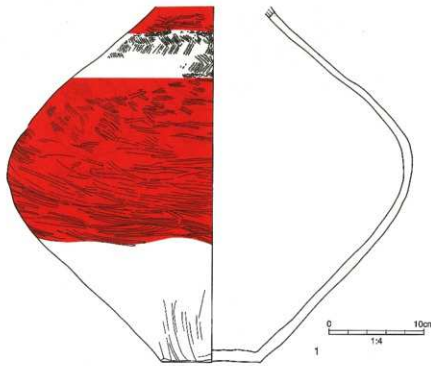
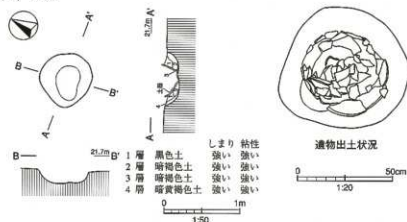


図104 D085

D085

検出地区 F8-13-2。台地北側の縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 不整形の土坑で、底部はほぼ平坦。壁はゆるやかに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に4層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 大型の壺型土器が倒れた状態で出土。

所見 出土遺物、出土状況から弥生時代後期の土器棺墓と考えられる。

表65 D085遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生壺	外側 頸部へラ磨き 横縦へラ磨き 内面 器面剥離のため不明	胴部そろばん玉状に中央が張る 結節3段→RL+LRの波状構成2段→結節3段→	橙褐色	砂粒 白色粒舎	2/3	器面剥離・磨耗 著しい 赤彩

D086

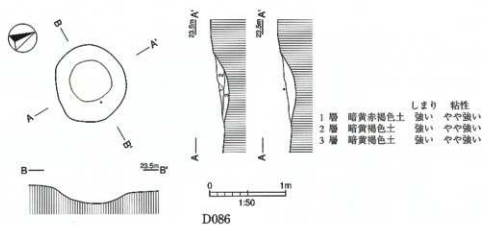
検出地区 H8-98-3。台地南側縁辺部、平坦面から斜面が始まる地点に位置する。

遺構 不整形の土坑で、浅い凹み状のピットである。壁はゆるやかに立ち上がる。

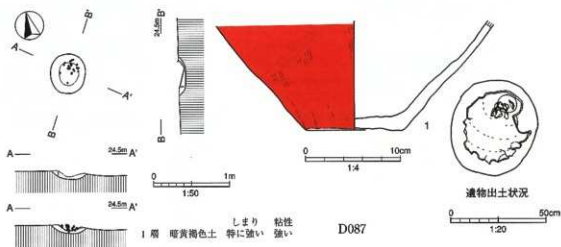
覆土は、色調を基本に3層に分層。上層で焼土層が検出された。人為的堆積か。

遺物 確認面で小破片が1点出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の土坑と判断した。土器棺墓か。



D086



D087

図105 D086・D087

表66 D087遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 澁成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ(縦位)と思われ るが器面剥離・磨耗のため残存は一部 内面 器面剥離のため不明 底部 やや上げ底		暗橙褐色	砂粒多	1/4 以下	胴部～底部遺存 赤彩

D087

検出地区 H9-17-3。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 楕円形の土坑で、浅い凹み状のビットである。底部はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

覆土は、色調を基本に1層に分層。人為的堆積か。

遺物 大型の壺型土器が倒れた状態で出土。

所見 出土遺物、出土状況から弥生時代後期の土器棺墓と考えられる。

D088

検出地区 H9-18-3。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 不整形の土坑。大部分は風倒木痕のため形状については不明である。

覆土は、色調を基本に3層に分層。

遺物 覆土中から小破片が数点出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の土坑と判断した。

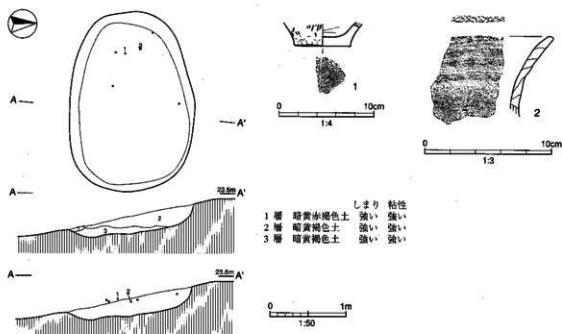


図106 D088

表67 D088遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	一×(60)×(24) 輪積 外面 附加糸縄文 下端-ナデ 内面 ナデ スス付着 底部 平底・木葉痕	暗赤褐	粗砂粒少	胴部~ 底部	
2	弥生 壺	一×一×一 輪積 外面 口唇上-附加糸縄文 口縁部-輪積痕を残し頸部までナデ 内面 ナデ後横位ヘツミガキ 口縁-外反	橙褐	砂粒多	口縁部 破片	

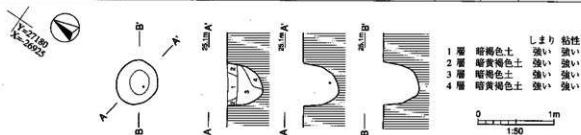


図107 D089

D089

検出地区 H9-83-2。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 楕円形の土坑で、底部は丸みを帯びたやや軟弱な床である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に4層に分層。何度かの掘り返しがあったものと思われる。

遺物 覆土中から小破片が1点出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の土坑と判断した。

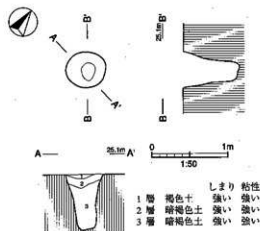


図108 D090

D090

検出地区 H9-73-4。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 楕円形の土坑で深い。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。

覆土は、色調を基本に3層に分層。自然堆積と想定される。

遺物 覆土中から小破片が1点出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の土坑と判断した。

表68 弥生・古墳時代土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D085	F8-13-2	小竪円形 0.68×0.64×— 主軸 N-52°-E	色調を基本に4層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		底部はほぼ平坦 ゆるやかに立ち上がる 土器棺墓と考えられる	大型の甕形土器が出土	
D086	H8-98-3	不整形 1.02×0.92×0.08 主軸 N-65°-W	色調を基本に3層に分層。上層で焼土層あり 人為的堆積か?	
		浅い凹み状のビットでゆるやかに立ち上がる	確認面で1点出土	
D087	H9-17-3	楕円形 0.52×0.46×— 主軸 N-14°-W	色調を基本に1層に分層。人為的堆積か?	
		浅い凹み状のビットで底部はほぼ平坦でゆるやかに立ち上がる 土器棺墓か	大型の甕形土器が出土	
D088	H9-18-3	不整形 2.38×1.64×0.42 主軸 N-87°-W	色調を基本に3層に分層	
		大部分は黒銅木炭のため形状については不明である	覆土中から小破片が数点出土	
D089	H9-83-2	楕円形 0.60×0.54×0.46 主軸 N-57°-E	色調を基本に4層に分層。何度かの掘り返しがあったものと思われる	
		底部は丸みを帯びたやや軟弱な床 ほぼ垂直に立ち上がる	覆土中から1点出土	
D090	H9-73-4	楕円形 0.97×0.52×0.74 主軸 N-35°-W	色調を基本に3層に分層。自然堆積と想定される	
		柱穴状の上坑で深い 底面はほぼ平坦で急傾斜で立ち上がる	覆土中から1点出土	

第2項 古墳時代中期

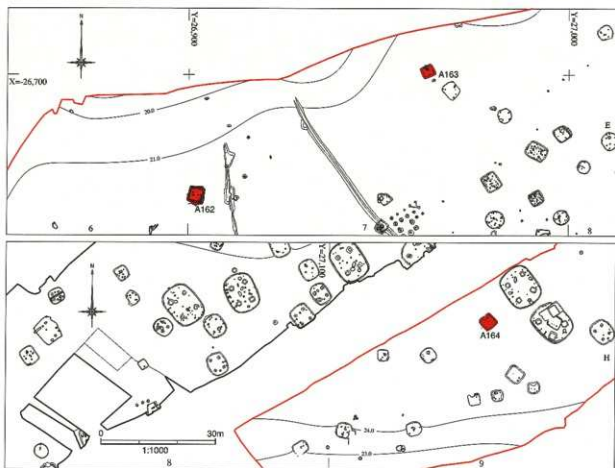


図109 中期・後期遺構配置図

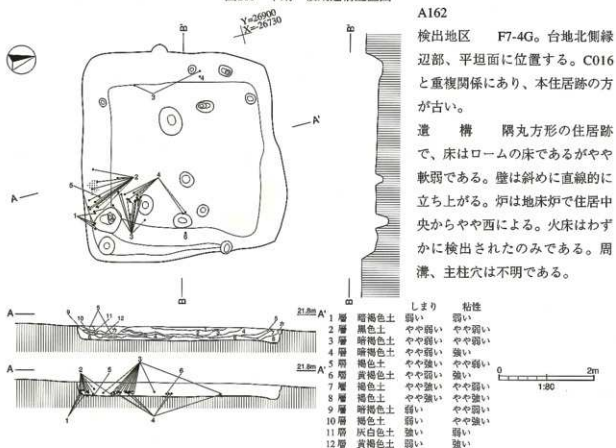


図110 A162

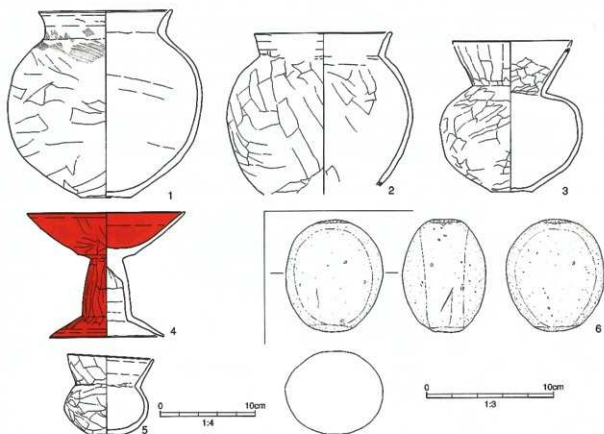


図111 A162(2)

表69 A162遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	140×52×198 口縁やや外反 球胴状 底部小さな平底 ハケ調整後ヘラにより丁寧に平滑化される 削りよりはナデに近い調整	暗赤褐 管	砂粒小含	略完形	
2	土師器 甕	144×-×(171) 口縁やや外反 球胴状 ハケ調整後ヘラ削り(No.1より粗い調整)	暗赤褐 管	砂粒小含	2/3	外面コケ状付着物
3	土師器 壺	(126)×22×160 小さな平底 ヘラ削り調整 口縁 内外面上端ナデ	橙褐	管	2/3	
4	土師器 高坏	(160)×120×132 坏部下端に稜をもつ 脚部 いわゆるエンタシス形の柱状脚部 口縁 内外面ナデ後ヘラ磨き 脚部 外面酸ヘラ削り 内面ヘラ削り 裾部 外面ヘラ削り 下脚ナデ後磨き 内面ナデ	橙褐	砂粒含	3/4	赤彩
5	土師器 小型塔	90×30×85 口縁 やや外側に開く 外面上端ナデ 胴部 楕円状ヘラ削り調整内面ナデ	暗茶褐	砂粒含	完形	
6	石器 磨石 (高支石)	89×76×66 重量651.7g 整った楕円形を呈する 全面に研磨痕が残され特にいったんは強く磨かれ平滑である もう一端には明瞭な高支痕があり高支石としても使用されたと思われる			完形	

覆土は、色調を基本に12層に分層。床面に少量の炭化物を検出、人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土中層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から古墳時代中期の住居跡と判断した。

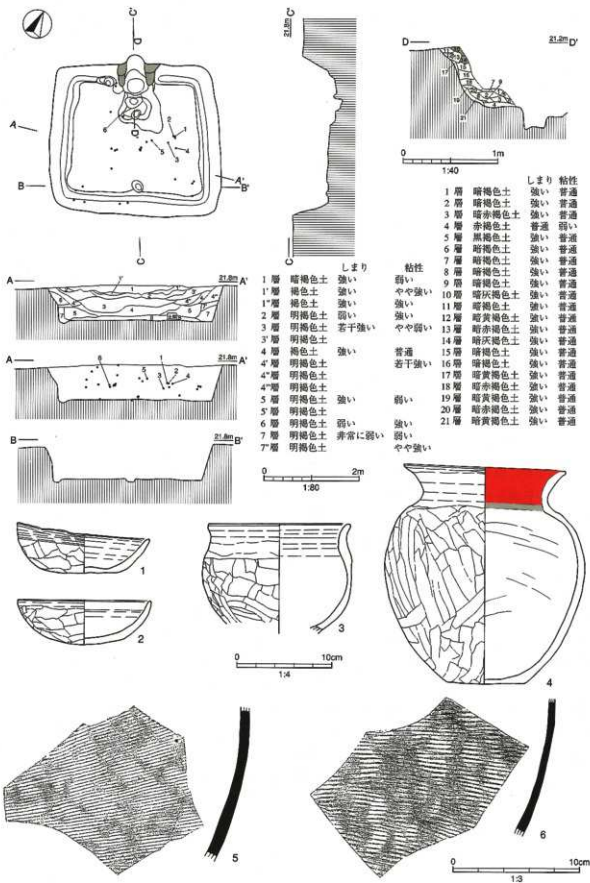


図112 A163

表70 A163遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法蓋 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 調成	胎上	遺存	備考
1	土師器 坏	140×80×54 外面 口縁 横ナデ 体部 ヘラ削り 底部 ヘラ削り 内面 ナデ	褐 普	砂粒含	略完形	
2	土師器 坏	140×40×47 底部 丸底 口縁 横ナデ 体部 ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	橙褐 普	砂粒含	略完形	内面タール状付 着物
3	土師器 甕	150×-×(115) 広口 外面 横ナデ 内面 ナデ 胴上部 ヘラ削り	明橙褐 普	砂粒含	3/4	
4	土師器 甕	170×90×231 口縁外反 胴上部がやや張る 外面 口縁・胴部 横ナデ 内面 ナデ 胴部ヘラ削り	橙褐 悪	粗砂粒多 含	略完形	胴部内面にタール 状付着物 黒 斑有 赤影?
5	須恵器 甕	-×-×- 平行タタキ	青灰 普		胴部片	
6	須恵器 甕	-×-×- 平行タタキ	灰 普		胴部片	

A163

検出地区 E7-70G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 方形の住居跡で、床はロームの床で全体的によく踏み固められ硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドは北壁中央に位置する。両袖とも残存していた。燃焼部に小穴を検出、煙道は急傾斜で壁をわずかに切り込むような状態であった。周溝はほぼ全周する。主柱穴は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から古墳時代後期～奈良時代の住居跡と判断した。

A164

検出地区 H9-44G。台地南側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 方形の住居跡で、床はロームを踏み固めた床で、住居跡中央はやや軟弱であった。壁はほぼ垂直に立ち上がる。カマドは北壁中央に位置する。両袖とも残存し、遺存状況は良好であった。煙道は急傾斜で壁をわずかに切り込むような状態であった。周溝はほぼ全周する。主柱穴は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中層までに集中して出土。全体の出土量としては少ない。竈内から甕形土器が倒れる状態で出土した。また覆土中から黒曜石のフレイクが数点出土した。

所見 出土遺物から古墳時代後期～奈良時代の住居跡と判断した。

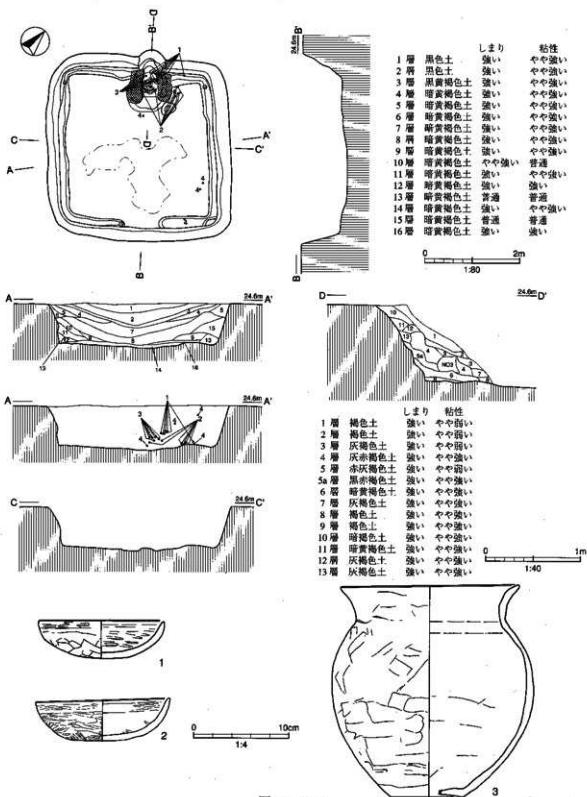


図113 A164

表71 A164遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	口縁直立気味で端部やや内湾 丸みをもつ 平底 外面 口縁ナデ 体部ヘラ削り 内面 ナデ後ヘラ削り	132×40×40	橙褐色 黄	粗砂粒 白色粒	略完形	内外面スス及び タール状付着物

2	土師器 坏	140×60×46 外面 口縁ナデ 内面 ナデ後ヘラ磨き	口縁やや直立気味 体部丸みをもつ 丸底 体部ヘラ削り後全体に粗いヘラ磨き	褐～ 暗赤褐 良	粗砂粒 橙色粒	略完形	黒斑有
3	土師器 甕	188×(77)×226 外面 口縁・頸部ナデ 内面 口縁・頸部ナデ	口縁外反 頸部やや直立気味 丸胴 胴部 ナデに近いヘラ削り	茶褐～ 暗茶褐 普	粗砂粒 橙色粒	略完形	

表72 古墳時代 竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A162	F7-4-1	隅丸方形 4.35×4.11×0.27 主軸 N-75°-W	床面 ロームの軟弱な床でほぼ平坦 壁 斜めに直線的に立ち上がる	地床炉 住居跡中央から やや西による 周溝 不明 主柱穴 不明
		床面直上～覆土中層にかけて多量に出 土	色調を基本に12層に分層。床面に炭化物少 量を検出。人為的な埋戻しが想定される	
A163	E7-70-2	方形 3.15×3.51×0.72 主軸 N-26°-W	床面 ロームを踏み固めた硬い床 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 0.21m 主柱穴 2本
		床面直上～覆土上層にかけて少量出 土	色調を基本に7層に分層。人為的な埋戻し が想定される	
A164	H9-44-2	方形 3.84×3.80×0.89 主軸 N-41°-W	床面 ロームをの硬い床で、住居中央はや や軟弱 壁 斜めに急傾斜で立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 0.19m 主柱穴 検出されず
		床面直上～覆土中層にかけて集中的に 出土。全体の出土量は少ない	色調を基本に16層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	

第3節 奈良・平安時代

栗谷遺跡Ⅲ地区における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡25軒・掘立柱建物跡7棟・土坑13基・その他の遺構7基が検出されている。

栗谷遺跡Ⅲ地区において報告する地点は台地の東側先端部分の一角、南側縁辺部の一部と北側縁辺部の大部分とに分かれている。今回は東側先端部分の4軒、南側縁辺部分の4軒、そして北側縁辺部分の17軒を報告することになる。東側先端部分の4軒は第2分冊の小結の部分でA群とした地区で、第2分冊で報告した地区と併せてA群を形成する事になる。南側縁辺部の5軒は、同じく第2分冊の小結の部分でB群とした地区で、第1分冊・第2分冊で報告した地区と併せてB群を形成する事になる。北側縁辺部分の17軒は、同様にD群とした地区で今回初めて報告する地区となる。D群は、さらに2群に分かれる可能性がある。

また、今回報告する掘立柱建物跡7棟は、すべて北側縁辺部分、つまりD群からの検出となる。竪穴住居跡同様、さらに2群に分かれて立地している。

その他の遺構については基本的には土坑であるが、掘立柱建物跡を想定できるもの、あるいは数基の土坑をセットとして捉えた方が妥当であると判断されたものについては遺構として取り上げた。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表を参照されたい。

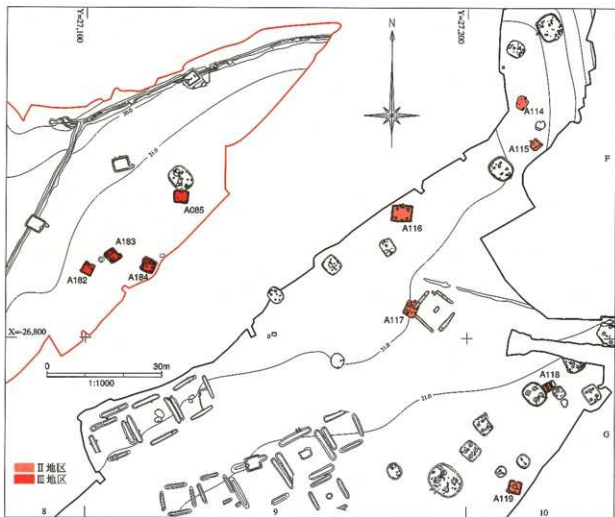


図114 奈良・平安時代遺構配置図(A群)

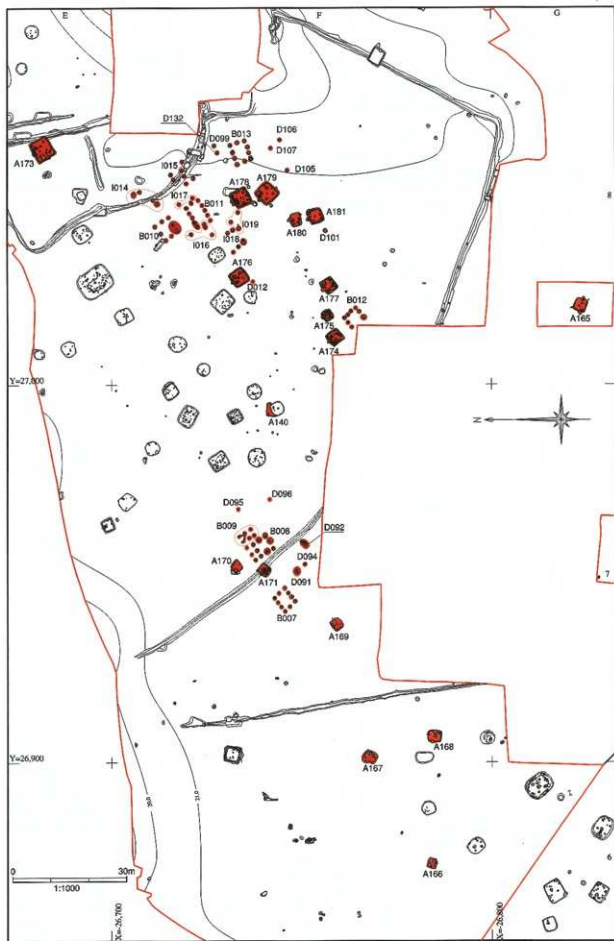


图115 奈良・平安時代遺構配置図(D群)

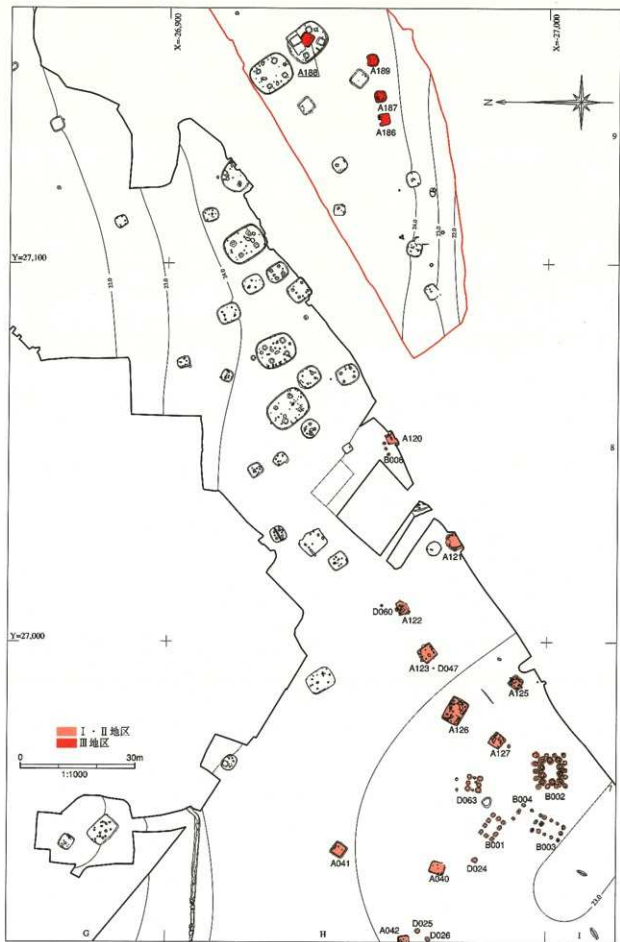
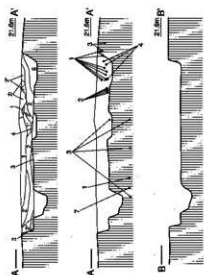
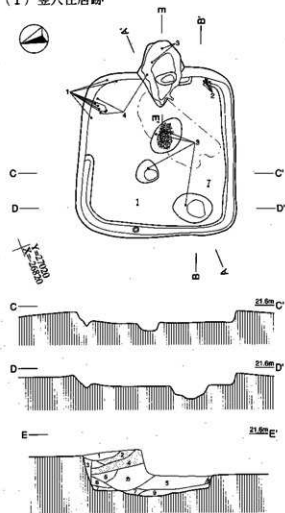
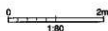


图116 奈良·平安时代遗构配置图(B群)

(1) 竪穴住居跡



	しまり	粘性
1層	黒色土	強い 弱い
1'層	黒色土	
2層	暗褐色土	強い 強い
2'層	暗褐色土	
3層	暗褐色土	強い 強い
4層	暗褐色土	弱い 強い
5層	暗褐色土	



	しまり	粘性
1層	褐色土	やや強い 普通
2層	暗赤褐色土	やや強い 普通
3層	暗褐色土	やや強い 普通
4層	暗赤褐色土	やや強い 普通
5層	黒色土	強い やや強い
6層	黒褐色土	やや強い やや強い
7層	暗褐色土	やや強い やや強い
8層	暗赤褐色土	やや強い やや強い
9層	黒黄褐色土	やや強い やや強い

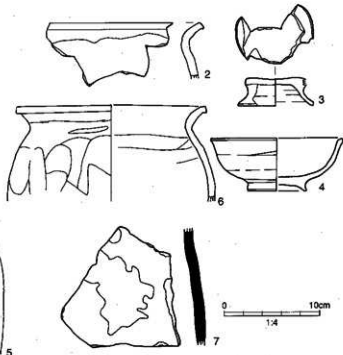
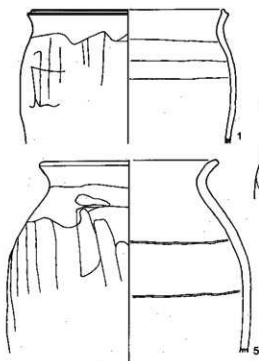


図117 A165

表73 A165遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	210×-×(141) 全体ロクロ成形 頸部-ナデ 胴部上半-縦位のヘラケズリ(内面は横位のナデ)	赤褐色 凸稜 凸稜	普	口縁片	
2	土師器 甕	-×-×(65) 口縁・頸部-ナデ 胴部上半-ヘラケズリ	赤褐色 凸稜 凸稜		口縁片	
3	土師器 高台付坏	-×(80)×(29) 脚部-内外ともに丁寧に磨いている	橙褐色 普	緻密	底部片	
4	土師器 高台付坏	(139)×62×56 全体ロクロ成形	橙褐色 普	普		
5	土師器 甕	(192)×-×(208) 全体輪覆 口縁・頸部-ナデ 胴部-縦位のヘラケズリ 内面 横位・斜位のヘラケズリ	赤褐色 凸稜 凸稜	普	口縁片	
6	土師器 甕	200×-×(121) 頸部-ナデ 胴部上半-縦位のヘラケズリ	橙褐色 普	普	口縁片	
7	須恵器 甕	-×-×- 胴部上半-タタキ目 一部磨いた部分有り	橙褐色 普		胴部片	

A165

検出地区 G8-23G。台地中央、平坦面に位置する。

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面が住居跡中央で検出される。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。主柱穴については不明である。竈は住居東壁はほぼ中央で検出されたが両袖ともなく、すでに壊されていた状態であった。また住居跡中央で地床炉1基も検出している。

覆土は、色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中に小破片を中心に比較的多量に出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断した。他の奈良・平安期の住居跡から離れ、孤立して立地していること、竈・炉両方を併せ持つことなどから集落の中で特殊な性格を考えなくては行けないだろう。あるいは鍛冶工房跡などかもしれない。

A166

検出地区 G6-79G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 ロームを踏み固めた床で、全体的に硬いしっかりとした床である。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。周溝は検出されず主柱穴については不明である。竈は住居南隅で検出された。両袖とも残っていて、遺存状況は比較的良好であった。コーナー竈でしかも南竈である点、注目される。

覆土は、色調を基本に23層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。覆土上層から墨書「竹野」と書かれている土師器の坏が出土している。また、覆土中から縄文時代後期の深鉢の破片も少量ながら出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断した。近隣の奈良・平安時代の住居跡としてA167があるが、A167もコーナーに竈を持つ。該期の集落展開を考える上で注目される。また覆土中数点

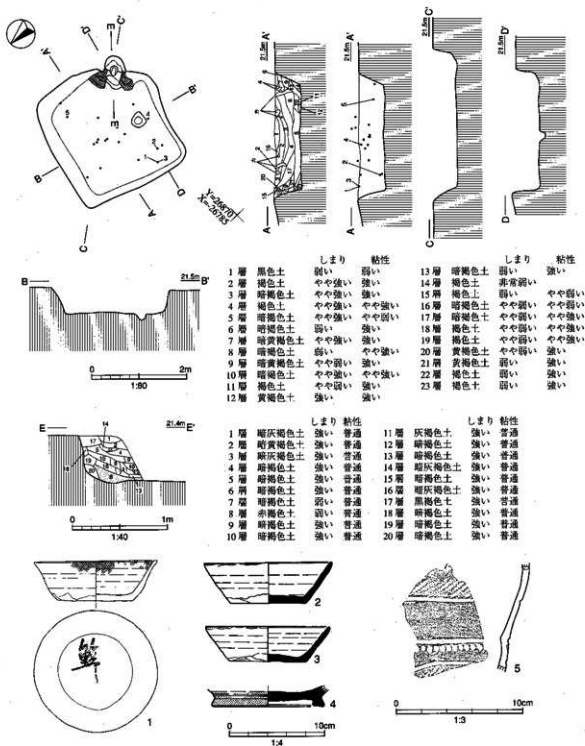


図118 A166

出土の縄文時代は、本住居跡が立地する地区が、縄文時代の遺構の比較的集中している地点であることと、遺物の包含層の地区があることから後世の流れ込みによるものと考えられる。

表74 A166遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	130×80×44 ロクロ成形 底部ヘラ削り 口縁外反 体部下丸みをもつ 外面 口縁~体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐~ 明褐 青	粗砂粒 赤色粒含	完形	墨書「竹野」 口縁タール状付 着物 被熱のため びび割れ多い
2	須恵器 杯	130×80×44 ロクロ成形 底部ヘラ削り 体部中位にやや丸みを帯び 口縁立ち上がる 外面 口縁~体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	灰褐 青	粗砂粒含	完形	
3	須恵器 杯	132×82×37 ロクロ成形 底部ヘラ切り 体部外縁に口縁やや立ち上 がり気味 外面 口縁~体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	灰褐 青	粗砂粒 褐色粒含	完形	
4	須恵器 高台付壺	一×台部径118×(22) ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 高台部「ハ」の字状 歪みあり	灰茶褐 良	砂粒 黒色粒含	底部片	自然輪
5	縄文 深鉢	一×一×一 上部に孔あり 括れをもつ 外面 LR単節縄文施文後平行沈線 沈線間には磨き 下位の沈線下には 円形刺突列 更に弧状の沈線内LR単節縄文充填 内面 線なら磨き	暗赤褐 良	砂粒 褐色粒		

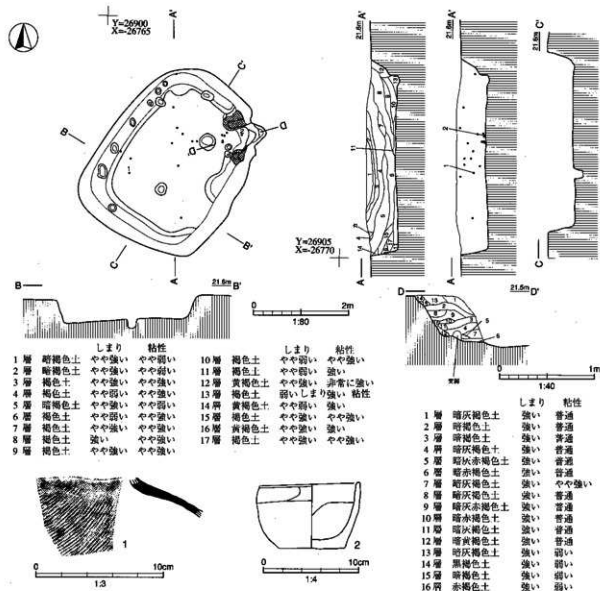


図119 A167

表75 A167遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 壺	-X-X- タタキ目	灰褐色	緻密	刷部片	
2	土師器 鉢	106×69×68 内面・外面ともヘラナデ 底部-木葉痕 体部外面については剥離が著しく不明	赤褐色 黒褐色		略完形	カマド内から 出土

A167

検出地区 F7-7G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 ロームを踏み固めた床で全体的に硬い床である。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上る。周溝は検出されず支柱穴については不明である。竈は住居東隅で検出された。両袖とも残っていない、遺存状況は比較的良好であった。

覆土は、色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土下層～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。A166同様、コーナーに竈のある住居跡であった。

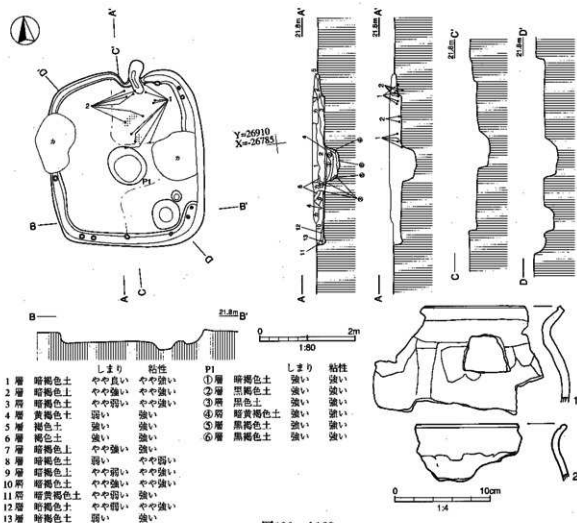


図120 A168

表76 A168遺物観察表

(単位mm)

No	種器別形	法景口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	-X-X- 口縁～頸部にかけて横位のナア調整 胴上半～腹位のヘラケズリ 内面 横位のナア	淡褐		口縁片	
2	土師器 甕	-X-X- 口縁～頸部～ヨコナア 胴部上半～腹位のヘラケズリ	褐黄		口縁片	

A168

検出地区 F7-9G. 台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 ロームを踏み固めた床で住居跡東側で比較的広範囲な硬化面を検出した。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝はほぼ全周する。主柱穴は検出されなかった。竈は住居北壁ほぼ中央で検出された。片袖のみ残っている状況であった。

覆土は、色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

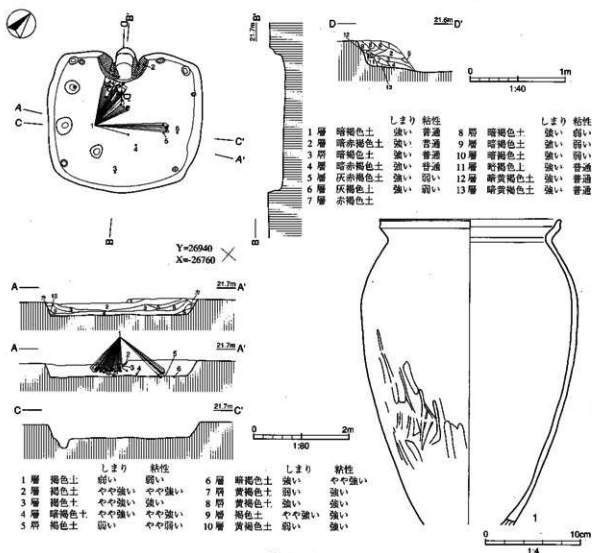


図121 A169

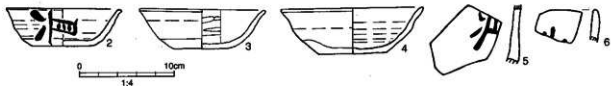


図122 A169(2)

表77 A169遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特長	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	194×-×- 口径部-内外とも横位のナア 口径部一つまみあげる 胴部中半~下半にかけてヘラミガキ	褐	白色 砂粒	2/3	
2	土師器 坏	121×64×41 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り 体部下端-ヘラケズリ	淡褐		完形	墨書 体部外面 横位「具」
3	土師器 坏	133×61×41 ロクロ成形 体部下端-内面は丁寧なミガキを施す 底部一回転余切り後回転ヘラ切り 体部下端-回転ヘラケズリ	褐	緻密	完形	
4	土師器 坏	150×70×48 ロクロ成形 回転ヘラ切り-回転ヘラケズリ 体部下端-回転ヘラケズリ	褐	粗	2/3	
5	土師器 坏	-×-×-	淡褐		体部片	墨書 体部外面 「因?」
6	土師器 坏	-×-×-	砂淡褐		口径片	墨書 体部外面 「□」

A169

検出地区 F7-36G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 ロームを踏み固めた床で、壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝検出されず
主柱穴は不明である。竈は住居北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残っていて遺存状況は比較的良好であった。

覆土は、色調を基本に10層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上~覆土上層にかけて多量に出土。覆土上層での出土が多い傾向にある。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

A170

検出地区 F7-54G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 ロームを踏み固めた全体的に硬い床で、壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は一部で検出。主柱穴は不明である。竈は住居北隅で検出され、両袖とも残っていて遺存状況は比較的良好であった。

覆土は、色調を基本に10層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上~覆土上層にかけて小破片が少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。A166・A167同様コーナーに竈を持つタイプの住居跡である。

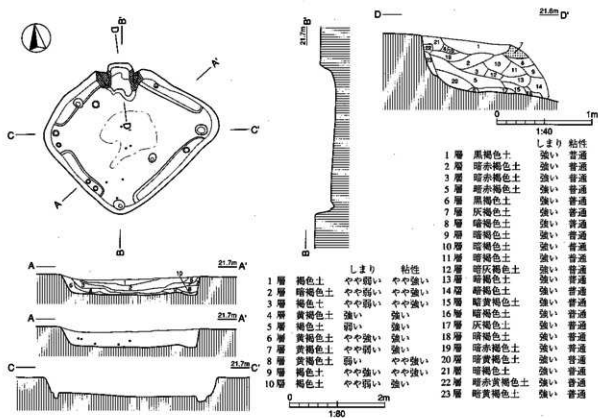


図123 A170

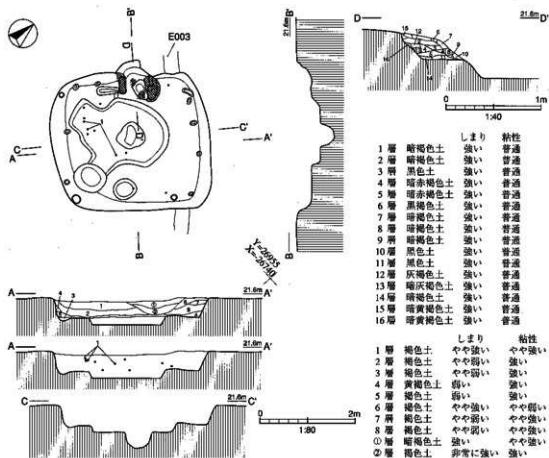


図124 A171

A171

検出地区 F7-54G。台地北側縁部、平坦面に位置する。E003と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。

また近隣の遺構として掘建柱建物跡B008などがある。

遺構 ロームを踏み固めた全体的に硬い床であった。住居中央は堀方として一段低くなっていて貼床となっていた。堀方の底部でさらに小穴を1基検出。壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。周溝は検出されず、主柱穴も検出されなかった。竈は住居北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残っていて、遺存状況は比較的良好であった。

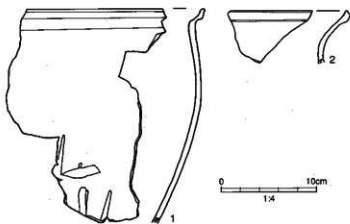


図125 A171(2)

覆土は、色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される。土層断面にて土坑を1基検出した。①・②は土坑のセクションとなる。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。堀方内から検出されたピットは住居内の位置や周囲が貼床されていた状況等から特殊な用途を考えなければならない。A165と同様、工房跡などかもしれない。また覆土中、土層断面によって検出された土坑は、近隣に掘建柱建物跡B008などとの関係も考慮すべきかもしれない。

表78 A171遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	-X-X- 外面 口縁-ナア 11唇をつまみあげる(常総型) 胴部下半-ヘラミガキ	褐色	粗 白色粒多	口縁片	
2	土師器 壺	-X-X- 口縁-折り返しによる複合口縁	黒褐色 良	緻密	口縁片	

A172

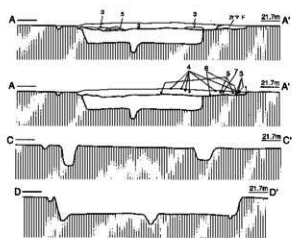
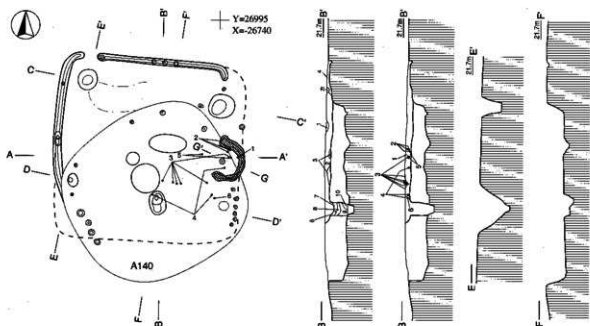
検出地区 F7-95G。台地北側縁部、平坦面に位置する。下層の弥生時代の竪穴住居跡A140と重複関係にある。

遺構 A140と重複する部分は黒色土の床、重複しない部分はロームの床であった。ロームの床の一部では、硬化面を検出。掘り込み浅く壁はなだらかに立ち上がる。周溝はロームの床の部分で検出されたが、重複する部分にも本来あったものと思われる。主柱穴は不明である。竈は住居東壁ほぼ中央で検出され両袖とも残っていて、遺存状況は比較的良好であった。

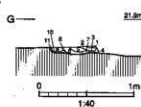
覆土は、色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。6から10層はピットの土層である。

遺物 床面直上から少量出土。床面直上から刀子出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。



層	土質	しまり	粘性
1層	褐色土	弱い	弱い
2層	暗褐色土	やや強い	弱い
3層	暗褐色土	やや弱い	弱い
4層	褐色土	やや強い	やや強い
5層	暗褐色土	やや強い	強い
6層	暗褐色土	やや弱い	やや弱い
7層	暗褐色土	やや強い	やや弱い
8層	暗褐色土	強い	弱い
9層	暗褐色土	弱い	やや強い
10層	暗褐色土	やや弱い	やや強い



層	土質	しまり	粘性
1層	暗赤褐色土	強い	普通
2層	暗褐色土	強い	普通
3層	暗褐色土	強い	普通
4層	暗褐色土	強い	普通
5層	黒褐色土	強い	普通
6層	暗褐色土	強い	普通
7層	赤褐色土	強い	普通
8層	暗赤褐色土	強い	普通
9層	暗赤褐色土	強い	普通
10層	暗褐色土	強い	普通
11層	暗灰赤褐色土	強い	普通

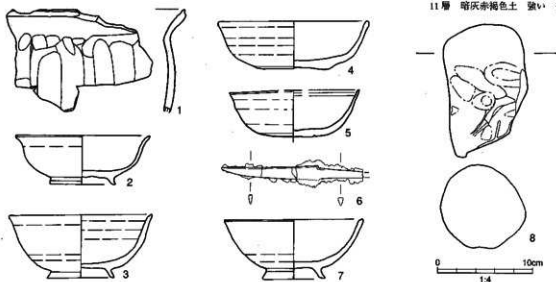


図126 A172

表79 A172遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	一×一×一 ロクロ成形 口唇内側をつまみあげる 口縁-内・外側とも横位のナデ 頸部-胴部-腹位のヘラケズリ				口縁片
2	土師器 高台付坏	140×台部径68×52 ロクロ成形 内面 丁寧なミガキを施す	橙褐色 良	密		
3	土師器 高台付坏	152×台部径73×64 ロクロ成形 体部外面-横位のヘラミガキ 内面 全体に丁寧なミガキを施す	褐		2/3	
4	土師器 坏	50×58×一 ロクロ成形 底部-回転糸切り後周辺ヘラ切り 内面 丁寧なミガキを施す 体部下端-回転ヘラケズリ	◎淡褐色 ◎橙褐色 良			
5	土師器 坏	136×50×50 ロクロ成形 底部-回転ヘラ切り 体部下端-ヘラケズリ 体部-内面に一条の沈線を施す			1/3	
6	鉄器 刀子	149×9.5×8 重量26.2g 149×3.5×5				
7	土師器 高台付坏	144×台部径65×65 ロクロ成形 内面 丁寧なミガキを施す	橙褐色 良	密	1/3	
8	土製品 支脚	上部径82×一×(136) 断面 隅丸方形 成形時の指頭圧痕あり	黒	粗 織維含む		

A173

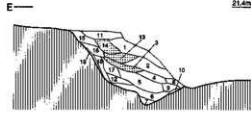
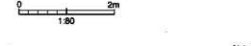
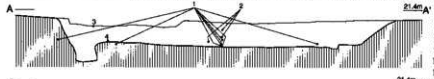
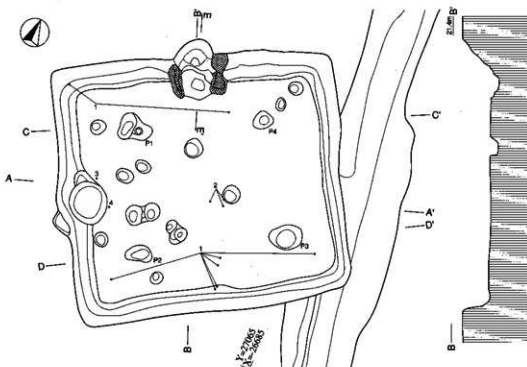
検出地区 E8-69G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。E004と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。

遺構 床はロームを踏み固めた全体的に硬い床で、壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝は全周する。主柱穴は4本柱でP1～P4である。柱穴の配置から拡張住居と考えられる。竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残っていた。遺存状況は比較的良好で、天井部もセクションから検出された。竈は住居廃絶時に壊されたと判断される。

覆土は、色調を基本に22層に分層。人為的な埋戻しが想定される。土層断面から土坑を1基確認。23～34層が土坑の土層となり、同様に35層～43層が溝の土層になる。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。床面直上から勾玉出土。

所見 出土遺物から、古墳時代後期～奈良時代の住居跡と判断した。



層	土質	しまり	粘性
1層	暗褐色土	弱い	やや弱い
2層	暗黄褐色土	やや強い	弱い
3層	暗褐色土	やや強い	やや強い
4層	暗黄褐色土	やや強い	やや強い
5層	暗褐色土	強い	強い
6層	暗黄褐色土	弱い	やや強い
7層	暗褐色土	やや強い	やや強い
8層	暗黄褐色土	やや弱い	強い
9層	暗黄褐色土	やや強い	強い
10層	暗黄褐色土	やや強い	強い
11層	黄褐色土	やや強い	強い
12層	黄褐色土	11層に似る	強い
13層	黄褐色土	やや弱い	強い
14層	黄褐色土	良い	強い
15層	暗黄褐色土	弱い	強い
16層	暗褐色土	やや弱い	やや弱い
17層	暗褐色土	16層に似る	強い
18層	暗黄褐色土	やや弱い	やや強い
19層	暗褐色土	やや強い	強い
20層	暗褐色土	15層と同じ	
21層	暗褐色土	弱い	弱い
22層	暗褐色土	強い	強い
	土殻		
23層	黒褐色土	やや弱い	やや弱い
24層	暗褐色土	23層より強い	弱い
25層	暗黄褐色土	やや強い	強い
26層	暗褐色土	やや強い	やや弱い
27層	暗褐色土	弱い	弱い
28層	暗黄褐色土	やや強い	強い
29層	暗褐色土	やや強い	弱い
30層	暗黄褐色土	弱い	やや弱い
31層	暗黄褐色土	非常に強い	弱い
32層	暗黄褐色土	若干強い	強い
33層	暗黄褐色土	非常に弱い	ボロボロ
34層	暗黄褐色土	弱い	若干強い
	津土殻		
35層	暗褐色土	やや弱い	弱い
36層	暗褐色土	やや強い	やや強い
37層	暗褐色土	36層に似る	強い
38層	暗褐色土	やや強い	弱い
39層	暗褐色土	38層より弱い	若干強い
40層	暗褐色土	強い	強い
41層	暗褐色土	40層より弱い	やや強い
42層	暗褐色土	強い	やや強い
43層	暗黄褐色土	強い	やや強い

図127 A173

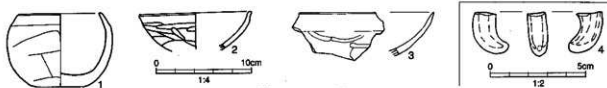


図128 A173(2)

表80 A173遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 碗	—×—×76 底部—丸底 口縁—内湾し体部の境に稜をもつ。ヘラケズリ 体部—横位のヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	昏暗褐 鈔褐 黄	黄	2/3	
2	土師器 坏	—×—×— 口縁—ナデ 体部—内外面とも丁寧なミガキを施す	褐良	緻密	口縁片	
3	土師器 坏	—×—×— 体部—口縁にかけて一段稜をもつ 口縁—ナデ 体部—ヘラミガキ 内面 丁寧なミガキを施す	褐良	緻密	口縁片	
4	石製品 勾玉	(22)×12×10	灰褐			

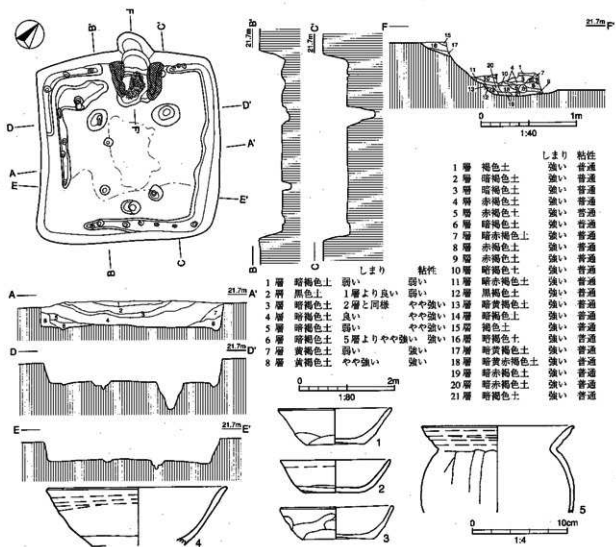


図129 A174

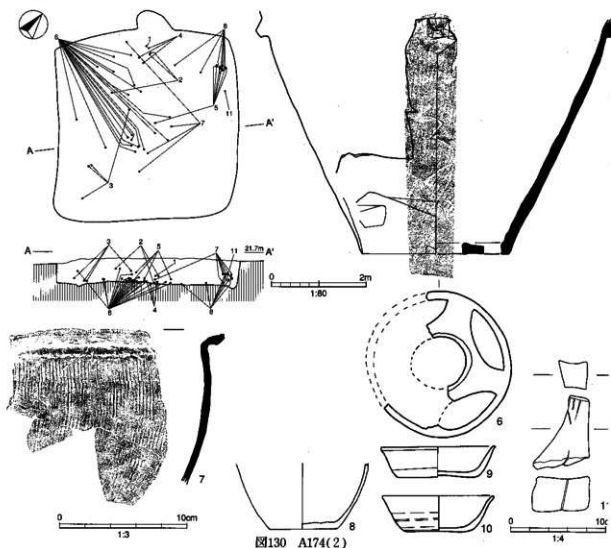


図130 A174(2)

表81 A174遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	底面一静止ヘラズリ 体部下端一静止ヘラズリ	120×63×38	淡褐 青	青	略完形	
2	土師器 坏	底面一回転ヘラズリ 体部下端一回転ヘラズリを行い、結果として体部に一段段をつくる	115×65×35	淡褐 青	青	完形	
3	土師器 坏	底面一回転糸切り 体部一ヘラズリ調整	120×75×35	淡褐 青	青	略完形	
4	土師器 坏	体部下端一ヘラズリ 内面「丁寧なミガキを施す	190×96×62	橙褐 良	緻密	3/4	
5	土師器 甕	胴部一縦位のヘラズリ	162×-×-	暗褐 青	青	口縁片	
6	須恵器 瓶	胴部一タタキ目	-×154×(249)	黒褐 青	青		

7	須恵器 壺	—X—X— 口縁—ナマ調整 胴部—タタキ目	灰褐色 青	青	口縁片
8	土師器 壺	—X70X— ロクロ成形 底部—静止ヘラケズリ	暗褐色 青	青	底部片 5と同一個体
9	土師器 杯	120×85×32 ロクロ成形 底部—回転糸切り後周辺ヘラ切り 体部下端—回転ヘラケズリ	淡褐色 青	青	完形
10	土師器 杯	118×67×48 底部—回転糸切り 体部下端—回転ヘラケズリ 内面 スス付着 灯明皿として使用	褐色 青	青	完形
11	石製品 甌石	73×60×33 4カ所に割痕あり			

A174

検出地区 F8-16G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた全体的に硬い床で、住居跡中央で硬化面を検出。壁もロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周し二重に巡る。主柱穴は4本柱でP1～P4である。竈は、住居跡北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残存し、遺存状況は比較的良好であった。

覆土は、色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される。土層断面から土坑を1基確認。

遺物 床面直上から覆土下層にかけて多量に出土。

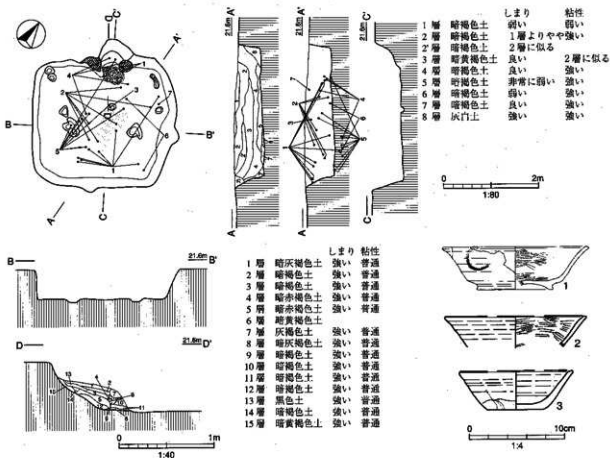


図131 A175

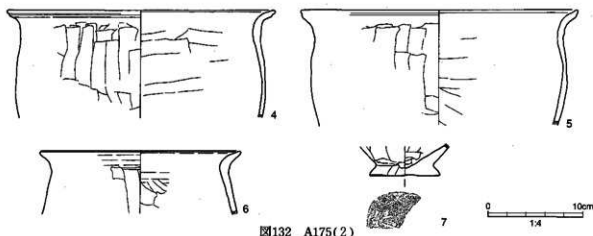


図132 A175(2)

表82 A175遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付杯	外面 ナデ 回転糸切り痕 内面 ヘラ磨き	(145)×80×45	橙褐色	砂粒少含	1/2	墨書(体部) 「□」
2	土師器 杯	外面 ナデ 内面 ヘラ磨き	(150)×-×(32)	橙褐色	砂粒含		口縁片
3	土師器 杯	外面 ナデ 下端ヘラ削り 内面 ナデ	(120)×60×41	赤褐色 暗褐色	砂粒含	1/3	
4	土師器 甕	外面 口縁・頸部 横ナデ 内面 口縁・頸部 横ナデ 胴部 ヘラ削り	(280)×-×(114)	暗褐色	粗砂粒多含		口縁片
5	土師器 甕	外面 口縁・頸部 横ナデ 内面 横ナデ 胴上半 ヘラ削り	(290)×-×(123)	赤黒褐色 暗褐色	粗砂粒多含		口縁片
6	土師器 甕	外面 横ナデ ヘラ削り 頸部「く」の字状 内面 横ナデ 斜めの強いナデか?	(210)×-×(67)	橙褐色	粗砂粒多含		口縁片
7	土師器 小型甕	外面 ヘラ削り 内面 指頭圧痕を残すので指によるナデ	-×(73)×(34)	褐色	粗砂粒多 小砂含		底部片

A175

検出地区 F8-16G。台地北側縁部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で硬化面が全面に広がる。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されず支柱穴は2本柱と考えられる。竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残存し遺存状況は比較的良好であった。

覆土は、色調を基本に8層に分層。床面直上から覆土下層にかけて広範囲に焼土層を検出。人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中から多量に出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。遺物の出土状況、覆土の堆積状況から焼失住居と想定される。

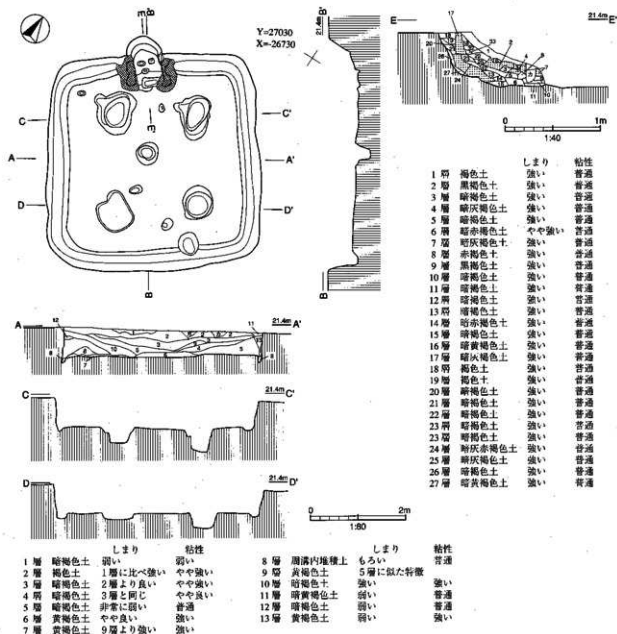


図133 A176

A176

検出地区 F8-24G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床。柱穴の外側の床がよりしっかりとしている。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周し主柱穴は4本柱と考えられる。竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残存し遺存状況は比較的良好であった。

覆土は、色調を基本に13層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。墨書土器4点出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

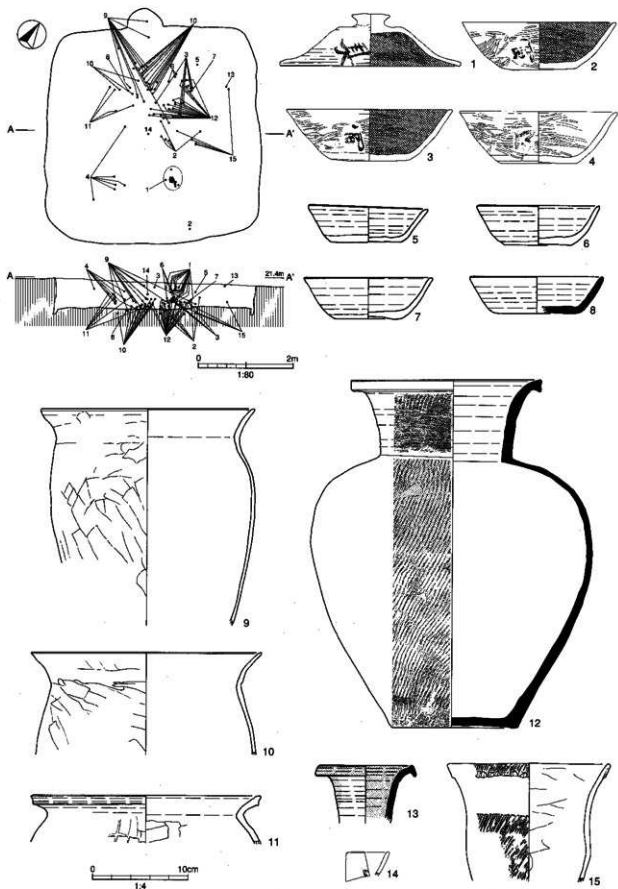


图134 A176(2)

表83 A176遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 蓋	蓋径(190)×つまみ径(40) ロクロ成形 外面天井部に稜をもつ 外面 天井部回転ヘラ削り 口縁端部は平坦に調整 内面 ヘラ磨き	暗褐色	砂粒 雲母多含	4/5	墨書「具」 外部外面 内黒
2	土師器 坏	161×78×51 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 下端は回転ヘラ削り後全体に疎らなヘラ磨き 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	略完形	墨書「富」 外部外面 内黒
3	土師器 坏	174×82×55 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 下端は回転ヘラ削り後全体に疎らなヘラ磨き 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	略完形	墨書「富」 外部外面 内黒
4	土師器 坏	166×80×56 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 下端は回転ヘラ削り後全体にごく疎らなヘラ磨き 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	略完形	墨書「得」 外部外面
5	土師器 坏	125×69×50 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 下端は回転ヘラ削り 内面 横ナデ	橙褐色	砂粒 雲母微量含	略完形	
6	土師器 坏	130×72×42 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 下端は回転ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	ヘラ書「口」 底部外面
7	土師器 坏	(136)×70×(44) ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 下端は回転ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	
8	須恵器 坏	(140)×(84)×(39) ロクロ成形 残存部回転ヘラ削り	灰褐色	粗砂粒 雲母含	1/3	
9	土師器 壺	224×-×(230) 口縁外反 外面 ナデ 胴部ヘラ削り 内面 ナデ	暗赤褐色	砂粒含	2/3	外面口コ状付着物
10	土師器 壺	(240)×-×(108) 口縁外反 頸部緩やかな「く」の字状 外面 ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒多含		口縁～ 胴部片
11	土師器 壺	(240)×-×(50) 口縁外面凹線状に調整 頸部「く」の字状 外面 横ナデ タタキ ヘラ削り 内面 ナデ	暗褐色	砂粒 雲母含		口縁片
12	須恵器 壺	200×134×370×297 口縁外反 外面 横ナデ タタキ ヘラ削り 内面 横ナデ ヘラナデ	灰茶褐色	砂粒含	略完形	自然釉
13	須恵器 長頸壺	(100)×-×(61) 折り返し口縁 口縁上端つまみ上げられる 折り返し部下端は外に開く	緑灰褐色	粗砂粒含		口縁片 自然釉
14	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	橙褐色	砂粒含		墨書「口」 外部外面
15	弥生 壺	(170)×-×(125) 折り返し口縁 口縁外反 外面 口縁・口唇・胴上半附加糸縄文 下端押圧 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	砂粒含		口縁～ 胴部片

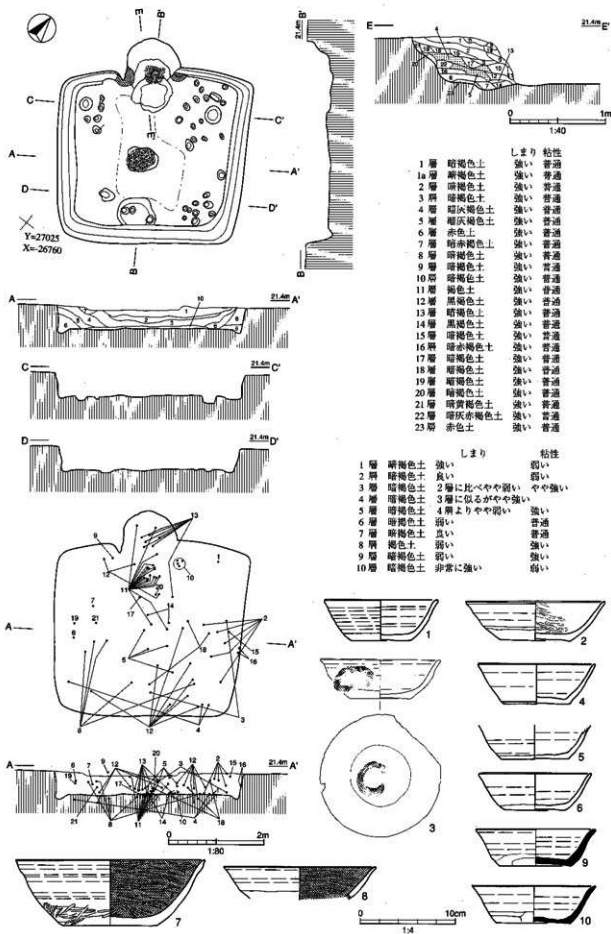


図135 A177

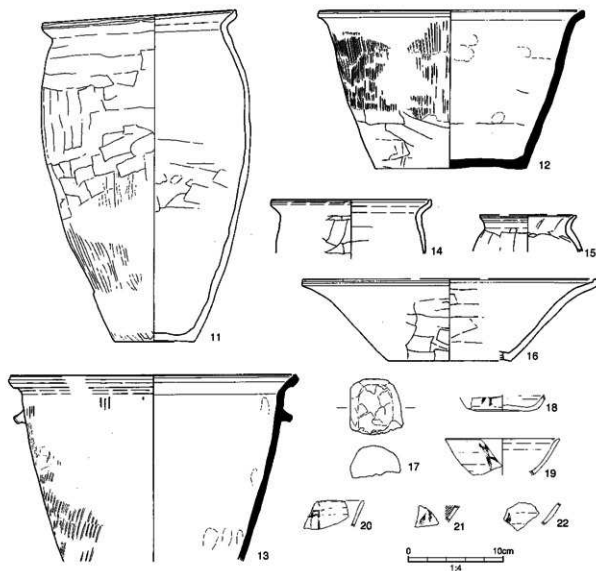


図136 A177(2)

表84 A177遺物観察表

(単位mm)

種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1 土師器 坏	外面 口縁～体部下半ナデ 内面 ナデ	120×62×44 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	橙 黄	砂粒含	略完形	
2 土師器 坏	外面 口縁～体部下半ナデ 内面 ヘラ磨き	146×73×43 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	橙褐 黄	粗砂粒含	4/5	
3 土師器 坏	外面 口縁～体部下半ナデ 内面 ナデ	126×62×41 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	橙褐 黄	砂粒 雲母含	略完形	墨書 □□□ 体部外面 底部外面
4 土師器 坏	外面 口縁～体部下半ナデ 内面 ナデ	124×70×43 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	橙褐 黄	砂粒 雲母含	2/3	
5 土師器 坏	外面 体部ナデ 下端回転ヘラ削り 内面 ナデ	—×70×(36) ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り	橙 黄	粗砂粒含	2/3	

6	土師器 坏	(119)×62×(39) ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端回転ヘラ削り 内面 ナデ	橙 黄	砂粒 褐色 雲母含	2/3	
7	土師器 坏	200×100×70 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端回転ヘラ削り後全体縁らにヘラ磨 き 内面 ヘラ磨き	橙褐 黄	砂粒含	1/2	内面一部内黒 スス付着
8	土師器 坏	(160)×—×(34) ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端回転ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	褐 黄	砂粒含	口縁片	内黒
9	須恵器 坏	126×75×39 ロクロ成形 口縁上端で緩やかにくびれ 外面 体部下端回転ヘラ削り・ヘラ切り 内面 ナデ	灰褐 黄	粗砂粒 多含	3/4	
10	須恵器 坏	(130)×(80)×39 ロクロ成形 回転糸切り後ヘラ削り 外面 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	暗茶褐 黄	粗砂粒 多含	1/2	
11	土師器 甕	206×84×350 口縁外反し上端をつまみ上げる 外面凹線状に調整 外面 ナデ 胴部ヘラ削り後粗いヘラ磨き 内面 ナデ	橙褐 黄	粗砂粒 多含	4/5	
12	須恵器 鉢	280×(160)×168 口縁外反 底部から口縁へ向けて直線的に傾斜 接み 外面 ナデ タタキ ヘラ削り 内面 ナデ 一部指頭圧痕があり	灰 黄	砂粒 雲母含	1/3	
13	須恵器 甌	(304)×—×(197) 台形状の突起をもつ 外面 ナデ 胴上半タタキ 内面 ナデ 一部指頭圧痕がみられる	暗褐～ 橙褐 黄	粗砂粒 多含	口縁～ 胴部片	
14	土師器 甕	170×—×(56) 口縁受け口状 上端つまみ上げ 外面凹線状に調整さ れる 外面 ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	暗赤褐 黄	粗砂粒 多含	口縁片	内外面スス付着
15	土師器 小型甕	(102)×—×(38) 口縁受け口状 上端つまみ上げ 外面凹線状に調整さ れる 外面 ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	砂粒褐 黄暗褐 黄	砂粒 雲母含	口縁片	
16	土師器 鉢	(310)×(130)×(87) 輪接み 底部から口縁に向けて大きく外傾する 外面 ナデ 胴部ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐 黄	粗砂粒含	口縁～ 体部片	
17	土製品 支脚	(53)×(58)×(33) 円錐形を呈すると思われる 頂部に平坦面を作出 ヘラによる削り ナデ調整	橙褐 黄	砂粒 白色粒 多含	胴部片	
18	土師器 坏	56×—×(18) ロクロ成形 回転糸切り 外面 ナデ 回転ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐 黄	砂粒 雲母含	底部片	曇書「□」 体部外面
19	土師器 坏	(120)×—×(38) ロクロ成形 口縁ナデ	橙 黄	砂粒含	口縁片	曇書「□」 体部外面
20	土師器 坏	—×—×— ナデ	橙褐 黄	砂粒含	口縁片	曇書「□」 体部外面
21	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 体部ナデ 内面 ヘラ磨き	褐 黄	砂粒 雲母 微量含	体部片	曇書「□」 体部外面 内黒
22	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 ナデ ヘラ削り 内面 ナデ	褐 黄	砂粒 雲母含	体部片	曇書「□」 体部外面

A177

検出地区 F8-23G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周するが支柱穴は不明である。竈は住居跡北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残存していた。遺存状況は比較的良好で、燃焼部に明瞭な火床も検出され、天井部もセクションから検出された。竈は住居廃絶時に壊されたかと判断される。また住居中央で地床炉1基も検出している。

覆土は、色調を基本に10層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。墨書土器6点出土。竈内から須恵器の甗が出土している。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。また、竈・炉両方を併せ持つことから集落の中で特殊な性格を考えねばならないだろう。栗谷遺跡においては他の類例としてA165があげられる。A165同様、鍛冶工房跡などかもしれない。

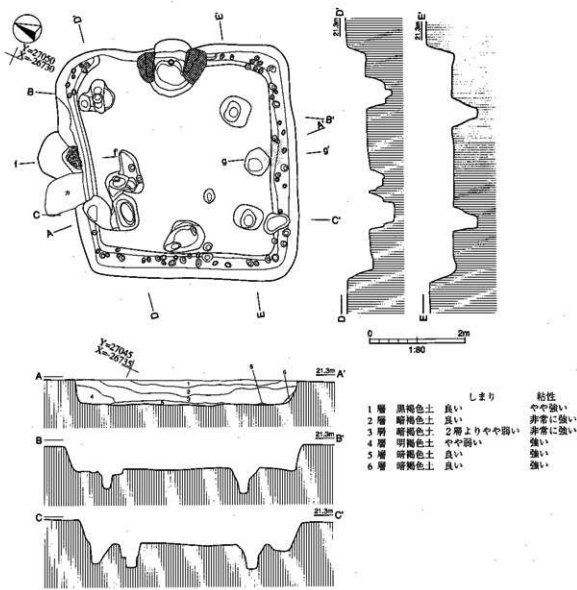
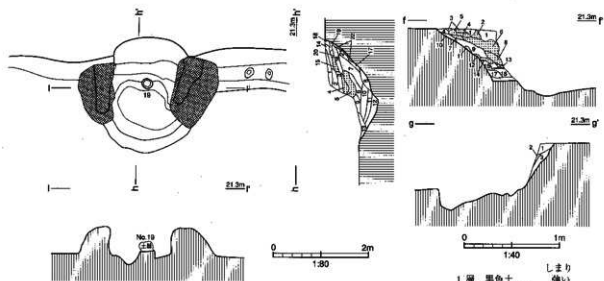


図137 A178



1層	暗褐色土	強い	12層	暗褐色土	強い
2層	暗褐色土	強い	13層	褐色土	強い
3層	暗褐色土	強い	14層	暗灰褐色土	強い
4層	暗灰褐色土	強い	15層	暗灰褐色土	強い
5層	灰褐色土	強い	16層	暗赤褐色土	強い
6層	赤褐色土	強い	17層	暗黄褐色土	強い
7層	暗赤褐色土	強い	18層	暗黄褐色土	強い
8層	暗褐色土	強い	19層	暗黄褐色土	強い
9層	暗褐色土	強い	20層	暗褐色土	強い
10層	暗褐色土	強い	21層	暗赤黄褐色土	強い
11層	暗赤褐色土	強い	22層	暗黄褐色土	強い

しまり

1層	黒色土	強い
2層	暗灰褐色土	強い
3層	暗灰褐色土	強い
4層	暗灰褐色土	強い
5層	灰褐色土	強い
6層	暗灰褐色土	強い
7層	暗灰褐色土	強い
8層	暗赤褐色土	強い
9層	暗黄褐色土	強い
10層	暗黄褐色土	強い
11層	暗黄褐色土	強い
12層	暗黄褐色土	強い
13層	暗赤褐色土	強い
14層	暗赤褐色土	強い
15層	暗赤褐色土	強い
16層	赤色土	強い
17層	暗褐色土	強い

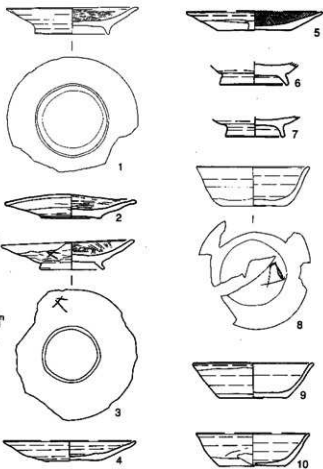
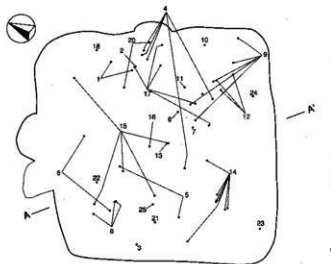


图138 A178(2)

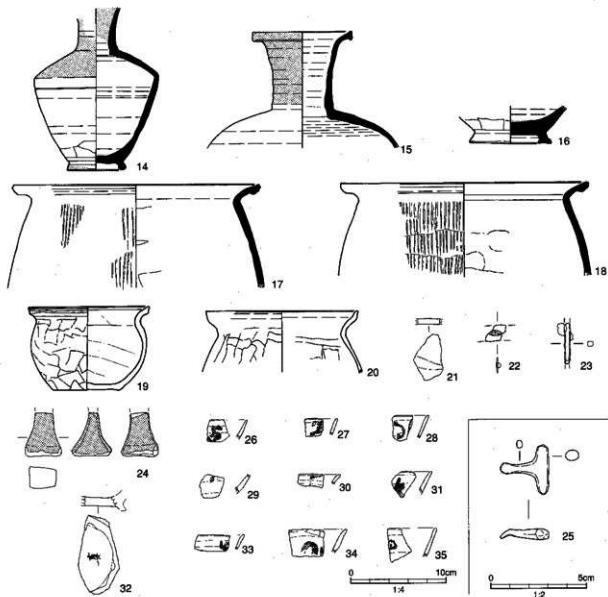


図139 A178(3)

表85 A178遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考								
1	土師器 高台付皿	138×高台径78×29 外面 口縁ヘラ削り 内面 ナデ後ヘラ磨き	ロクロ成形 回転糸切り後ヘラ削り 一部指銀裏 頸部～高台部ナデ	橙褐色	砂粒 雲母粒含	破完形	黒容 <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>□</td><td>□</td><td>□</td><td>□</td></tr> <tr><td>□</td><td>□</td><td>□</td><td>□</td></tr> </table> 体部・底部外面	□	□	□	□	□	□	□	□
□	□	□	□												
□	□	□	□												
2	土師器 皿	138×62×25 外面 器形歪みをもつ 内面 口縁～体部ナデ ヘラ磨き	回転糸切り 外周回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	橙褐色	砂粒 雲母含	破完形									
3	土師器 高台付皿	140×高台径68×32 外面 口縁ヘラ削り 内面 口縁ヘラ磨き	ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り I線～体部下ナデ 体部下端～頸部ヘラ削り	橙褐色	砂粒含	4/5	輪刻「×」 体部外面								
4	土師器 皿	140×60×22 外面 口縁～体部下ナデ 内面 口縁ナデ	ロクロ成形 回転ヘラ削り 体部下端～頸部ヘラ削り	橙褐色	砂粒含	1/3									

5	土師器 血	(144)×(80)×(20) ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部上半ナデ 体部下半～頸部ヘラ削り 内面 口縁ヘラ磨き	褐 青	砂粒含	口縁片	内黒
6	土師器 高台付皿	一×高台径73×(24) ロクロ成形 回転ヘラ削りか？ 高台「ハ」の字 状 外面 胴下半ヘラ削り 底部中央～高台部ナデ 内面 口縁ヘラ磨き	橙褐 青	砂粒含	底部片	
7	土師器 高台付皿	一×高台径62×(22) ロクロ成形 回転ヘラ削りか？ 高台部直線的 下端でやや開く 端部を平坦に調整 外面 胴ナデ ヘラ削り 底部中 央～高台部ナデ 内面 胴下半ヘラ磨き	橙褐 青	砂粒含	底部片	
8	土師器 坏	120×70×42 回転糸切り後外面ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端～頸部ヘラ削り 内面 口縁ナデ	褐 青	砂粒含	2/3	外面スス付着 器面磨耗 底部外面 墨書・線刻？
9	土師器 坏	(128)×70×37 底部ロクロ成形 回転糸切り後回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端～頸部ヘラ削り 内面 口縁ナデ	褐 青	砂粒 雲母含	2/3	
10	土師器 坏	(120)×(70)×34 底部回転糸切り後回転ヘラ削り 外面 口縁～体部上半ナデ 体部下半～頸部ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐 青	砂粒 雲母含	1/3	
11	土師器 坏	(116)×(62)×41 ロクロ成形 底部静止糸切りか？ 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端～頸部ヘラ削り 内面 口縁ナデ	褐 青	砂粒含		
12	須恵器 坏	136×53×42 ロクロ成形 底部が小さく口縁に向けて大きく開く 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端～頸部・底部ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗灰褐 悪	粗砂粒 多含	暗完形	
13	須恵器 坏	(132)×(70)×41 ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端～頸部・底部ヘラ削り 内面 口縁ナデ	灰黒褐 青	粗砂粒含	口縁片	
14	須恵器 長頸壺	一×高台径62×(72) ロクロ成形 底部回転糸切り後、外周回転ヘラ削り 。頸部が細く、張り出した肩部から底部に向かってすぼまる。	暗緑灰 青	小石 粗砂粒含	2/3	内外面 自然釉
15	須恵器 長頸壺	(104)×一×一 ロクロ成形 口縁外反 上端つまみ上げられる 肩部が張る	緑灰 青	粗砂粒含	口縁～ 胴部片	自然釉
16	須恵器 壺	一×高台径86×(40) 全体ロクロ 回転糸切り 高台「ハ」の字状 外面 底部中央・高台部ナデ 内面 胴部下端ナデ ヘラ削り	青灰 青	粗砂粒 多含	底部片	底部内面 自然釉
17	須恵器 壺	(260)×一×(109) 口縁外反 外面 口縁ナデ 胴上半タタキ 内面 口縁ナデ	灰茶褐 青	砂粒含	口縁片	
18	須恵器 壺	(260)×一×(99) 口縁外反 輪襷み 外面 口縁ナデ 胴上半タタキ 内面 口縁ナデ 一部に指頭圧痕	茶褐 青	砂粒含	口縁片	
19	土師器 小型壺	127×70×89 口縁外反 外面凹線状の調整 胴上半影らむ 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半縦ヘラ削り 胴下半斜めのヘラ削り後一 部ナデ 内面 口縁ナデ	赤褐 青	砂粒多含	完形	スス付着
20	土師器 壺	(160)×一×(66) 口縁受け口状 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗赤褐 青	砂粒多含	口縁片	スス付着
21	土師器 坏	一×一×一 回転ヘラ削り 器面磨耗のためはつきりしないがナデか？	明褐 悪	砂粒 雲母含	底部片	線刻 底部外面
22	鉄製品 刀子	長軸22×短軸16×厚さ5 重量1.5g				

23	鉄製品 角釘	長軸43×短軸5.5×厚さ5 重量4.5g					
24	石器 砥石	長軸46×短軸38×厚さ23 重量62.7g 4砥面 一端を欠損する よく使い込まれており研ぎ減っている				1/2	
25	青銅器 帯鉤	長軸25.5×短軸25×厚さ5.5 重量9.0g					
26	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
27	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
28	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	明褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
29	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	明褐色	砂粒 雲母含	胴部片		墨書 体部外面
30	土師器 坏	-X-X- 外面 ナデ 内面 ヘラ磨き	褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
31	土師器 坏	-X-X- 全体ナデ	明褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
32	土師器 高台付皿	-X-X- 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 全体ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母多含	底部片		墨書?
33	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
34	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	暗褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面
35	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 全体ナデ	褐色	砂粒 雲母含	口縁片		墨書 体部外面

A178

検出地区 F8-33G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。比較的大型の住居跡で、B010・B011・B012などの掘建柱建物跡に近接する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で全体的に硬い。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝は全周し主柱穴は4本柱である。

竈は、3基検出された。作り替えによるもので最終的に使用された竈は、北壁ほぼ中央で検出されたK1である。両袖とも残存し遺存状況は良好で、天井部もセクションから検出された。K2については燃焼部の一部と煙道部を検出した。燃焼部においては明瞭な火床を検出している。K3については煙道部のみの検出で、僅かながら熱を受け赤化している範囲を検出している。K2・K3とも袖部は残っていないかった。作り替えの際に壊したものと考えられる。

覆土は、色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻しが想定される。